

バトルファック部の転落

R18
ADULT ONLY
成人向け



著：nyoson 画：てつのひじ



純菜



姫莖

麗美



【目次】

第1章	怪物、誕生	1 頁目
第2章	地区予選大会	127 頁目
第3章	家畜化	232 頁目
第4章	V S チャンピオン	307 頁目
第5章	家畜化、加速	364 頁目
第6章	最後の戦い	431 頁目
エピローグ		495 頁目

第1章 怪物、誕生

一

練習相手を探すことになった。

心あたりを必死に探したものの、思い当たるのは夢野純菜（ゆめのじゅんな）だけだった。

家が隣同士の幼なじみ。

子供のころは一緒に遊んでいた女の子だ。彼女とは最近疎遠になっていたのだが、進学校であるこの学校の中で、自分が所属しているバトルファック部の練習相手になってくれそうな女の子は純菜以外にはいそうになかった。

「ま、でも仕方ないよな。新入部員まで全

滅じゃあ、四の五の言ってられない」

俺は一人でつぶやいた。

バトルファック部の先輩たちが卒業して、女性部員が誰もいなくなってしまった。この4月、新入部員獲得が俺たちに課せられた使命だったが、必死の勧誘もむなしく、結果は全滅。そんなこんなで、我がバトルファック部は10名の男性部員だけとなってしまった。

男だけでバトルファックができるはずがない。そんなのはバトルファック部ではなく同性愛部とでも名称を変えるべきだ。そんな冗談が乾いた笑い声と共にささやかれるようになった頃、部長から命令を受けたのだった。

「入部してくれないまでも、練習相手となっ

てくれる女子を探すのだ。いいかね、健二」

部長は明らかに焦っていた。

「それも仕方のないことだ。3ヶ月後には、3年生にとって集大成となる高等部総体の大会が待っている。それなのに、相手となる女子生徒がいなければ、満足に練習なんてできるはずがない。

俺は意を決して、純菜の姿を探すことにした。

小学校の時から純菜の行動パターンが変わっていなければ、放課後は図書室にいるはずだった。その予想はずれておらず、純菜はそこで静かに本を読んでいた。

*

「な、なんで私なの？」

頼みごとの回答は困惑した表情と共に返ってきた。

彼女はもはやトレードマークになった長い前髪と、今時浪人生でもかけないような大きな黒縁メガネをかけていた。

化粧もしておらず、地味という一言がこれほど似合う女子もない。不細工というわけではない。それでも決定的に目立たなかった。いつも猫背で胸に本を抱いている様子はさらに彼女自身の存在感を弱めていた。一昔前の文学少女のようだった。



「ねえ健ちゃん。どうして私なの？」

困惑した声。

俺は真正面から純菜の顔を見つめて、必死に頼み込んだ。

「お前しかいないんだよ。俺がこんなこと頼める女子って、お前しかいないんだ」

俺の言葉に、純菜が息をのんで顔を真っ赤にさせた。

しかし、純菜をバカにすることはできない。おそらく、彼女よりも自分のほうが真っ赤になっているだろう。なんだか愛の告白をしているようで、さきほどから恥ずかしいという言葉では表現できない感情で胸がいっぱいだった。俺はとにかくこの場から逃げだしたかった。

「でも、バトルファックって、もっと可愛

い子とか、派手な子がやるものだし。わたしなんて無理だよ」

純菜が下を向きながら小さな声で言った。俺は慌てて反論した。

「い、いやそんなことないだろ。というか、バトルファックに外見は関係ないから。もともと、少子高齢化対策のために生まれた競技なんだし、全員一度は経験することだろう？」

「そんなの中等部1年の頃の話だよ。体育の授業でもないのに、高等部でバトルファックやる人たちって、みんな背が高くてスタイルがよくて、芸能人みたいな人ばかりだもん」

「ま、まあ確かに、その傾向はあるかもしれないけど。でも、全員が全員そんなアイ

ドルミたいな奴ばっかでもないだろ」

俺は純菜のこを見つめた。

少し小柄な身長。童顔な顔立ちは昔からちっとも変わっていない。中等部の頃、純菜がよく小学生と間違えられたことを覚えていた。

それでも、彼女の肌が恐ろしく綺麗で、女の子らしく柔らかいものであることを俺は知っていた。中等部1年の体育の時間の記憶は今でも俺の中に大事に保管されている。そのときの純菜のトロけきった顔は女の顔だった。それは本当に、

「可愛かった」

「え？」

怪訝そうな純菜の声に俺は我に返った。「いい、いや純菜だって可愛いと思うぞ。ちゃ

んとバトルファック用に準備すれば、ぜったいそうだって。俺が保証するよ」

「な、なに言ってるのよ」

「頼むよ純菜。俺も、精一杯サポートする。先輩たちにも無理は絶対させないから。な、頼むよ」

拝むしかない俺だった。

目の前の純菜はいつものように本を胸で抱きしめた格好のまま、黙った。葛藤の数秒間。ふうっというため息が聞こえた。

「わかったよ。健ちゃんの頼みだから、協力する」

「本当か？」

「うん。でも、条件があるの」

純菜がさらに本を自分の胸で抱きしめながら言った。

「健ちゃんとは練習できない」

「え？」

「健ちゃん以外の人とだったら練習に付き合うけど、健ちゃんとはバトルファックできない。それでもいい？」

じっとこちらを見つめてくる純菜だった。地味で大人しい彼女にしては珍しく強い

意思を感じさせる瞳だった。

「お前、まだ中等部のバトルファックのこ
と怒ってるのか？」

「……………」

「確かに、あのときはやりすぎたかもしれないけど、でも乱暴とかルール違反はして
な、」

「そういうことじゃないんだよ。そういう
ことじゃないの」

珍しく怒ったように声を荒げる純菜だった。

それ以上、その話題を続けることはできない雰囲気だ。俺は傷つきながらも、純菜の条件をのむしかなかった。

「それじゃあ、明日から頼むな」

顔を真っ赤にしながらいわずき、コクンと頷く純菜。

俺は思わず息をのんだ。

その照れたような顔は、4年前のバトルファックの授業の時の彼女と同じ顔だった。童顔の少女が漏らす色気。俺は4年前のことを思い出していた。

*

もう何十年も前から、中等部1年の体育の授業ではバトルファック競技の実施が義務付けられていた。

少子高齢化対策のために、性的な事柄に対する見聞を深め、健全な精神と健全な肉体の修練に励むためのスポーツとしてバトルファックは生まれたいらしい。

これも授業の中で勉強したことだ。

俺が生まれた時からバトルファックのスポーツ自体は当たり前のよう存在し、テレビでもその試合の様子が放映されていた。

4年前、俺たちが中等部1年になったときも、例にもれずバトルファックの授業を受けることになった。最初は冒頭で説明したとおりのバトルファックの歴史について学ぶ座学。さらにはバトルファックのルー

ルと性技の知識を深める講義が続き、ようやく実技の授業となるのは2学期の後半になってからだ。

最初はクラスメイトたちと肌を通わせることに戸惑いを覚えるのだが、すぐにそれもなくなる。隠しているから意識するのであって、隠していないものに恥ずかしさを感じることは少なくなっていく。学校の授業でおおっぴらに性的なことをしていれば、じきにそれに慣れて抵抗もなくなっていくのだ。おそらく、これが一番の教育的効果というものなのだろう。

そのようにして実技を受け、最後の授業で実際のバトルファックをやることになる。

卒業試験みたいなものだ。

中等部2年からバトルファックは選択式

になるので、この中等部1年の試合が人生で最後の試合になる奴も多い。

そして、俺の卒業試験の相手は純菜だったのだ。

幼なじみとバトルファックをすることになんか自分でもよく分からない妙な気持ちになつたことを覚えている。今まで女として意識していなかった相手に、性を感じる。その気恥ずかしさを感じているのは俺だけではないらしく、純菜もその童顔を真っ赤にしていた。

最初はあいさつ代わりにキスから。お互いに責め合い、舌を相手の舌にこすりつけながら、互いの体を責めていく。

純菜の舌はとて長かった。

純菜の舌が縦横無尽に駆けめぐって気持ち

ちよさがピークに達する中、俺はなんとか純菜の体の愛撫に集中して、彼女の快感を高めていった。

重点的に胸を責めた。

純菜の胸はその童顔と同じく小さな膨らみでしかなかったが、その柔らかさは格別だった。こんな平らな体をしていながら、純菜の体はあくまでも女の体だった。俺は変に興奮して、次第に歯止めがきかなくなっていた。

15分間の試合時間の最後、優勢となった俺は純菜を押し倒し、その中に挿入した。痛がる純菜を優しく責め、次第に喘ぎ声をもらすようになった純菜にむかって自分の分身をさらに打ち付けていった。脳内を浸食してくるような甘ったるい声もつと

聞きたくて、さらに責めた。トロンとした顔でこちらを見上げてくる純菜がとてつもなく可愛く見えた。最後の瞬間、体をエビぞりにさせて大きく痙攣し、快感に身をよじっている純菜の姿も魅力的だった。

試合が終わり、何度かビクンと体を痙攣させて感じ入っている純菜の頭を優しく撫でたことを覚えていいる。なぜそんなことをしたのかは覚えていない。しかし、あのときは純菜とすべて繋がっている気がしたのだ。肉体的というよりも精神的に。それはとてつもない幸福感だった。

*

その試合があったからこそ、俺は中等部

2年以降も授業でバトルファックを選択し、高等部の部活でもバトルファックをやることにした。

おそらく、純菜との試合で俺は自信のよくなものを手に入れたのだろう。打ち込むものが見つかってしまったような気がした。高等部になってからも必死に練習を重ねて、努力を続けてきた。

そんな俺とは対照的に、純菜は中等部1年の試合を最後にバトルファックからは足を洗ってしまった。それどころか、少し俺のことを避けるようになった。恒例だった夏の花火大会を一緒に見に行くことも、正月の初詣を一緒に行くことも、なんやかんやの理由をつけて断られるようになった。その後はクラスも違っていたので、接点ら

しい接点はたまに学校や近所で出会うくらいになってしまった。

そのことに俺自身戸惑いを感じたことは事実だが、すぐに気にならなくなった。

もう既に男女の違いがでて、これまでどおりの友人つきあいというのも難しくなっていたのだろう。純菜と一緒にいると変に恥ずかしかつた。だから、若干距離を置いてきた純菜を追いかけることもなく、俺はバトルファックにのめりこむようになっていったのだ。

彼女がなぜ俺のことを避けるようになったのかなんて、考えたこともなかった。それは、バトルファックの練習相手になってほしいと頼んだこの時も同じだった。

もう少し、彼女の気持ちに思いを馳せて

いれば、あんなことにはならなかったのだろう。俺は最初から選選択肢を間違えてしまっていた。

二

翌日。

練習相手がみつかったと報告すると、部長の岸田先輩は気持ちよく笑った。責任感という名の相当な重荷を背負っていたらしく、血走っていた瞳も希望に輝いていた。

「ありがとう、よく見つけてくれたね」

岸田先輩が言った。

「もうダメかと思ったよ。最後の総体まで、基礎練習だけでぶっつけ本番、あたって碎けるしかない」と

「でも純菜は素人ですからね。技量だってあるわけじゃないし、体力だってないですから」

「分かっている分かってる。無理はしないよ。逃げられたらそれこそジ・エンドだからね」

そう言ってカッと目を見開いて自分の手で首を切るマネをする岸田部長。

こんなエキセントリックな性格をしている男が部長だから、入部してくる女子もないのではないのかと、何度目になるか分からない疑念を持つ俺だった。

「とにかく夢野くんが練習相手を辞めようなんて思わないように、手厚く面倒を見てやってくれ」

「分かりました」

「うむ。とりあえず、手始めにこれを渡し

ておいてくれるかね」

そう言ってガサゴソと自分の鞆を荒らす岸田先輩。長いこと探し続けて、ようやく「あったあった」とつぶやきながら取り出したのは大きな紙袋だった。

「なんですか、これ？」

「バトルファック用の競技水着だよ。一式買っておいたから、彼女に渡してくれ」

手渡された紙袋の中身を見ると、そこには包装された新品の競技水着が入っていた。競泳水着ではなく競技水着。純白の布面積の狭いビキニだ。それ自体に問題はないが、その数が大問題だった。

「部長、なんでこんなに買ったんです？」

「愚問だな。胸はAカップからIカップまで。尻だって全てのサイズを網羅するため、

全種類コンプリートしておいた」

「なぜ？」

「愚問。そりゃあ、夢野くんのサイズが分からんからだろうが」

「いや、それなら純菜に聞けばいいんじゃないですか」

岸田部長が敵を凍らせようとしているかのごとく盛大なため息をついた。

「君はバカか？ どの世界に、入部もしていないバトルファック部の男に自分の体の秘密を教えてあげようという女性がいるんだ」

「そうかもしれないですけど」

「そうに決まっている」

「いやでも、ぜんぶ買う必要もないでしょう。純菜にはこの一番小さなAカップから

Bカップ対応のものだけで大丈夫だと思えますよ」

俺は純菜の小さな胸を思い出していた。中等部1年のときの記憶。あの頃だって平均より小さな膨らみだった。制服の上からだが、今もそこまで大きくは見えなかった。

「まあ、準備しておくことに間違いはあるまい。それでは放課後、頼んだよ」

立ち去っていく岸田部長。俺は大量のバトルファック用競技水着を持ったまま、途方にくれるのだった。

*

放課後になり、部活の時間になった。

別クラスの純菜と待ち合わせて、練習場に向かう。俺の後を少し離れて歩いてくる純菜はどこかよそよそしかった。

顔を赤くさせて、胸の前でお守りのようにバトルファックの教科書を抱えている。挙動不審のように落ち着かず、彼女の中で葛藤が生まれていることが分かった。

「なあ、大丈夫か？」

俺は後ろに振り返って純菜に話しかけた。

「え、な、なにが？」

「いや、挙動不審すぎいぞ」

「そ、そんなことないよ。平気平気」

そう言っ、ぎゅうつと胸の前の教科書を抱きしめる純菜だった。俺はその大事そうに抱えられた本を指さしながら言った。

「その本、ひっぱり出してきたのか」

「え？ あ、うん。中等部のときの教科書。物置にしまってたんだけど、なんとか見つけて」

「もう4年も前になるんだもんな。なんだか、だいぶ昔のように感じるよ」

「そう、だね」

そう言っ、純菜は押し黙った。彼女はぱらぱらと教科書をめくってその字面を読み返し、少し落ち着いたのか、こちらを見返しながら言った。

「大丈夫だよ。復習もちゃんとしたし、バトルファックをやること自体には不安とかないの」

「そうなのか？」

「そう。不安というか、は、恥ずかしいのは、自分の体を見られること………なん

だよね」

どういうことだと疑問に思うヒマもなく、純菜は思いを断ち切るように笑って続けた。「でも大丈夫だよ。健ちゃんの頼みだもん。わたし、がんばるね」

そう言って笑った彼女は、小学生の頃よく遊んだときの純菜のようだった。そのことがなぜか嬉しくて、俺まで笑顔になってしまった。

＊

部室に到着して女子更衣室の前。

そこで新品の大量の競技水着が入った紙袋を純菜に渡した。

一瞬だけ体を硬直させた純菜。

おそらく、競技水着の布面積の小ささにびびってしまったのだろう。

体を見せることが恥ずかしいと純菜は言っていた。その彼女にこの水着を着てもらうことは申し訳なかったが、こればかりは仕方のないことだった。

バトルファック中は、当然お互いの体液で体が汚れることになる。お互いに責めやすくするためにも、服を着たまま競技をするわけにはいかないのだ。

「それじゃあ、着替えてくるね」

顔を真っ赤にさせながら、純菜が女子更衣室に消えていった。

俺はヒマをもてあまししながら、ドアの前で待つしかなかった。

いつまでたっても純菜は現れなかった。

女子更衣室の中をのぞくわけにもいかず、俺はどうしたものかと途方にくれてしまった。やはり、競技水着を着用することが恥ずかしいのだろうか。それとも、どうやって着ればいいのか分からないのだろうか。そんなことを思いながら待っていると、ようやく女子更衣室の中から声がした。

「あの、健ちゃん？」

「おお、どうした。大丈夫か？」

「うん。大丈夫なんだけどね」

言いにくそうに言葉をにごす言葉だった。

「なんだよ。どうやって着るか分からないのか？」

「ううん。そうじゃなくて………あの、サイズってこれが全部だよね？」

「サイズ？」

「そう。このサイズしかないんだよね」

その言葉の意味がよく分からなかった。

サイズが合わなかったということなのか？ いや、岸田部長は全サイズをコンプレイトしたとっていた。そうだとすると、合わないサイズなんてないと思うのだが。

ひよっとすると、あまりにも胸がなさすぎてビキニを着用するのが難しいとか、そういうことがあるのだろうか。それなら、背中のサイズ調整でなんとかなるかもしれない。

「もしかすると、背中の奴で調整できるかもしれない」

「ほ、本当？」

「ああ。やってやるから、出てこいよ」

「……………」

沈黙が返ってきた。

もう一度説得しようとしたところで、女子更衣室のドアがギイッと開いた。ゆっくと扉が開いていく。その女性を見て、俺は驚愕した。

「ご、ごめんね健ちゃん。ちょっとこのサイズだと、ちっちゃ過ぎるみたいで」

純菜が言った。

現れた女性は純菜だ。それは当然だ。でも、今にもはちきれそうな巨乳は純菜ではなかった。

自分でも何を言っているのか分からない。口をパクパクさせて、言葉にならない。俺の視線は純菜の大きな胸に吸い込まれて、目を離すことができなくなってしまった。

大きな、大きな巨乳。

布地の小さな白いビキニではおさまりき

らないその果実は、競技水着から今にもこぼれてしまっそうだった。重力に負けることなく前に突き出ている。張りともみずみずしさが段違いで、冗談抜きで輝いて見えた。生命力にあふれている。まるで野生動物の活力の塊のような爆乳。なぜか頭がクラクラした。

「健ちゃん、どうしたの？」

顔を真っ赤にした純菜が心配そうにこちらを見ていた。

彼女が少し前かがみになっただけで、その爆乳も揺れた。途端に、俺の分身が勢いよく勃起してしまった。純菜の胸に屈服するように、俺も前かがみになるしかなかった。

「あ、ご、ごめんな。今すぐやるから」

幼なじみの体で勃起した恥ずかしさを隠すように、純菜の背後に回り込む。そして、競技水着のサイズ調整をするベルトに手を伸ばそうとした。しかし、

(う、後ろからもこぼれてる?!)

規格外のデカさを誇るその巨乳は、背後から見ても純菜の胴体に収まりきらずにあふれていた。柔らかそうな体。競技水着の背中のベルトがぎちぎちに純菜の柔肌に食い込んでいるのもエロかった。それだけで、彼女の体の柔らかさが感じられるようだった。

俺は震える手で純菜の競技水着をつかむ。純菜の体に触れた俺の指から腰にかけて電流が走った。あまりの柔らかさ。それだけ

でガクンと腰が抜けそうになるのをなんとか耐えて、調整ベルトをマックスにした。

「ど、どうだ純菜」

「うん。ちよっと楽になった。これなら大丈夫そう」

笑って、感謝の言葉を口にしてくれる純菜。

しかし、その言葉は俺の意識に届かない。俺はありったけの意思の力を使って、純菜の爆乳から目をそらすしかなかった。純菜の体が視界に入らないようにそっぽを向きながら、俺は口を開いた。

「でも、もっと大きなサイズあったんじゃないか？ わざわざ小さなサイズ使わなくてもよかっただろう」

俺の疑問に純菜が答えた。

「ううん。これが一番大きなサイズだよ」

「そ、そうなのか？」

「うん。きついのは慣れてるんだけど、この小ささだとこぼれちゃいそうで、困ってたんだ。ありがとうね、健ちゃん」

「お、おう」

純菜の言葉がうまく頭に入らない。

一番大きなサイズ。それでもきつい。調整ベルトもマックスにした。Iカップでもおさまらない爆乳ということだ。そんなおっぱい、先輩たちですら見たことないぞ。

俺は思わず純菜の巨乳をチラッと盗み見してしまった。谷間がどこまでも深い。脂肪というにはあまりにも力強すぎる。エロい。やばい。そのど迫力に、ますます俺の勃起は固くなってしまった。

「そ、それじゃあ、行くか」

俺は前頭葉にフル回転を命じて本能に打ち勝った。

競技場のほうへと早足で歩いていく。それでも俺の脳裏から純菜の爆乳が離れることはなかった。

＊

よく来てくれた。

そんな岸田部長の歓迎の言葉は途中で尻すぼみになった。部長の意識は全て純菜の巨乳に吸い取られてしまっている。

それはほかの男性部員も同じだった。副部長も、先輩たちも、同級生の男子生徒だって、皆、純菜が競技場に現れた瞬間、彼女

の爆乳に意識をもっていかれてしまった。

(そりゃあ、無理もないよな)

彼女は変わららずに童顔で地味で真面目そうな女の子だった。長い前髪と大きな黒縁メガネをかけたやぼったさも相変わらずだ。

しかし、その大きな胸だけは男たちの視線をくぎ付けにする魅力を放っていた。

この巨乳を前にすれば、道ばたを歩く男ども全員が二度見をすることは必至だろう。競技場にいる男子部員10名全員が、純菜の巨乳に心を奪われてしまっていた。

「……………あ、あの」

あまりの視線に顔を真っ赤にした純菜が、もじもじとして体を隠そうとしている。

その言葉に、ハッと我にかえった岸田部長が「ゴホン」と咳払いをしてから言った。

「よくきてくれたな。私がバトルファック部の部長の岸田だ。よろしく頼むよ」

「はい。よろしく願います」

「今日は手始めに君の実力をみたい。無理をさせるつもりはないのでね。君の力を知っておく必要がある。そうだなあ、とりあえず、こちらからは手を出さないで、君から責めてみてくれないか」

いきなり試合をやるとかそういう無茶なことはしないらしい。

岸田部長の言葉に、純菜は緊張して顔をこわばらせながら「分かりました」と返答した。部長と純菜が競技場中央にあるリングの上へと移動していく。

リングは、ボクシングやプロレスのものを思い浮かべればわかりやすい。少し高い

位置に周囲をぐるりとロープで囲われた空間がある。そこに、部長と純菜二人だけが立っていた。

「それでは、15分間、責めてみてくれ」

部長が言った。

純菜はあわあわと戸惑っていた。何をすればいいのかわからないのだろう。棒立ちの部長を前にして動けずにいた。

「純菜、まずは体を密着させて、キスだ」

俺はリングの上の純菜にむかって声をかけた。

バトルファックの基本。

正攻法の試合スタート形式だった。別ルールとして定められているわけではないが、たいいていの試合は男女が抱き合い、互いに唇を奪い合うところから始まること

多い。

「う、うん」

純菜が意を決して部長に近づいていく。歩くだけで胸が揺れている。あの生命力に満ちた爆乳が、わずかの振動で大地震を起こしていた。それに目を奪われた部長は、経験者らしくもなく、興奮した眼差しで対戦相手の武器となる胸を凝視していた。この後待ち受ける地獄を想像することすらできず、岸田部長は鼻の下を伸ばすだけだった。

「い、いきますー！」

正面から、純菜が部長に抱きついた。

弱々しい抱擁。力強く抱きしめるわけではなく、体と体が触れているという程度の接触。

しかし、それだけで岸田部長の膝がガクンと墜ちた。

「な、なんだ、これは」

部長が戸惑いの声をあげた。

純菜の体に触れただけで腰が抜けそうになってしまっている。どう見ても、その原因は、部長の体にかすかに触れている純菜の爆乳だった。

「純菜！ もう少し強く抱きしめろ！」

俺が叫ぶ。

純菜は「う、うん」と弱々しくつぶやくと、死刑執行人となって、自分の巨乳で部長の胴体を潰した。

ぐにゅううううッ。

「ひゃ、ひゃあああッ」

女みたいな悲鳴があがった。

純菜の大きな胸が部長の胴体を浸食してしまっている。ギチギチという音が聞こえてきそうなほどに、肉のかたまりが男の体に押しつけられ、その身動きを奪っていた。そのグンニヤリと歪曲した胸の形は、それを見るだけで快感を脳に送り込まれたみたいになるほど凶暴だった。周囲の男子部員たちも、驚愕と共に勃起し、前かがみになっている。

「あ、な、なんだこれ。ひい……………あ、動かせないで」

弱々しい声が部長から漏れる。

力任せにぐいぐいと力を入れて抱きしめる純菜のせいで、さきほどから爆乳が部長の体で縦横無尽に暴れ回っていた。

「……………」

純菜は無言だ。

目をつむって、一生懸命に男を抱きしめようとしているだけ。ただそれだけなのに、岸田部長は早くもグロッキー状態になった。

「あ、だ、ダメだ……………腰が……………」

ついに立っていられなくなった部長が地面にずり落ちそうになる。部長の体が倒れていく。その絶妙のタイミングで純菜の目が偶然開き、獲物を発見してしまった。

「次は、キス」

「あ、だ、ダメっむっふうううッ」

勢いよく純菜の唇が部長の唇を奪った。

ディープキス。中等部時代の彼女の得意技だ。童顔に似合わない純菜の長い舌が、部長の口内を犯していくのが見える。エロい肉厚の舌が、じゅばじゅばと音を立てな

がら暴れ回っている。

「あ、あひいん……………アア……………」

そのディープキスに対して、部長は反撃もできずにされるがままになっていた。

既に体からは力が抜けてしまっており、純菜に抱きしめられてかろうじて立っているだけだった。

その結果として、純菜の爆乳がさらに部長の体に押しつけられてしまっている。その状態でディープキスをされっぱなしになれば、勝負の行方は明らかだった。

「じゅ、純菜、手でしごくんのだ」

俺がリングの下から指示をした。

ディープキスをしながらコクンと頷いた純菜が、ゆっくりと部長の競技パンツをおろして、その一物を外気にさらす。

純菜の爆乳の感触と卓越したキスの技術によって、その一物はこっけいにも勃起していた。それは、弱点をさらけだしているようにしか見えない、哀れな勃起だった。

純菜が戸惑いながらそれを握った。おらずと慣れない手つきでしごく。限界はすぐに訪れた。

「ひゃああああッ！」

どっぴゅううううう！

白い液体が部長の分身から吐き出された。

それと同時に、部長の体がビクンビクンと痙攣した。それを抵抗と感じ取ったのか、純菜は男が暴れないようにさらに抱擁を深めてシコリ続ける。しかし、彼女の手に精液がかかるにあたって、ようやく純菜も事の顛末に気づくことになった。

射精させてしまったのだ。

バトルファックの素人が、バトルファック部の部長を瞬殺してしまった。開始からまだ5分もたっていないかった。

「え？」

ようやく男を解放してやった純菜が、呆けた声をあげた。

自分の手についた部長の精液を呆然と眺めている。今の状況が信じられないのか、純菜が手の平で男の精液をぐちゃぐちゃとまぜあわせて、その感触とにおいを確かめ始めた。

純菜の童顔とあいまって、その光景は男の精液で遊ぶ童女のように、蠱惑的な雰囲気thatリング上に広がることになった。

「うそ。射精しちゃった。ほ、本当に？」

純菜が戸惑いと共に口を開いた。

彼女はゆっくりと、自分が抱きしめている男を見下ろした。

「あひい……ああ……」

もはや部長に意識はなく、白目をむいて気絶していた。その情けない顔。それを見下ろす純菜の顔にも驚きの表情が浮かぶことになった。

その驚きは、リング下の男子部員たちも同じだった。

目の前の光景が信じられない。まさかこのような結末になるとは誰も思っていなかった。岸田部長はそれなりの実力者で、秋の大会では県でベスト16に入るほどの強豪だった。

それが、たとえ部長から責めることはし

ないルールだったとしても、バトルファックの素人に瞬殺されるなんてことは誰も想像すらできなかった。

「つ、次は僕が相手だ」

皆がハッと息を飲んだ。

声をあげたのは副部長の藤山先輩だった。すらっとした長身で、物腰も柔らかい人格者。エキセントリックな部長を陰から支える頼れる先輩が、リングの上にあがった。

「部長は少し体調が優れなかったらしい。もう一度、君の実力を見させてもらいたい。いいかな？」

「は、はい。よろしくお願いします」

バカ正直に答えておじぎをする純菜だった。

その動きと共に彼女の爆乳が揺れ、谷間

がさらに強調されることになった。その光景をまじまじと見てしまった藤山副部長が「うっ」と呻き声を漏らし、フル勃起して競技パンツにテントをつくってしまふ。

おじぎからなおって顔をあげた純菜も、その勃起に気づき、驚いたように副部長の顔を見た。その視線に耐えられず下を向いた副部長がさらに純菜の爆乳を凝視してしまい、その一物がビクンと跳ねた。

きまざい雰囲気が流れるリング上。

さきほどと同じように、藤山副部長からは責めないルールのもとで、バトルファックが開始された。

「あひいんんッ！」

まるでさきほどのリプレイを見ているかのようにだった。

副部長は純菜に抱きしめられて、それだけで腰が抜けてしまった。

防御力ゼロになった副部長の口内を純菜のディープキスが暴れ回って蹂躪し、すかさずの手コキですぐに副部長は射精した。

開始から5分もたっていないかった。

年下の素人女子生徒に、何年もバトルファックの修練を積んできた男たちが瞬殺されてしまった。

「こ、こんな簡単に……」

やはり呆然とした純菜がつぶやく。

手にべっとりついた精液をネチヨネチヨと弄びながら、自分の勝ち取った成果を確認していく。ちらっと彼女が視線を落とせば、そこにはリング上で気絶した全裸の男が地面に横になっていた。それを純菜が立つ

たまま見下ろしている。その構図はまさに勝者と敗者そのものだった。

＊

そこからは、予定調和のように同じことが繰り返された。

混乱した男たちが目の前の光景を信じられず、次々とリングに上がり、強制射精させられていった。

皆、彼女の胸に抱きしめられたら、何もできなくなってしまう。

大人と子供の差。

プロとアマチュアの試合だってここまで一方的な展開にはならないだろう。

彼女の胸の感触に悶絶し、ディープリキス

で唇を犯されて、つたない動きの手コキで射精させられる。

俺をのぞいた男子部員全員が強制射精の上で失神した。最後のほうは純菜も慣れてきたらしく、手コキの動きもこなれたものになっていた。まるでベルトコンベアーに乗せられた商品を検品するかのように、同じ手順で男たちを射精させてしまった素人バトルファッカー。

最後には、リング上に立っているのは純菜だけになった。

男たちは彼女の足下でうめきながら痙攣を繰り返すだけ。

リングの上に立っている純菜の全身は精液まみれだった。まるで戦場で敵の返り血を浴びた屈強な戦士のような立ち姿。俺は

リングの下から、彼女の勇姿を見上げるしかなかった。

＊

部活の終了時間となった。

俺は最後の一人をリングから立ち上がり、そして、そいつに付き添って部室まで連れて行ってやった。

部室の中では、ぐったりとしたままの9名の男子部員たちが呻いていた。

もうろうとしながらも意識を取り戻している男子部員たちは、しかし腰にきていて、一人では立つことすらできない有様だったのだ。おそらく、歩けるようになるまでもう少し時間がかかるだろう。

男たちが腰を抜かすほど精液を絞りとってしまった純菜。

俺はますます驚きを禁じ得なかった。

バトルファックの素人がここまでの成果をあげられた理由。

それは、どう考えても、あの育ちきった爆乳のおかげだろう。

中等部の時に肌を重ねたときにはなかった彼女の武器。その生命力に溢れた大きな胸に、ほかの男子部員たちは精液を根こそぎ絞りとられてしまったのだ。

(すごいな。ちゃんと練習すれば今の純菜なら全国大会までいけるかもしれない)

うちのバトルファック部は弱いというわけではないが強豪でもなく、全国大会に出場する選手なんてここ10年出ていなかった

た。

今の純菜だったら、それまでできるかもしれない。俺たちの練習相手なんかじゃなくて、きちんとした部員として練習に励めば、そんなことを考えながら競技場に戻ると、当の本人が必至にリングの上を掃除していた。

「悪いな純菜。練習に付き合ってもらっただけじゃなく、掃除までさせちまって」

俺もリングの上にあがりながら言った。

純菜は簡単に体を洗い流した後、リングの上にごべりついた精液をブラシでこすりながら掃除してくれていた。

「ううん。大丈夫。それに、こんなに汚くしちゃったのは私だから。掃除くらいはさせてよ」

そう笑いながら言っ、彼女はブラシでリング上の精液を洗い流していった。

男たちの敗北の証である大量の精液が、彼女のブラシによって無惨にゴミとして捨てられていく様子は、どこか背德的でエロかった。

しかも、純菜はまだ競技水着姿だった。

その小さな布面積からこぼれそうになっている爆乳も相変わらずそこにあって、彼女の動きにあわせて蠱惑的に揺れていた。

（しかし、どうすればこんなにデカくなるんだ？）

俺は、ここまでの成長を見せた爆乳に腑に落ちないものを感じていた。

いくらなんでも、大きくなりすぎではないか。中等部1年の3学期からながある

ばこんなデカくなるのか。俺は思わず純菜に質問していた。

「なあ、純菜。お前の胸、いつからそんなにデカくなったんだ？」

「い、いきなり何？」

「いや、気になってさ。だって中等部の頃は、そんな大きくなかったじゃんか」

顔を真っ赤にさせて動きを止めてしまった純菜。

彼女は何か覚悟を決めたようにこちらを向くと、少し怒った表情で言った。

「中等部1年の3学期からだよ。最後の体育の授業が終わってから少しづつ」

「は？ それって」

「そうだよ。健ちゃんとバトルファックの試合をした後から、急に大きくなっていっ

たの」

ドクンと心臓が脈打った。

それと同時に、あの時の純菜の姿と喘ぎ声が脳裏によみがえってきた。

「健ちゃんのせいなんだからね」

「な、なにがだよ」

「こんなに大きくなったのは健ちゃんのせいなんだから」

やはり怒ったように言う純菜だった。

「だから、健ちゃんとはバトルファックの練習もやりたくないの。これ以上大きくなったら大変だもん」

「いやでも勘違いじゃないのか？ なんで俺とバトルファックしたらお前の胸が大きくなるんだよ」

「し、知らないよっ」

さらに怒ってそっぽを向いてしまった純菜。

俺は言った。

「でも、その胸は大きな武器だと思うぞ」

「え？」

「だから、バトルファックではすごい武器になるってことだよ。さっきの力試しだつて、その胸があったからこそその成果だからな」

「そ、そうだよね。さっきのってやっぱり」
純菜が自分の大きな胸を見下ろしながら言った。

片手で胸を下から持ち上げ、その重量を確認している。その動きだけで俺の愚息が反応したが、天をあおいで神に祈りを捧げることではなにか耐えた。

「変だと思ったんだ。素人の私の手コキくらいで、あんなに簡単に射精しちゃうなんて。やっぱり、みんな、私のこの胸に興奮してたの？」

「そうだよ。みんな、お前の胸に触れただけで骨抜きになってただろうが」

「う、うん。なんか変な声あげて、体から力がすぐになくなっちゃった」

「だからそれが大きな武器なんだって。お前、才能あるよ」

俺の言葉に顔を真っ赤にさせる純菜だった。

胸が大きいというだけであれだけの結果が生まれるわけがない。どういう理屈か知らないが、純菜の巨乳は男の反抗を根こそぎ奪い取るだけの魅力があるのだろう。そ

れが才能でなくてなんなのだろうか。

「でも、こんなに大きいと気持ち悪くない？」

「どういうことだ？」

「だって、不自然というか、みんな変な目で見てくるし……だらしく見えるって言うのかな」

不安そうにつぶやく純菜。

俺は断言した。

「そんなことない」

「え？」

「そんなことないぞ」

俺は確信と共に言った。

「どう考えたって胸が大きいことはバトルファックでは武器だ。プロの女子選手にだって胸が大きい人はたくさんいるだろ？ その人たちが大きなおっぱいを武器に男子選

手を圧倒する光景なんて、格好いいの一言だろうが」

「そうかな」

「そうだよ。だから、お前はもっと自信をもて」

俺の言葉に純菜は優しく微笑んだ。

言葉なんて必要なく、それだけで彼女が俺に感謝をしていることが分かった。

＊

翌日の放課後。

純菜が今日も練習相手となってくれた。俺とバトルファックをしてくれないことは変わらなかったが、彼女は約束を守って、連日で練習に付き合ってくれたのだ。

昨日の醜態を取り戻すために、岸田部長たちは必至だった。

彼らに残された言い訳は、一方的に責められるだけで自分から責めることを禁じられたルールでは真の實力は発揮されないということだけだった。

対等なルールで戦えば、昨日のように一方的に瞬殺されることはない。そのような希望をもった部長は純菜にバトルファックの模擬試合を申し込んだ。

結果は残酷なものだった。

「あひいいいんん！」

部長が喘ぎ声と共に1回目の射精をした。開始早々、部長が純菜の胸を責めた。そ

の大きな胸は武器であると共に責めやすい弱点でもある。その定跡どおりに部長は純

菜の胸を責めるため、両手で純菜の爆乳を揉みしだいた。

変化はすぐに現れた。胸を揉んでいる岸田部長の足がガクガクと震え出したのだ。ハアハアという息づかいはあまりにも荒かった。なんで。どうして。という言葉が困惑と共に漏れ、次第に部長が甘く喘ぎ出す。

その男の醜態を純菜は淡々と観察しているようだった。部長の愛撫というには幼すぎる責めに、微塵も快楽を感じていないことが分かる冷静な顔つき。

彼女は岸田部長の限界が訪れた瞬間を見極めると、昨日と同様、岸田部長の胴体を自分の爆乳で潰した。

「うっ」

それだけで息をつまらせた男に対して、

純菜がぐりぐりとさらに胸を押しつける。

腰砕けになったところで、追い打ちをかけるようにディープキス。部長の口内がめちやくちやに犯される。

部長もなんとか反撃しようと、舌でキスのお返しをしようとするのだが、部長が反撃しようとしたタイミングで純菜がさらに胸を押しつけて封殺していた。爆乳がぐんにやりと潰れ、それだけで部長の動きが止まった。

大きな胸が男の動きを支配している。

後は一方的だった。

ころあいを見て、純菜が手コキを開始する。昨日よりも洗練された動き。男の弱点を的確に見極めていることが分かる熟練した手コキだった。

「ひゃああああん」

部長が悶える。

その男の顔をジッと真剣に見つめながら純菜が次々と手の動きを変えていく。男の表情と喘ぎ声を観察し、男が快楽を感じる弱点を見つけたし、あとは重点的にそこを犯した。

すぐに部長は射精した。

どっぴゅううううッ！

盛大な噴水のように精液が吹き上げ、部長の体がビクウンビクンと痙攣した。あつという間の出来事だった。10分もかからず、部長は返り討ちになってしまったのだ。

「あの、大丈夫ですか？」

純菜が優しく語りかけた。

地面に倒れ込み呻いている部長のことを

純菜が心配そうに見下ろしていた。

悠然と立ちながら、地面に虫けらのように倒れた部長を見下ろす構図。それは、まさしく勝者と敗者のそれだった。

「も、問題ない。問題ないぞ」

部長が10カウントの前になんとか立ち上がった。

膝はガクガクと震え、顔は射精の衝撃で真っ青になっている。

それでも部長は立ち上がり、純菜に向けて試合再開の合図となるファイティングポーズをとった。

「あ、あの。少し休んだほうがいいと思えますよ」

「問題ない。素人の君に教えてやろう。射精ダウンは3回まで許される。10カウント

をとられるまで、試合は終わらないのだッ」

言い終わらないうちに、部長が純菜に襲いかかった。

その迫力に怯えた様子を見せる純菜だったが、動きは冷静だった。

動きが鈍った部長の背後を簡単にとると、今度は男の背中を爆乳で潰した。アヒンと甘い声をもたらした男をさらに抱きしめ、背後から一方的に責めることができる体勢となる。

ぐりぐりと胸で背中を蹂躪していく。それは胸が武器であると理解した者がする動きだった。昨日の俺の言葉で、純菜は自分の巨乳がバトルファックでは武器になると確信したらしい。今では惜しげもなくその武器を使い、男を搾り取ろうとしていた。

「あ、アアアッ」

部長が膝から倒れ込んだ。

背中に感じる純菜の爆乳に耐えきれなくなったのだ。うつ伏せで倒れ込み、純菜がその上に覆い被さるようになった。

柔らかい肉の拘束具によって、部長はリングの床に縫いつけられてしまった。背後と上をとられて、もはや勝負はついたも同然だった。

「い、いきまず」

純菜は無慈悲にその手を部長の愚息に添えた。

慣れた手つきで弱点を重点的に責めていく。背中には常に純菜の胸の感触がありながら、一方的に手コキをされて、男が我慢できるはずがなかった。

「ヒャアあああッ！」

どびゅどびゅッ！

射精。

リングの上に男の精液が巻き散る。それはまるで、決闘で破れた男が剣で叩き切れ、血液を噴出させる様子に似ていた。

「あ、だ、だめえッ」

部長が身をよじらせようとするのを純菜の爆乳が上からぐっと押さえつけた。

さらに純菜の責めは終わらない。

射精中は攻撃の継続が認められている。部長の射精はなおも続き、その間、さらに純菜の手コキが過激さを増して襲いかかっていった。

ひいひいと悲鳴を漏らす部長。その後ろからじっと男を観察しながら的確に責め続

ける純菜。

ガクガクと震え始めた部長の体がビクンとエビぞりになって痙攣して、墜ちた。

「あ、気絶しましたね」

淡々と確認する純菜だった。

そこで追い打ちをかけることもなく、純菜はゆっくりと立ち上がった。男を跨ぐようにして立って、うつ伏せで断続的に射精しながらビクンビクンと痙攣している部長を見下ろしている。

今度は部長も立ち上がることなく、気絶したまま墜ちていった。その顔はだらしないほどに弛緩し、白目をむきながら舌をベロンと口から出している。

「あの、わたしの勝ちで、いいんですか？」
リング下の部員たちに問いかける純菜。

その姿にほかの部員たちは口を開くことすらできなかった。

目の前の光景がただただ信じられなかった。対等なルールでバトルファックの試合が行われた。部長は自由に純菜の体を責められたのだ。普通ならば、長年の修練を積んだ部長が圧勝するに決まっている。甘い喘ぎ声をだして、イキっぱなしになる素人女性の囃。それを想像していた部員たちは返り討ちになった部長を見て、驚くしかなかった。

「それじゃあ、次の人、どうぞ」

純菜がリング下の男子部員たちに促す。
練習。

そう、純菜はあくまでも練習に付き合ってくれているのだ。俺たちのために、自分

の時間をつかって練習相手になってくれている。これで逃げられるわけがなかった。

*

「アツヒイインツ」

男たちは順番にリングに上がり、順番に返り討ちにあっていた。

副部長もあつという間に射精させられて気絶し、ほかの3人の3年生も同じ末路をたどった。次は純菜と同じ2年生。俺と同年の男子部員も純菜に挑み、めちゃくちやに犯されていく。

最初、純菜は手コキしか使っていなかった。いや、使えなかったのだろう。しかし、少しづつ慣れてきた純菜は、途中から新た

な技を繰り出していった。

フェラチオである。

爆乳で男たちの防御力を粉々にした後、その処刑が始まった。

相手は純菜と同じクラスの佐藤だった。

進学校では珍しく茶髪にしている男。そんな彼の愚息を頬ばって、めちゃくちやに犯し始めた純菜。その長い舌が男の一物に絡み合い、ねっとり吸いついている様子は見ているだけでエロかった。

足をガクガクさせながらも立ったままの佐藤と、膝まづいて男の腰を抱きかかえながらフェラチオをする素人バトルファッカー。

男が逃げようとするたびに、抱きつく力はさらに増し、その爆乳が男の膝を潰して逃げられなくしていた。

「ひゃあああっ」

どびゅどびゅどびゅうううッ！

我慢できるはずもなく男が射精した。

長い長い射精だった。

精液が口に放出される感触に、純菜が驚きと共に苦しそうな表情を浮かべた。それでも純菜は彼の愚息を頬ばり続け、全ての射精を口内で受け止めてから、ようやくフェラチオを止めた。

「ん、んんッ」

目を閉じて、口の中の精液に苦悶の表情を浮かべる純菜。無理もない。素人バトルファッカーがああ大量の精液を処理できるはずもないだろう。俺は助け船を出そうとリングの上にあがろうとするのだが、その瞬間に純菜の喉がゴキュンと鳴った。

それを皮切りに、彼女の喉が何度も鳴り始めた。飲んでいなのだ。精液を嚥下している。

ゴキュンという喉の音がリングの上に響いていく。その様子はどこまでも妖艶で背徳的だった。

苦しそうな表情を浮かべながらも純菜が全ての精液を飲み込んだ。「ふうー」と息を吐いて、ほっとした表情を浮かべた純菜。俺は心配して声をかけた。

「だ、大丈夫か、純菜」

「うん。平気だよ。ほら」

俺を安心させたかったのか、純菜が口を大きく開けて、その長い舌をベロンと伸ばした。

その口内には精液の欠片も残されていない

い。

にっこりと笑いながら、舌を蠱惑的に伸ばしたその光景に、俺だけではなく、意識のある男子部員全員が勃起した。

「ほら、全部飲めたよ」

「そ、そうだな。すごい」

「ふふっ。中等部の頃は道具を使った練習だけで今日が初めてのフェラチオだったんだけど、うまくいったよ」

「そ、そうか」

「うん。でも、佐藤くん大丈夫かな」

純菜が心配そうにクラスメイトの男を見下ろす。

そこにはひどい顔になって痙攣する佐藤の姿があった。顔と体が完全に弛緩して、何時間もレイプされて身動きを止めてしまっ

たかのようにリングに横たわっている。

「佐藤の面倒は俺が見ておくから、心配するな」

「うん。ありがとう健ちゃん」

そこで純菜は再びリングの下の男子部員たちにむかって口を開くのだった。

「それじゃあ、次の人、どうぞ」

こうして公開処刑は続いていった。

ほかの2年生の男子部員たちも瞬殺され、入学したばかりの1年生は見ていて痛々しくなるほどに純菜に犯されていった。

皆、純菜の爆乳に精液を絞りとられたのだ。自信をつけた純菜の前では、もはや数年間の練習なんて無意味だった。

天才。

俺たちほとんどでもない女性をバトルファ

ッカーとして目覚めさせてしまったのかも
しれない。

*

こうして練習は続いていった。

毎日のように、手も足も出ずに純菜に搾
り取られていく男子部員たち。

練習に励み、攻略を立てて純菜に挑んで
も全くの無駄だった。あの大きな胸を前に
しては、矮小な男どもの反撃なんて、無意
味だったのだ。

後ろから純菜を責めようとした男がいた。
背後をとって、純菜の下半身を責めようと
した男はしかし、背中ごしからもこぼれて
はみ出ている大きな胸を前にしてあまりに

も無力だった。男は思わず下半身ではなく
て純菜の爆乳に手を出し、終わった。あま
りの感触に腰砕けとなり、夢中になってし
まった男は、その後の純菜の反撃を受けき
ることが出来ず、手コキで無惨にも果てた。

どんな戦略を立てても、あの爆乳を前に
しては何をしても無駄。まさか目をつむっ
てバトルファックをするなんてできるはず
もなく、純菜の大きな胸に男子部員たちは
完敗していった。

「ありがとうございました」

練習が終わって、リングの上でおじぎを
する純菜はどこか堂々として見えた。

男どもの精液を全身に浴びた彼女は光り
輝いていた。呻いてうづくまる男たちの山
の中で、一人だけピンピンして笑っている

彼女の姿。

やぼったい黒縁メガネとダサイ文学少女じみた長い前髪はそのままだというのに、地味さはどこかに飛んでいき、はつらつとした様子が純菜にはあった。

自信。

男子部員たちを瞬殺できる自分に対する自信だろう。それが純菜の雰囲気を変え、彼女の心境にも変化をもたらしているようだった。

「わたし、もっと強くなりたい」

そう目を輝かせて言う純菜だった。

自信を手にした純菜は、もう今までの純菜ではなかった。性技はますます磨きがかけられ、その爆乳を惜しげもなく武器に使って、男たちの精液を搾り取っていく。放課

後のバトルファック競技場には、男たちの喘ぎ声と、精液の匂いが立ちこめるようになった。

三

「よかったですね、部長。純菜がバトルファック部に入部してくれるみたいです」

俺は学校の中で部長に話しかけていた。

昼休みの食堂。

既に週末の金曜日で、あたりには明日からの休みを前にして少し浮わついた雰囲気があった。そこで俺は岸田部長と昼飯を食べながら、昨日、純菜から入部届を受け取った話しをしたのだった。

「うむ。ありがたいことだ。純菜くんほど

の実力者であれば、大歓迎だよ」

ハハハッと笑いながら、日替わり定食をパクついていく部長。純菜の入部届けも受理してもらえて、俺としてもほっと安心した。

「それで、今日から純菜くんは部員として部活に参加してくれるのかね」

「いや、今日はちよつといろいろと準備があるって言ってましたよ。だから部活には出られないと」

「準備とは何かね？」

「どうでしょう。バトルファックに必要な細々としたもの買うんじゃないですかね。今日は出られないけど、明日の土曜日の練習には朝からきちんと行きますって言ってました」

そうか、とつぶやく部長だった。

なんの準備が必要なのか俺もよく分からなかったが、純菜が言うならそれは必要なことなのだろう。あの真面目な純菜が部活をサボるわけがなかった。

「しかし、彼女は本当に今までバトルファックをやったのかね」

部長が唐突に言った。

「ええ。体育の義務科目でやってから、一度も経験がないって言ってましたよ。テレビでもそういうのは見てなかったとか」

「そうか。ならば、やはり才能なんだろうな」

「才能？」

「ああ。とにかくあの胸は本当に規格外すぎる。私も胸の大きな選手はたくさん見て

きたが、純菜くんのおっぱいはレベルが違
う」

「そ、そんなにすごいんですか」

「すごいってもんじゃない。アレに触れば
たちまち全てをもっていかれる。触らなく
ても視界に入るだけで問答無用のフル勃起
だ。しかも、純菜くんのフェロモンは猛毒
レベルだよ。嗅いでしまえば最後脳味噌が
溶けてしまって何もできなくなる。正直、
彼女とまともにバトルファックして勝てる
ビジョンがまるで見えない。おそらく今度
の大会でも台風の目になるだろう。ひよっ
とすると、全国大会も夢ではないかもしれ
ない」

県大会ベスト16に入ったこともある岸
田部長が言うくらいなんだから、純菜の爆

乳は本物なのだろう。俺はゴクリと唾を飲
み込んだ。

「買いかぶりすぎだろ。部長」

と。そのとき俺たちのテーブルにトレイ
を乱暴に置いた男が口を開いた。同じバト
ルファック部員の佐藤だった。

少しヤンチャな感じのある佐藤は、鋭い
目つきをしながら続けた。

「あの地味子の外見じゃあ、上にはいけね
えよ。あんな胸だけの女、県大会じゃあ3
回戦までが限界だろう」

「が、外見は関係ないんじゃないか？」

「大ありだね。なんだよ健二。幼なじみだ
からって、あいつの肩をもつ気か？ プロ
のバトルファッカーだってみんな芸能人並
みの容姿じゃねえか。興奮するかしらないか

なんだ。ブスより美人。地味子より派手な女のほうが有利に決まってるだろう」

「まあ、そうかもしれないが」

「そうだけ。あいつは戦時中だってもっと派手だったんじゃないかと思うくらい容姿に無頓着だからな。リング名はジミー純菜にすればいいと思うぜ」

吐き捨てるようにして言う佐藤だった。

佐藤は純菜と同じクラスメイトということもあってか、彼女に対するあたりが強かった。

しかし、それも仕方ないだろう。教室では目立たず、長い前髪と黒縁メガネで静かに本を読んでいるだけの同級生。真面目なことだけが取り柄な女の子が、バトルファック競技場では男子の精液をひたすら搾り取

るサキュバスに変わるのだ。

そのギャップをほかの部員よりも知っている佐藤は、純菜に搾り取られることに屈辱を感じ、彼女にきつくあたっているのだろう。

「しかし佐藤、あの胸は別格なんだろう？ おまえだって、さんざん搾り取られてるじゃないか」

「そりゃあな。あれだけの巨乳、部長と違って俺は見たこともねえよ。でも見てな。いつかあいつの胸を克服して、あの素人女をイキ狂わせてやるからよ」

そう言って笑う佐藤だった。

彼はラーメンをすすりながら言った。

「しかし分からねえのは、あの胸だよ。教室じゃあ、あんなにデカくねえんだぜ？」

制服ごしじゃあ控え目だっていうのに、どういうことなんだろうな」

「ああ。そういえば佐藤くんは純菜くんと1年のころからクラスが同じだったな」

「ええ。さすがにあれだけの巨乳となりゃあ、制服ごしだつて気づかないわけないと思うんだが……って、こんなこと考えても仕方ねえか」

そう言って佐藤はずっとラーメンをすすった。

佐藤の疑問は俺の疑問でもあった。いくら中等部のときから頻繁に会うことはなくなったといつても、顔を合わせるくらいはしていた。それなのに、純菜の成長に気づかなかつたなんてことがあるんだろうか。そんな疑問はすぐに解消されることにな

った。

*

俺の通学手段は電車と徒歩だった。

学校までは電車を乗り継いでいくしかなく、平日ともなれば満員電車に揺られて移動しなければならぬ。毎日わずらわしいといったらなかつたが土曜日の今日は乗客もまばらで、席に座ることができた。

最寄り駅で降りて、徒歩で学校へ向かう。ちらほらと同じ学校の制服を着た男女に出会った。少しづつ暖かくなって、もうコートを着ている生徒も少なくなってきた。厚手のブレザーすらいらぬ日も増えていく。あとはあつという間に夏をむかえて、

先輩たちにとって最後の大会となるのだから。それが少し寂しいように感じられた。

そんな感傷に浸っていると、なんだか後ろから歓声が聞こえた。男たちの「おおっ」という声と「誰だあの可愛い子」「でかすぎだろ」という声が大きくなっていく。

振り返ると、そこには芸能人みたいに可愛い女の子が息を切らせて立ち止まっていた。

同じ学校の制服。童顔じみた顔つきに、そのショートボブの髪型はすごく似合っていた。どこかの日本画家が描いた由緒正しき大和撫子。そんな感じがした。

しかし、その可愛い顔立ちがかすんで見えるほどに際だつものがあつた。

爆乳。

制服をびちびちに突き破ろうとしているかのような大きなおっぱい。体格にあわせて少し大きめに仕立てられているそのブレザーは、しかし、彼女の爆乳を押さえ込むことはできていなかった。ブレザーのボタンは最初から無条件降伏しており、最初からボタンをしめることを諦めていた。ブラウスごしにもっこりと膨らんだ曲線が惜しげもなくさらされている。そのあまりの大きさに、俺はゴクンとつばを飲み込み、じつとその二つの果実を凝視してしまった。「健ちゃん、一緒の電車だったんだね。気づかなかつたよ」

歩くの早いねと、その少女が言った。

それは純菜の声だった。は？ と混乱した俺は、まじまじと少女の顔を見つめる。俺

を追いかけてきたようで、少女はハアハアと息を荒げている。彼女が息を整えて、こちらにむかってニッコリと笑顔をつくった時、ようやく事態が飲み込めた。

「お、おまえ。純菜か？」

「そうだよ。そんなに変わったかな？」

変わったなんてものじゃなかった。

まるで別人。あの重かった長い前髪はぱつぱりと切られて、ショートボブになっている。ダサかった黒縁メガネもなくなっていることから、おそらくコンタクトレンズにしているのだろう。その大きな瞳がこちらを見つめてきていて、その可愛さに俺は思わず純菜から視線をはずしてしまった。

「ず、ずいぶん髪の毛ぱつぱり切ったんだな」

「うん。バトルファックって、けっこう激しいスポーツだから、髪が長いと絡まったりして不利だと思ったんだ」

「そうか。それにしても」

俺はそこで純菜の爆乳を凝視してしまっ
た。

制服を突き破ろうとしているその大きな曲線。今まで、純菜の制服姿を見てきたが、こんなにも自己主張の激しい胸部ではなかったはずだ。どういうことなのか。目の前の爆乳から目を離すこともできない俺の疑問に気づいたのか、純菜が言った。

「あ、やっぱり目立つかな、これ。さらし
はずしてみただけだ」

「さ、さらし？」

「うん。今まで大きなおっぱいが恥ずかし

かったから、家出るときにはさらしを巻いて、目立たないようにしていたんだ。けっこうグルグル巻きにしないと押さえられなくて、苦しかったんだよ」

だからなのか、と俺は腑に落ちた。

それと同時に、純菜の胸が手遅れになる前でもよかったとほっとした。さらしを巻いた状態で暮らせば、形は崩れるし、いつか健康的を害していたかもしれない。

「昨日、放課後に休みをもらって、ブラジャーとか自分にあつた競技水着を買ってきたんだ。少し恥ずかしいけど、今後はさらしはなしにするつもりだよ」

「当たり前だ。さらしでグルグル巻きにするなんて、形が崩れたらどうするつもりだったんだ」

「うん。今となってはそう思うんだけど、やっぱり恥ずかしかったんだよね。今日の電車の中でも、周りの男の人が、みんな私の胸を見てくるし」

純菜が自分の爆乳に視線を落とす。

しかし、男たちの視線は当然だろう。この大きな胸を前にすれば、ブラックホール並に男子たちの視線を全て吸い込んでしまうことは必至だった。

「でもこれもバトルファックでもっと強くなるためだもん。私の武器だからね、これは。今後は、ちゃんとケアしないと」

そう言って笑う純菜だった。

もはや彼女はいっぱしのバトルファッカーだった。自分の体の武器を把握し、それを鍛え、相手を刈り取る戦士。優しく笑

う純菜は、覚悟を決めた女の顔をしていた。

「がんばったんだな、純菜」

俺は言った。

「すごく可愛くなった。胸だって、ぜったいそっちのほうがいい」

「そ、そうかな。かわいい?」

「ああ。おまえ、ぜったい強くなれるよ。俺が保証する」

「えへへ。ありがとう健ちゃん」

そう言って笑う純菜は本当に可愛かった。人を優しい気持ちにさせる満面の笑み。彼女と一緒にいるだけで、なんだかか頭が麻痺するような多幸感が生まれるのを感じていた。それは今までになかった感覚だった。純菜を前にしていると、心臓がドクドクと脈動して、彼女から目を離せなくなる。

俺は戸惑いを感じながらも、純菜と隣り合って学校へとむかった。まわりの男子からの羨望の眼差しを感じながらも、俺の意識は隣を歩く純菜の爆乳に捕らわれてしまっていた。

*

「今日から入部する夢野純菜です。よろしくお願いします」

純菜がバトルファック部の競技場であいさつをしている。

彼女の変化は、練習相手として彼女に慣れ親しんだ男子部員たちにとっても驚きをもって迎えられた。今も、周りの男子部員たちは彼女の姿から目を離すことができず、

中にはトロけた視線で純菜のことを力なく見つめる奴もいるくらいだった。

今も、あいさつのためにおじぎをして、自然と前屈みになって強調された谷間に、男子部員全員の視線がくぎ付けになっていた。

「ゴホン。よく入部してくれた、純菜くん。あらためて歓迎するよ」

部長が威厳を保って言った。

「はい、よろしくお願ひします」

「うむ。君にはこれまでと違って、女子部員として厳しい練習に励んでもらうことになる。覚悟はいいかな」

「はい。わたし、がんばります」

真面目な顔で言う純菜だった。

その従順そうな様子に、部長はウンウン

と頷いて見せた。

「今後は実践形式の練習を基本としていくことになる。しかし困ったな。純菜くんを指導する女性部員がいればいいのだが、皆、今年の春に卒業してしまっただけ。さで、どうしたものか」

「あ、いちおう私、昨日、本屋で教材を買ってきました」

「ほう。それは熱心だね」

「わたしは素人ですから当然です。時間がかかってしまいました。全部、目を通してあります。だから、実践形式の練習の中で、一つづつ試していきたいです」

そこで純菜は不安そうに顔をくもらせた。「でも、いい教材がなくて、少し分かりにくい部分もあったんです。なので、実践形

式の練習で至らない点があればアドバイスしていただきたいです」

どこまでの真面目に、真剣に物事に取り組む純菜だった。

彼女は一生懸命、バトルファックの腕を高めようとしている。そのことに好感をもたない者はおらず、その場にいる全員が純菜を同じ部員として受け入れていた。

「もちろんだとも。実践形式の試合で戦った対戦相手は当然として、その試合を外から見ていた男子部員にもアドバイスを求めてくれて構わない。皆、君の力になってくれるだろう」

そう誇らしげに言った部長は、さっそく本日の練習のスタートを宣言した。

＊

リングの上に、純菜があがる。

実践形式の練習。試合と同じ、15分ハーフの30分間の試合だ。

その最初の対戦相手として指名されたのは、純菜にきつくあたりがちな佐藤だった。「よろしく願います」

「お、おう」
リングにあがった佐藤は戸惑っているようだった。

無理もないだろう。昨日、あれだけ純菜の外見をけなしていたのに、翌日になったらこの変化だ。佐藤の中に葛藤が生まれていることは、その鋭い瞳をチラチラと純菜のほうへ向けていることから分かった。

「それでは、試合開始」

部長が宣言し、ブザーが鳴った。

15:00と表示された時計が14:59となり、1秒づつ時を刻み始める。

最初に動いたのは予想外に純菜だった。

彼女はいきなり、手で自分の胸を下から持ち上げて見せた。ぐんにやりと変形した純菜の爆乳に、佐藤が「うっ」とうめき声をあげてそこを凝視してしまう。

「昨日、きちんとサイズのあう競泳水着を購入したんだよ。ど、どうかな、佐藤くん」
ぐりぐりと自分の巨乳を手でこねくりまわしながら、純菜がゆっくりと佐藤に近づいていく。その張りのある生命力の塊みたいなおっぱいが歪曲していく様子に、佐藤はくぎ付けになってしまっていた。

「ひ、久しぶりにサイズをはかったら、自分でもびっくりするくらい大きくなってて笑っちゃった。ねえ佐藤くん、私のおっぱい、どれだけ大きくなってたと思う？」
純菜がニッコリと笑いながら腕で下から爆乳を持ち上げた。

「104センチ。Jカップになっちゃいました」

その言葉に佐藤が呻く。

純菜の言葉を聞いてはいけない。彼女の胸を見つめるなんてもってのほかだ。しかし、純菜のつたないながらも繰り出される言葉責めと、大きな胸のコンポに、佐藤は肌を重ねる前からたじたじになってしまっていた。

「ねえ、どうかな佐藤くん。わ、わたしの

「Jカップおっぱい、触ってみたくない？」

「う、アアアッ」

「ふふっ、ほくら、とっても柔らかさそうでしょ」

ぐにゃああッ！

ついに純菜が両手で自分の胸を左右から寄せあげて見せた。谷間が潰れて肉がさらにはみ出る。縦に長く大きさを増したように見えるその見事な爆乳が、佐藤の意識を完全にジャックした。

「隙ありっ」

「むっっぐううう！」

その一瞬の隙を見逃さず、純菜が佐藤に飛びかかった。

前のめりになるほど凝視していた佐藤の顔を掴むと、そのまま自分の爆乳へと押し

込み、死の抱擁を繰り出す。

パフパフ。

巨乳バトルファッカーだけに許された相手の行動力を完全無効化してしまう恐怖の技。それが完全に極まり、佐藤の顔面が純菜のおっぱいに埋もれて見えなくなってしまう。

あまりの爆乳。片方の乳房が佐藤の顔よりも大きな純菜の爆乳だからこそできる芸当だった。大きな胸の谷間の中にすっぽりと埋まってしまった佐藤は、もぐもぐと呻いてそこから脱出しようとする。それを大きな胸の肉が拘束して、身動きをとれなくさせてしまっていた。

「あ、暴れちゃうと逆効果だよ」

純菜が冷静に言った。

「そんなに暴れるとすぐに息を吸いたくなっちゃうでしょ。それで、一呼吸でも息を吸ったら最後……」

その言葉にあわせるように、佐藤の体がビクンと痙攣した。

それが間断なく続き、男の体がガクンと脱力する。膝をつき、抵抗らしい抵抗もできなくなってしまう佐藤。もはや顔面を純菜の爆乳の中に捕らえられ、そこを支点にして宙づりになっているような格好だった。

「ほら、わたしのフェロモンたっぷり吸い込んで、体から力がなくなっちゃった」

純菜がにっこりと笑いながら言った。

その笑顔は普段の彼女と同じものだった。見る者を安心させる満面の笑み。しかし、そ

れを浮かべた彼女は、今、男をおっぱいの中で拘束し、仁王立ちのまま拘束している戦士だった。

「どうか、佐藤くん。わたしのフェロモン、今までと違うでしょ」

純菜が爆乳の中で痙攣する佐藤に向かって言った。

「これまでの練習ではね、わたし、練習の前にシャワーを浴びて、徹底的に体を洗ってたんだけ。でも、今日はシャワー浴びてないの」

純菜が勝利を確信した笑みと共に。

「フェロモンは胸の谷間の中に溜まりやすいらしいよ。今日は洗い流していない純度100パーセントのフェロモンなんだ。だから、佐藤くんが耐えられなくても仕方な

いと思うよ」

そこでトドメとばかりに純菜が動いた。

佐藤の顔を自分の爆乳にすり付けるようにして、強引に動かす。まるで佐藤の頭部が純菜の巨乳の中でシェイクされてしまっているようだった。佐藤の顔面で純菜の柔らかい胸がぐんにやりと変形している。それが10秒ほど続き、勝負は終わった。

「うん。もういいかな」

純菜が唐突に宣言すると、ようやく男の頭部を抱きしめていた腕を解いてやった。

あまりにも大きなおっぱいに埋まっているため、それだけでは解放されず、彼の頭部は純菜の谷間に挟まれたままで宙づりになっていた。クスリと笑った純菜が佐藤の顔を自分の爆乳の中から引き抜いてやっ

て、ようやく佐藤の体は自由になった。

どさっ。

もはや自分で立つこともできなくなっていた佐藤は、そのまま地面に仰向けに倒れ込んだ。普段の気丈な彼からは想像もつかないほど弛緩しきった表情。まだ意識はあるものの、アヘアへと呻き声を漏らしながらピクンピクンと震えている。

「ただだよ佐藤くん」

純菜は情けをかける気もないようだった。「今日はディープリキスが課題なの。次はそれで佐藤くんのことを、お、犯しちゃうね」若干かみながら、純菜が言葉責めを続ける。

彼女は地面に横たわったままの佐藤の体に覆い被さった。爆乳が佐藤の胸板で潰れ、

浸食した。その肉の迫力は、まるで純菜の胸が佐藤の体を捕食して吸収しているかのようだった。

「いくよ、佐藤くん」

「ま、まっへ」

「ダメ。待たない」

ぶっちゅううううッ！

「あっひんん！」

その状態で純菜のディープキスが炸裂した。

純菜が見せつけるように大きく口をあけ、佐藤の唇を貪り喰った。長い舌で佐藤の口内を蹂躪し、めちゃくちゃに犯していく。

もはや防御力がゼロになっている男がそれに耐えられるわけもなかった。

佐藤の一人はさきほどから滑稽なほどに

勃起し、競技パンツにテントをつくっている。あとはそれに少しだけ触れれば、すぐに佐藤は射精するだろう。追加攻撃をすれば一撃で失神させてしまうこともできるかもしれない。

「あひひいっ！」

ジュパッ……じゅるじゅるルルッ！

しかし、純菜は佐藤の一人に触れることをしなかった。彼女は淡々とした目つきで、男の痴態を観察していた。自分が与えた舌の動きに対して、男がどのような反応を見せるかに集中している。

純菜の舌の動きのバリエーションはあまりにも豊富だった。長い舌が佐藤の歯茎を丹念に舐めたかと思うと、長い舌が佐藤の口内の奥底まで進入して呼吸すら許さない

愛撫を繰り返す。次の瞬間には、勢いよく佐藤の舌を吸い上げて自分の口内で拘束し、あめ玉でもしゃぶるようにして男の舌を可愛がった。

それがひたすら繰り返された。

もはや佐藤は半分白目をむいて、ビクンと痙攣しながら純菜にされるがままになっていた。

もはや勝負はついた。それなのに純菜は佐藤を射精させなかった。

どういうことだろう。何がねらいなんだ。それが分からないままで時計は0:00を刻み、ブザーが鳴った。

前半ハーフの終了だった。純菜はしっかりとした足取りで自分の陣地に戻り、そこに準備されたイスに座った。佐藤もよろよ

ろしながらなんとかイスに座って、肩で息をしてうなだれている。

対照的な二人だった。あれだけ責めた純菜はびんぴんしていて、イスに座ってノートに何やら書き込みをしていた。表情は真面目一辺倒であり、真剣な様子でノートに書き込んでいく。

俺は気になって純菜側のリングにのぼり、そのノートを覗き見してみた。そこには、さきほどもでの試合の経過が書き込まれ、気づいた点や、佐藤の弱点、効果的な舌の動きが書き込まれていた。それだけではなく、あれだけ圧勝した試合内容だったのに、自分の至らなかつた反省点もかなりの分量で記載されている。その真面目な様子に俺は恐ろしいものを感じた。

「じゅ、純菜。ちょっといいか？」

「ん？ どうしたの健ちゃん」

「いやな。なんで佐藤のこと射精させないんだ？ あれだけの状態になったら、もうあとは触れるだけで射精させられるだろう」

俺は対角線上のリングで虫の息になっている佐藤を見つめながら言った。

それに対して純菜は「ああそのことか」と特にこだわりも見せずに口を開いた。

「今日は徹底的にディープキスの練習しようと思ってるんだ。昨日の教材で覚えた舌の動きを全部実践して、マスターしようと思おうの」

「試合中もそんなこと言ってたな」

「うん。それで、射精したらすぐ試合が終わっちゃうでしょ？ それだと長く練習で

きないから、あえて射精させないでおいてるんだ。もうちょっとで、キス教本の第1レベルの技はマスターできると思うんだよね」

「お、おい純菜」

俺が口を開こうとするのと休憩時間の終了を知らせるブザーが鳴るのが同時だった。

さっそうと立ち上がる純菜と、よろよろとかろうじて立つ佐藤。

試合再開を告げるブザーが鳴り、佐藤に就いての快樂地獄が始まった。

そこからはもはや公開処刑だった。

試合再開直後、今度はパフパフすらせずに、純菜が正面から佐藤に抱きつき、そのまま地面に押し倒した。

そこからは簡単だ。まな板の上の魚状態

となった佐藤は、さきほどまでひたすら快樂をたたき込まれた純菜の唇を目の前にして、いやいやをするように顔を左右に振った。その絶望の眼で怯える佐藤に対して、純菜はどこまでも真面目だった。

淡々とデイープキスを繰り返して出し、ひたすら教本どおりの動きを佐藤で試していく。佐藤の体は快樂のあまり条件反射でビクンと痙攣する。しかし、その動きすら純菜の大きな胸が佐藤の胴体を潰しているために滑稽な抵抗にしかならなかった。

「あつひいいいいん」

男に許されたのは甘い喘ぎ声をもらすこと。そして、純菜の舌の感触と胸板を潰してくる爆乳の感触に狂うことのみとなった。

*

そのまま一方的に試合はすすみ、時計は03:00を過ぎ、02:59を刻んだ。残り3分となった時、試合終了を予告するブザーが小さく鳴った。

ちらっと時計を確認した純菜が、そこでようやく唇を離して、上体を起こした。

佐藤の体を跨ぐ形で、男の体の上で女の子座りで座る純菜。口元をぬぐいながら、彼女の視線は地面に横たわったまま痙攣する佐藤に注がれていた。

佐藤の口はあまりに過激なデイープキスによって半開きとなって、しまうことのできない舌が飛び出していた。右目だけかろうじて黒目が残っているが、左目は完全に白

目になって、ピクンピクンと震えている。「カヒュウー、ヒュウー」と虫の息となった男がそこにはいた。

「もう時間みたい。残念だね」

純菜が言った。

「もう少しで完全にマスターできると思ってたんだけどな。でも、佐藤くんに最大限快楽を与える動きは分かったよ」

こうでしょ。

そう言うのと再び純菜が佐藤の唇を奪い、男が一番快楽を感じる動きを再現してやった。淡々とした視線で男を観察しながら、口元だけで男を圧倒する。純菜の舌の動きに男のころうじて残っていた右目の黒目も裏返り、それまでとは比較にならないほどエビぞりになって痙攣した。その痙攣はし

かし、男の体の上で女の子座りとなっている純菜の体重が封殺し、男は地面に縫いつけられたままだった。

「うん。やっぱり佐藤くんはこの動きだね。すごく気持ちいいでしょ」

純菜が再び上体を起こしてニッコリ笑って言った。

そんな童顔巨乳の少女に馬乗りのマウントポジションをとられている男は、なすすべもなかった。ようやく唇を解放された男は、さきほどから意識の大半を占めていた思いを口にした。

「……せて」

「ん？ どうしたの、佐藤くん」

「イかへて……しゃへいさへて……くだひゃい……おねがいしましゅ……」

懇願。

バトルファッカーとしては禁句となる言葉。それを口にせざるを得なかったほど、純菜の責めは苛烈だったのだ。

「あ、そうか。射精させてあげないとね」
純菜が笑って言った。

「それじゃあ佐藤くん。いっぱい気持ちよくなってね」

ニッコリとした笑顔。

純菜は余韻もなにもなく、ただ乱暴に佐藤のパンツを脱がして、一物を握った。

「いっきゅうううッ！」

どびゅどびゅどびゅううッ！

それだけで佐藤は勢いよく射精した。ただ握られただけ。それだけで佐藤は射精した。体を痙攣させながら、念願だった射精

に頭をバカにさせて放出し続ける。

「いっばい我慢した分、たくさんイカしてあげるね」

純菜が言って、そのとおりにした。

彼女の手が射精の脈動にあわせて動き出し、男の精液を根こそぎ絞りとっていく。

男の悲鳴があがるが、その悲鳴は次の瞬間には純菜の唇が塞ぎ、再度のディープキスによって奪われた。

キスをしながら、熟練した手つきでもって佐藤の一物を責める純菜。さきほどから佐藤の射精は止まらなくなっていた。純菜の手の動きがさらに過激となって、亀頭だけを手のひらで包んでグリグリと回転させる。暴れる男の体を爆乳で押さえ込んで拘束し、亀頭責めを繰り返す。

「いッギイイイイッ！」

すぐに佐藤がこれまでと比べものにならない悲鳴をあげ、精液を噴出させた。

マグマのような白い液体と透明な液体がリングに高々と舞い上がって、それが純菜の体に返り血のように落ちていった。

潮吹き。

純菜の完全勝利だった。

「ありがとうございます、佐藤くん」

リングの上で立ち上がった純菜が言った。

戦いの勝者が、地面で陸にあがった魚のように痙攣して、今も断続的に射精している敗者を見下ろしている。彼女はそのまま、見せつけるようにして、自分の顔にかかった精液をべろりと舌を出して舐めとってしまった。トドメとばかりに、自分の手にか

かった大量の精液を妖艶に口に含み、ゴクンと嚥下する。

ニッコリと笑った純菜が言った。

「それでは、第2試合もよろしく願います」

リング下の男子部員たちへの言葉。

戦慄と共に凍り付いていた男子部員たちは、もはや自分たちの末路を完全に把握していた。

絞りとられるのだ。

リング上の真面目で残酷な天使に、全てを搾り取られる。覚悟を決めた男子部員たちは一人づつリングの上へのぼり、純菜に犯されていった。

四

純菜が入部してからというものの、バトルファック部は様変わりをしていった。

それまで競技場には、ストイックに練習に励む男たちの熱気が展開されていた。

しかし、今となっては、純菜に搾り取られてアヘアへ悲鳴をあげる情けない男たちがそこにはいるだけだった。

「だいぶ分かってきました。こうですよね」「アヒイイインッ！」

今も純菜が岸田部長を犯していた。

リング上。今日も実践形式の練習が行われ、純菜が圧倒していた。

彼女は今、リングの上に座り込んで、背後から部長の乳首を責めていた。

既に部長はパフパフとディープキスのコ

ンボで骨抜きにされており、純菜の太ももの間に挟み込まれて、されるがままの存在になっている。

「ほら、こうやって、触れるか触れないかの微妙なタッチでさわさわと愛撫して」

言うとおりに、純菜が両手で、部長の両乳首をフェザータッチで虐める。その手つきは見ているだけで興奮するようなエロいものだった。部長の小さな乳首を純菜の長い指が蹂躪している。

「さらにこうやってつまみ上げて、小刻みに振動させると、」

「ひゃあああッ！ もうやめへええッ」

「うんうん。次は指の腹でこねくりまわしてみますね」

男の痴態を観察しながら、教本の動きを

正確に再現していく純菜。

もはや部長は泣き叫ぶだけのオブジェに変わって、純菜からの責めを甘受するしかできなくなっていた。

乳首責め。

単純に見えて、難しい技だった。そもそも、乳首が性感帯になっていない男もいる。岸田部長もそうだったはずだ。去年の総体の時も、相手選手から乳首を舐められた部長は平然として反撃をしていた。

その時の勇姿と今の痴態を比べると、本当に同一人物なのかと疑いたくなるほどだった。純菜に背後から羽交い締めにされて、身動き一つとれない格好で背後からひたすら乳首だけを虐められている。

あの部長をここまで情けない状態にして

しまう元凶は、部長の背中を潰している大きな胸にあった。純白の競技水着からこぼれる爆乳が、ぐんにやりと部長の背中を潰れている。それだけで部長は腰砕けになっていた。部長の体は純菜に完全降伏してしまっている。

純菜の爆乳は対戦相手の防御力を0にしてしまう。

防御力を無効化された状態で乳首を責められては、岸田部長の痴態も当然なのかもしれない。純菜はこの短時間で部長の乳首を性感帯に変え、さらには乳首の悦びを部長に覚え込ませてしまったのだ。

その蹂躪は前半ハーフが終わるまで続いた。ようやく前半終了を告げるブザーが鳴ったとき、部長はほっと表情をゆるませた。

「あ、もう終わりですか」

純菜が男を解放して立ち上がる。

腰が抜けて立ち上がることもできない部長を見下ろすと、純菜がニッコリと笑って続けた。

「部長、後半はコレで責めますからね」

ニッコリと笑いながら、純菜が口を大きくあけてその長い舌をベロンと部長に見せつけた。

その舌を小刻みに動かしている様子は、まるでカエルを前にして舌を出す蛇のようだった。

「部長の乳首、舐めちゃいます。たぶん、さっきまでの責めより強い刺激になると思うので、気を確かにもってくださいね」

「ひ、ひいひいッ」

「ふふっ、覚悟してくださいね、部長」

そう言うと、自分の陣地に帰って行く純菜だった。その悠然とした足取りは自信に溢れていた。男の精液を絞りとればとるほど、純菜の自信は高められ、その魅力も溢れるようだった。

「すごすぎる」

俺は思わずつぶやいていた。

まだ入部してから1週間もたっていないのに、純菜はバトルファック部を完全に支配しつつあった。彼女はあくまでも真面目で丁寧な優しい女性のままで、それなのに、リングの上では圧倒的な存在で、男子部員たちは為すすべもなく彼女に精液を搾り取られるだけなのだった。

「うううッ」

「ああ……ああ……」

「もう無理……ああ……」

周囲から漏れる呻き声。

俺はリング下の競技場を見渡した。

そこには、既に純菜に搾り取られて、ぐったりとしたまま気絶している男たちの姿があった。副部長も佐藤もほかの男子部員たちも、皆、純菜の練習相手となって、犯されていた。

教本の練習をひたすら繰り返す。その間、一物にはいっさいの刺激を与えられず悶々とするだけ。試合終了の直前になってようやく射精を許され、意識をなくすまで絞りとられる。

それが、ここ最近のバトルファック場で繰り返し返されてきた日常だった。

競技場には精液の匂いが充満して、その中で男たちが呻き声をあげながら気絶している。まるで地獄絵図。それをつくっているのは純菜だ。

彼女は今も、試合再開を告げるブザーと共に部長に襲いかかっていた。

爆乳で部長を潰しながら押し倒す。時間が惜しいとばかりに強引に部長の顔面を谷間の中に埋め、乱暴にぐりぐり動かして強制的に息を吸わせて、あっという間に抵抗できない操り人形をつくり出してしまった。そこからは宣言どおりだ。

純菜の長い舌が部長の胸板をはいまわって、責め続けている。ディープキスですら手も足も出ないのに、一方的に乳首を虐められればどうなるか、見ないでも分かった。

「ひゃあああんッ！」

男の叫び声。

純菜が淡々と男の痴態を観察しながら、効率的に男を屈服させる動きを試し続ける。純菜の口の中に囚われた小さな乳首は、小刻みに動き続ける軟体動物に責め苦しめられ、あつという間に完全降伏してしまった。

じゆるじゆるうッ！

舌が乳首を虐める音と男の悲鳴。

部長に許されたのは試合終了のブザーが鳴るのを待つだけだった。しかし時計は無情にも13:00を刻んでいる。あと10分以上、この快樂地獄から逃れられないことを知った部長は絶望の表情を浮かべて、頭をバカにさせるしかなかった。

純菜の責めが続いていく。

*

土曜日の休日練習が終わり、恒例となった男子部員たちの介抱もすませて、俺は制服に着替えていた。

まだ男子更衣室では部長をはじめとしてほかの男子部員たちが呻いている。そこにむかって「お先です」と声をかけ、一人で帰宅することにした。

外に出ると暖かい熱気が鼻孔をくすぐった。あたりはすっかり暗闇で、校舎わきの外灯が点々と光をつくっているだけになっていた。その光に照らされて、とんでもなく魅力的な女性が校門そばに立っている。

「健ちゃん、お疲れさま」

「純菜か。どうしたんだ？」

制服姿の純菜がそこにはいた。

ブレザーのボタンを閉められないほどの爆乳がデンと鎮座してこちらを威圧してくる。さきほどまでの妖艶な彼女と、今こうして目の前に立っている真面目そうな彼女のギャップが、さらに純菜の魅力を増して見せていた。

「うん。ちょっとお願いがあつて」

「お願い？」

「そう。ねえ健ちゃん。明日、ちょっとつきあってくれない？」

にっこりと笑う純菜。見知った幼なじみの笑顔のはずなのに、俺は顔が赤くなるのを感じた。

「明日って、部活は休みだろ？ 何に付き

合えって？」

「うん。実はさ。今日でバトルファックの教本は一通りマスターしたんだけど、どうしても要領が得ない部分があつてね」

「ああ」

「それで、健ちゃんもってるバトルファックの参考書とか、DVDとか見せてもらえないかと思って。だから、明日、健ちゃんの家に行ってもいいかな」

お願いと手をあわせて笑う純菜だった。

どうにもその笑顔が恥ずかしくて、俺はそっぽを向きながら返答するしかなかった。「いいぜ。俺は明日はテスト勉強してるだけだから、何時でも構わないけど」

「本当？ ありがとう」

そう言って純菜はニッコリと笑うのだった

た。

俺たちは隣り合って歩きながら帰宅の途についた。

周囲の男から羨望の眼差しと嫉妬の視線が突き刺さってきたことは言うまでもない。

*

翌日。

朝からテスト勉強をしていた俺は、疲れを感じて台所に行き、冷蔵庫を開け、作り置きのお茶をコップに注ぐこともせず、直で飲んだ。

うちの学校は進学校で、間近に迫った中間テストも厳しいものがあった。しかも、60点を下回った生徒は強制補習となり、

1ヶ月間、部活も休ませられるという徹底ぶりだ。だからこそ、日曜日は全ての部活は休みとなって、生徒たちは勉強に明け暮れることになる。俺もその例にもらず、日頃の遅れを取り戻そうと朝から勉強していた。

その時、チャイムが鳴った。

時計を見ると午後1時だった。時間どおりだ。玄関を開けると、そこには純菜がいた。

「おう、来たかって……どうしたんだその格好」

俺は玄関で立っている純菜の服装を見て、目を点にしてしまった。

体のラインがぴっちり現れる黄色のセーター。ふわふわ素材の布地にも増して

柔らかそうな爆乳が、蠱惑的な曲線を描いて自己主張している。しかもそのセーターは長袖ではなく肩が出るタイプのもので、その肩から腕にかけての肌色がさらに色気を醸し出していた。

さらに下半身はタイトなミニスカートの革製の布地で光沢を帯びた黒色が、どこか扇状的な雰囲気醸し出している。そこから延びるムチムチの太ももと大きなお尻は、まさしくセクシーマシーンと言いつくすしかないものだった。

「変かな、やつぱり」

純菜が言った。

体をじろじろと見てしまっていた俺は視線をあげた。そこにはナチュラルな化粧を施し、ショートボブの髪も艶やかに手入れ

をされた絶世の美女がいた。テレビでもYOUTUBEでだって見かけない女性。その可愛さに、俺は「うっ」と呻いてしまった。

「バトルファックで強くなりたから、外見にも気を使おうと思って。まだ他の人に肌を見られるのに抵抗があるから、普段着も露出が高いものにするようにしてるの。ふふっ、これで外出ると、男の人の視線がすごくて、ほんと、恥ずかしいんだけどね」どこまでも真面目な純菜だった。

あくまでも、一度決めた目標を達成するための努力。バトルファックで強くなりた。そう決めた真面目な純菜は、ストイックに強さを求め続ける。目標を決めたらわき目もふらずに努力する真面目な彼女は健

在のようだった。

「と、とりあえず立ち話もなんだから、入
れよ」

俺は純菜を自室に案内した。

俺の部屋に入るなり、純菜は「わー」と
歓声をあげて、きよろきよろと部屋の中を
見渡した。

「健ちゃんの部屋、久しぶりに入ったよ。あ、
このポスター、まだかざってるんだ」

それは俺が尊敬するバトルファッカーで
ある西園寺拓也のポスターだった。俺が小
学生の頃から今も現役でチャンピオンであ
り続ける伝説のバトルファッカーだ。

「まあ、俺の憧れだからな。西園寺さんに
少しでも近づこうって、そう思って練習し
てるよ」

「へー」

「というか、純菜にはちよつと謝らないと
いけないことがあってな」

俺はバツが悪そうな顔をしながら、準備
していたものを純菜に手渡した。

「ほら、俺が持つてるバトルファック関係
の資料」

「わー。ありがとう」

「でも、ごめんな。見返したら、ほとんど全
部、西園寺選手関係のDVDしかなかった。
参考書関係も、男ものばかりでさ、女性の
技とかそういうのがのってる本はなかった
んだよ」

さっそくパラパラと参考書を読み始めて
いる純菜は俺の言葉を聞いているのかいな
いのか「そうなんだ」と抑揚もなくつぶや

くだけだった。彼女はひととおり、本に目を通すと言った。

「ねえ、DVDここで見ていい？」

「え、ここでか？」

「うん。音は出さないで見るから」

ダメかなと首をかしげる純菜。その可愛さにたじたじになりながら俺は口を開いた。

「別にいいぜ。でも、おまえも勉強しなくていいのか。中間テスト、もう2週間後だぞ」

「大丈夫だよ。予習復習は欠かしてないしね。それに、今は勉強よりバトルファックがうまくなりたいの」

「さすが学年主席は言うことが違うな」

純菜は頭がいい。

1年のころから進学校において常に学年

主席の座をキープしている。ほかの連中は学校の授業だけではなく予備校まで通って勉強してるのに、純菜はそんなこともせずに涼しい顔をして学年1位を不動のものにしていた。

「俺は気にしないからさ。ゆっくり見えていけよ」

「うん。ありがとうね、健ちゃん」
嬉しそうに笑って、純菜がDVDを見始めた。

俺はもうディスクがすり切れるほどに見返したDVD。年度ごとの名場面集から始まり、西園寺拓也監修の必勝バトルファック入門。男の俺が見れば参考になるのだが、はたして純菜が見て意味があるのだろうか。俺は心配になりながらも、自分の勉強に

戻った。

*

数学を片づけ、英語にとりかかる。英単語の暗記を重ねて、文法の復習をしていく。そんなふうに通強を続けていると、いつの間にか、自分がとんでもなくエロい気分になっているのに気づいた。

悶々として、さきほどから勉強に集中できている。頭もなんだかぼおとしてくる。いい匂いがして、その匂いをもっと求めてさきほどから息を荒げていることに気づいた。

一人で妄想しているのは純菜が男たちを搾り取っている光景だった。彼女が競技

水着に身を包み、その爆乳を揺らして、男たちを搾り取っている様子。その彼女が、今、こうして俺の部屋に私服でいるという事実が、さらにその妄想をリアリティのあるものにしていった。

俺は唾を飲み込んで、純菜のほうに振り返った。

部屋の隅、すぐそばのところ、純菜が食い入るようにしてDVDを鑑賞し続けていた。その眼差しは真剣そのもので、集中しきっている。DVDは最後のシーンを迎えており、それも終わって、クレジットが流れ出した。

「んんッ」

そこで唐突に純菜が伸びをした。

両腕を上にあげて、上体を猫のように伸

ばす。それによって、肩だしセーターから突き出る双丘もまたブルンと揺れた。ピチピチに張り付いた爆乳がさらに押し出され、その大きさと形が暴力的なまでに強調される。それを見ただけで、俺の頭に電流が走って、体がピクンと震えた。

「お、終わったか」

「うん。一本目だけだけどね。参考になっ
たよ」

「そうか？ なら、ほかのDVDも、ぜんぶ持って帰っていいぜ」

「え、いいの？」

「ああ。俺は何度も見返して、ほとんど暗記してるからな。男性用で申し訳ないけど、参考になるならしてくれよ」

ありがとうとニッコリ笑う純菜だった。

彼女はそのまま、何かを思いついたように口を開いた。

「そうだ。DVD見てて、試合前のダンスの改善点を見つけたんだけど、ちょっと見てくれないかな」

「改善点って？」

「うん。言葉で説明するの難しいから、実際に見せるね」

そう言うと純菜がいきなりセーターの裾に手をかけ、脱いだ。

彼女の肌色が唐突に目の前に広がる。その艶めかしい肌の張りりと、大きな胸がブルンと揺れて外気にさらされる光景を見て、俺は心臓が止まるかと思った。

「バっ、いきなり何してるんだ」

「え、ああ、大丈夫。下着じゃないよ。ほ

ら」

そう言って彼女は自分の体を見せつけてきた。

俺はそらしていた視線を戻すと、そこにはバートルファック用競技水着を身につけた純菜がいた。純白の面積の狭いビキニから、もはや凶器とも言うべき爆乳が大迫力で鎮座していた。

「慣れるために、休みの日も競技水着をつけてるんだ。驚いた？」

「そりゃあ、いきなりだったからな」

「ふふっ。それじゃあ、見ててね」

そう言うのと純菜が自分の胸を下から持ち上げて見せた。

ぐにやりと音がしそうに変形したおっぱいの形が、俺の下半身を直撃する。ゴクリ

と唾を飲み込み、俺はそこから目が離せなくなつた。

純菜は次々と動きを変えた。胸の下で腕を組んで持ち上げたり、背中ごしにこちらに振り返ってその横乳を見せつけたり、上体を伸ばして胸をそりあげてみたり、様々な角度からその凶器を突きつけてくる。

純菜が動きを変えるたびに、俺の意識はおっぱい一色となつていった。視界は次々に姿を変える爆乳にロックオンされ、頭がバカになつてしまう。

「はい、隙ありだよ」

純菜の言葉にハッとしたり。

気づくと、俺は純菜の両腕で頭部を抱え込まれて、その爆乳の一手手前に顔を押し込まれそうになつてた。

寸止めパフパフ。

目の前には、サバンの野生動物の毛皮だっってここまで生命力に溢れていないだろうという爆乳があつて、思わず俺は「うっ」と呻いた。

「さっきのDVDで西園寺選手の相手の動きを真似て見たんだけど、どうだった？」

純菜が俺のことを解放して言った。

彼女の顔を久しぶりに見た気がした。それくらい、俺の意識は純菜のおっぱい一色だったのだ。しかも、間近に迫った爆乳のフェロモンにやられたのか、俺の意識はただぼんやりとしたままだった。パフパフすらされていけない。寸止めで純菜は止めたのに、この有様だった。彼女がそのまま俺の顔をあの谷間に埋もれさせていたらどう

なったのか。俺はゴクリと唾を飲み込んだ。

「健ちゃん、大丈夫？」

そこで純菜が俺の様子がおかしいことに気づいたようだ。

俺はぼんやりとした頭でうまく口を開くことができなかった。さきほどから自分でも、チラチラと純菜の爆乳をチラ見するこゝとしかできていない。

「ごめんね。いきなりだったからビククリしたよね。寸止めだったから大丈夫だと思っただけど、刺激が強すぎたかな」

心底、俺のことを心配している純菜の表情。

彼女は俺の手をとると、優しくイスに座らせてくれた。

「大丈夫？ 健ちゃん」

「あ、ああ。悪いな」

俺はなんとか回復して純菜に声をかけた。

「しかし、すごいなお前のおっぱいは。触れてすらないのに、一瞬、意識が飛びかけたぞ」

「ふふっ、ありがとう。最近、バトルファック部の先輩たちもそうなんだよね。私の胸に触る前から、集中できてないんだ……技の練習にはちょうどいいけど」

「そ、そうなのか」

「うん。胸をあてながら触ったら、みんなすぐ射精しちゃうしね。そんなに気持ちいいのかな、これ」

そこで純菜が無造作に自分の胸をぐにぐにともて遊び始めた。

彼女の童顔とあいまって、その姿は近所

の公園でどろんこ遊びをしている子供にしか見えなかった。しかし、純菜が遊んでいるのは子供には備わることのない大きなおっぱいで、それがどこか扇状的な雰囲気醸し出している。

「最初は、もっとバトルファック部の先輩って強いと思ってただけだな」

純菜が言った。

その顔には普段と違い、どこか嘲笑するような笑顔が浮かんでいた。

「おっぱいだけであり得ないほど興奮するしさ」

「……………」

「私は素人なのに、技の練習したら我慢できないですぐに射精しちゃうし」

「……………」

「なんていうか、」

幻滅。

その言葉は優しい純菜の口から放たれることはなかった。自分の気持ちはおさえて周囲を気遣う純菜の素の部分。俺は言葉を返すこともできなかった。

「なんかごめんね、健ちゃん」

純菜が笑って言った。

セーターを再び着た純菜が、いつもの人を優しい気持ちにさせる笑顔で続けた。

「今のは忘れて？ 明日からまた部活がんばろうね」

「お、おう」

純菜はそのままDVDを抱えて帰っていた。

後に残された俺は、純菜のフェロモンが

残った部屋で悶々としながらも、なんとかしてやらないといけないと、そう思った。彼女の強さの役に立ちたい。そう感じた。

五

競技場では今日も男子部員たちが犯されていた。

リングの上。仰向けに倒れた藤山副部長が喘ぎ声をもらしている。

倒れこんだ副部長の体の上に覆いかぶさり、その胴体を両腕で抱きしめて拘束しているのは純菜だ。男の乳首をくわえて離さない艶めかしい女の唇が、さきほどから副部長の悲鳴をつくりだしていた。

純菜が副部長の乳首を責め続けている。

グロッキー状態の副部長はもはやされるがままで、自分の体にまとわりつく純菜のことをどかすこともできないでいた。

その両腕はダランとリング上に投げ出され、純菜に乳首を舐められてはアンアンと喘ぎ声をもらすだけ。

「ジュルルルっ！　じゅぽッ！」

さらに純菜の乳首責めが続く。

彼女は冷静な表情のまま上目遣いで副部長の痴態を観察していた。

自分の舌の動きで男がどれくらいヨがるのか、それを見極めながら責め続けている。がっちりとした男の体を抱え込みながら、乳首を舐め尽くしている様子は、獲物を捕らえた女郎蜘蛛がむしゃむしゃと食事をするようにも見えた。

「アヒイインッ」

副部長が弓ぞりになって痙攣し、ビクンと体を震わせた。

その痙攣でさえ純菜の体に押さえつけられ、トドメとばかりに甘噛みされた乳首の感触に男は白目をむいた。

「はい。メスイキしちゃいましたね」

純菜がようやく男の乳首から口を離して言った。

乳首と純菜の唇に唾の橋ができていることから、その乳首舐めの過激さを知ることができた。純菜はまるで見せつけるように、その唾の橋をじゅるじゅると吸い込み、ゴクンと飲み干してしまった。勝ち誇ったような彼女の顔を見て、副部長がビクンと痙攣する。

「まだ試合時間は残っています。次は左側の乳首もメスイキさせちゃいますね」

「や、やめて」

「メスイキさせられた乳首は癖になってしまいうそですよ。今後のバトルファックでは弱点になってしまいます。だから、全力で抵抗したほうがいいですよ、先輩」

副部長の懇願を無視して、純菜が再び、男の乳首を勢いよくくわえ込んだ。

男の悲鳴。ジュルジュルと下品な音を出して舐められる男の乳首。

それを純菜は平然と行っていった。

超然とした彼女の様子。

しかし、そこにはどこか焦りのようなものがあるのを俺は感じていた。

もはや純菜は教本のすべての技をマス

ターしてしまっているのだ。今も反復練習をするかの如く淡々と男の乳首を犯している。その様子は、これ以上強くなるためにはどうすればいいのか悩んでいるようにも見えた。

純菜をこの道に引っ張ってきたのは俺だ。彼女を指導してくれるコーチもいない中であって、なんとか俺が純菜の力になってやらなければいけない。俺は決意を新たにしていた。

＊

学生レベルの教本をマスターしたのであれば、次はさらに熟練度の求められる技を練習していく必要がある。

しかし、最近のバトルファックは細分化が進んでいて、男の俺が女の性技を研究している本を知るはずもなかった。

ネットを見てみても、どれもこれも同じに見えてくる。やはり、経験者というか、同じ女性の立場にたって、おすすめの教材を紹介してくれる奴が必要だ。

幸運なことに心当たりがあった。純菜を勧誘する前に真っ先に練習相手の打診をした相手。中等部時代にバトルファック同好会で一緒だった後輩だ。俺はさっそく彼女にアポをとり、会ってもらえることになった。

練習も終わった夜遅く。

指定された場所は彼女が通っているバトルファックスクール内に併設された喫茶店

だった。

「センパイ、こっちこっち」

周囲をはばからない大きな声がして、そちらを見ると待ち合わせ相手の女性がいた。

「久しぶりだな、姫華」

「そうッスね。練習相手になって欲しいって頼まれた時以来だから、もう1ヶ月ぶりッスかね」

俺は久しぶりに後輩の姿を見下ろした。

進学校の生徒には思えない褐色ギャルがそこにはいた。髪は金色に染められており、メイクも派手だった。男の俺から見てもアイシャドウがのっていることが分かる瞳は、元々のタレ目とあいまって、なんだか漫画じみて大きな瞳に見える。

その外見どおり強気の性格。バトルファ

ツクをやる女性にはよく見かけるが、ドSで、男をいじめるのがとにかく好きな女の子だった。

「スクールはどうなんだ？ やっていきけるのか」

「そりゃあもう、うちの学校みたいになへタレ男ばっかじゃないから大変ッスけどね。でもプロになるためッスから、これくらいは当然っしょ」

「そうか。がんばってるんだな」

姫華はプロ志望だった。

だから、練習相手に事欠く有様の学校の部活に入ることはせず、専門のバトルファックスクールに通っているのだった。練習相手を頼んだ時も、ヘタレと練習したらヘタレがうつると開口一番で拒否された。

「それで、今日はなんの用ッスか？」

姫華の言葉に、俺は事情を説明していった。

新しい女性が入部したこと。そいつが伸び悩んでいること。バトルファックに関するお勧めの教材を教えて欲しいこと。それを黙って聞いていた姫華は不機嫌そうに言った。

「ソイツ、どんな奴ですか？」

「ソイツって、純菜のことか？」

「そうッスよ。一番の武器っていうか、どんな分野の人間か分からないとアドバイスのしようもないっしょ」

「そうだな、すまない。一番の武器は胸だよ。できれば、そっち方向でオススメを教えて欲しい」

俺が言うのと、姫華はニンマリとして笑った。

「あゝ、だからウチに話しもってきたのかゝ」

「そうだよ。悪いか」

「悪くはないツスよ。そうですよねゝ、ウチの胸、おっきいでもんねゝ」

いたずら娘のように姫華が笑って、テーブルの上に自分の巨乳を乗せた。

着崩した制服のブラウスから谷間が見え隠れする。テーブルの上にのった双丘は着衣ごしなのに迫力がすごかった。

思わずそれを凝視してしまった俺の視線に満足したのか、姫華が言った。

「まあいいツスよ。わたしのオススメ教材、ぜんぶ教えてあげます」

そう言って姫華が教材を教えてくれた。

学生レベルではあまりいない巨乳をいかけた戦い方。その研究をしている最先端の論文や、ハウツー本。プロバトルファッカー監修の教材。それを教えてもらって、俺はメモをとった。

「助かる。サンキューな」

「いえいえ。まあ、貸し1つてことでヨロです」

「ああ。今日はとりあえず俺のおごりだから、好きなもん食えよ」

「ほんとツスカ。今日も激しかったから腹へってるんツスよねゝ。やったゝ」

そう言って遠慮なく注文していく姫華。

女性にしては体格がいいといっても、この細身の体のどこに入るのかっていうほど

の料理を次々と平らげていく。俺がジッと見ていると、盗られると思ったのか、ジト目でこっちを警戒して、バグバグと食べていくのが可愛かった。

「しっかし、センパイは今のままでいいんっすか」

全部食べ終わった後で姫華が言った。

「新しく入ったソイツもセンパイの練習相手になってくれないんっすよね。このままじゃ、どんどん弱くなるっすよ」

「そうだよ、な」

「そうっすよ。女子選手と実践練習もしないで強くなれるわけないっす」

「まあでも、相手がいないもんは仕方ないだろう」

「だったら、センパイもウチと一緒にスクー

ル通えばいいじゃないっすか。なんなら、ウチが紹介してやってもいいっすよ？」

スクールは実力主義で誰でも入れるわけではない。

スクール生の紹介なら入塾も楽になるという話しは聞いたことがあった。しかし姫華がここまで面倒見が良いとは驚きだった。俺は感謝の気持ちを伝えようと口を開こうとした。

「おいおい姫華。お前マジかよ」

その時、聞きたくない声が聞こえた。

そいつは無神経に俺と姫華の座っているテーブルに割り込んできて、我が物顔で座った。足を組んで、トレイの上のブラックコーヒーを一口飲んでから言った。

「コイツにスクールなんて無理だろ。レベ

ルが違うよレベルが」

「黒宮。おまえ、なんでここにいるんだ？」

目の前の男も中等部時代のバトルファック同好会の知り合いだった。

俺と同学年で、やたら自信家の男だ。悪いことにその自信に見合うだけの実力をもっていた。ドSで中等部のころから荒々しいプレイスタイルで有名な男だった。

「お前、推薦でBL学園入ったはずだろうが。なんでスクールにいるんだよ」

「暇つぶしかな。ブハハハ。女なんてすぐに壊れちまうからさ。BL学園の俺の練習相手、入院しちまってよ。学園が新しい相手探してくるまで、こっちでやってるんだよ」

イヤな笑顔で黒宮は言った。

「あ、練習相手つてのは推薦入学組にだけ与えられる専用の女の子のことだよ。BL学園では壊れても代えの効く成績落伍者が選ばれるんだ。まあ、あいつらも俺みたいな実力者の練習相手になれるんだから、壊されても本望だよな」

ブハハハと笑いながら、黒宮が聞きもしないことを喋りたててきた。

俺は不快な気持ちでいっぱいだった。目の前の姫華も露骨にイヤな顔をして黒宮のことを睨みつけている。

「うるせーし。勝手に同じテーブルに入ってくるなっつーの」

「ああつ。なんか言ったか姫華」

黒宮が姫華を睨みつけながら言った。

「お前、そんな口きいていいと思ってるの

か？ また今日みたいにイキ狂わせてやるか。ヒイヒイアンアン泣き喚くまで、今から犯してやるよ」

凶暴な顔つき。沸点が低すぎるのがこいつの最悪な性格の一つだった。

俺は黒宮と姫華の間に割って入った。

「それくらいにしとけよ黒宮。いくらお前でも、バトルファック以外で人を傷つけたら退学になるんじゃないか？」

「ああッ？ 全国にもいけねえザコは黙っとけよ」

「まあ今年は見とけよ。お前こそ、足下すくわれて負けるんじゃないぞ」

にらみ合う。

プチ切れていた黒宮の顔がこちらを嘲笑するようになり、ブラックコーヒーを一瞬

で飲み干すと立ち上がった。

「まあせいぜい、ザコはザコ同士でつるんどけよ。じゃあな」

そう言って黒宮は去っていった。

その後ろ姿を屈辱で顔をゆがませながら睨みつけていた姫華がぼつりとつぶやく。

「強くなって、あいつにはいつか復讐してやる」

強い意思が顔に浮かび上がっている。俺はそいつの頭をポンと撫でた。

「できるよお前なら。がんばれ」

キョトンとした顔はすぐに笑顔になった。

口は悪いが姫華は可愛い後輩だ。がんばって強くなってもらいたい。そして、それは純菜も同じだった。俺は姫華に礼を言って、その場をあとにした。

*

さっそく姫華に教わった教材を買い占めた。

駅前の大型本屋でもすべて買い揃えることはできず、amazonやネットオークションまで駆使してなんとかコンプリートすることができた。教材のいくつかはプレミアがついて高騰していた。これまで長期休暇でバイトしていた金はかなり減ったが、まあそれも純菜をこの道に巻き込んだ責任だった。

「ありがとう健ちゃん」

純菜に教材をプレゼントした時、純菜は本当に嬉しそうに笑ってくれた。それだけ

で、俺はとてつもなく嬉しく感じたことを覚えている。

「胸の大きなバトルファッカーにとって必要な技がぜんぶ書いてあるってよ。パラパラ見てたけど、学生レベルの胸じゃあ持て余す技ばかりだったよ。でも、お前だったらきつと、使いこなせると思うぜ」

「本当にありがとね。私を買った教材だと、健ちゃんが言うように基本的な技しかのってなくて困ってたんだ。インターネットだと体系的に理解できなくて、うわっ、すごい。こうやってやるんだ」

早くも純菜は教材を食い入るように見ていた。

本とDVDだけでも相当な量だが、頭のいいこいつならすぐに知識を得ることがで

きるだろう。後は実践あるのみだ。

「わたし、ぜったいに強くなるよ。見ててね、健ちゃん」

そう力強く宣言する純菜だった。

そして、それはその通りになった。

*

「あひいひいインッ！」

純菜に教材を渡した翌日から、バトルフアック競技場の男たちの悲鳴がさらに増すことになった。

あらたな技を覚えた純菜は、実践でそれを試し始めた。極上の女体が男たちの体を絞り尽くしていく。そんな凶悪な性技の中でも一番強烈なものが、今、純菜が佐藤に

かけている技だった。

「ほら見て佐藤くん。佐藤くんのち●ちん、わたしのおっぱいの中に隠れちゃったよ」

ニッコリと笑いながら純菜が言った。

哀れな佐藤はリング上に仰向けで横たわっていた。その男の尻を自分の膝の上に乗せて拘束し、純菜が死刑を執行しているのだ。

パイズリ。

大きなおっぱいが、佐藤の一物をすっばりと挟み込んでしまっていた。大きさの格が違う。純菜の張りのある大きな胸の中に佐藤の一物は根本から亀頭まで完全に埋もれ、吸収されてしまっていた。

「ひっぎいひいッ！」

佐藤の顔は快感でトロけ、恐怖に歪んで

すごい顔になっていた。まるで赤子が純粹な恐怖の対象に対して泣き叫んでいるみただった。

同級生の女子生徒のおっぱいに完全屈服してしまっている男子生徒。普段は強気の発言が目立つ佐藤が、純菜のおっぱいの前では従順な奴隷になってしまっていた。

「あああああッ！」

「すごい悲鳴だね。まだ挟んだだけなのに」

「しゅごしゅぎいッ！ だめええッ！」

「乳圧強めるよ」

「や、やみヤッヒヤアアアッ！」

純菜が佐藤の制止を聞かずに、両手で左右から自分の爆乳を挟み込んだ。

ぐにゃつと柔らかい肉が潰れて変形する。その力強さは外からも分かるものだった。

その中に拘束されている佐藤の一物がどうなっているのかなんて、想像したくもなかった。

「かあ——ッ！ ひ——！」

声にならないかすれた悲鳴。

佐藤の体が弓なりに痙攣し、白目になった。

まだ挟まれて乳圧を強められただけ。それなのにこの破壊力だった。

「じゃあ、動かすね」

どこまでも残酷に純菜が言った。

制止する言葉すら発することができなかつた佐藤は、始まったパイズリを前にしてなにもできなかつた。

純菜がおっぱいを持ち上げ、その重量のまま佐藤の腰に打ち付けた。パンツという

小気味のいい肉の音が響き、佐藤が射精した。

「ひゃああああッ！」

どぴゅ、ドピュピュ——ッ！

電気ショックでもくらったみたいに佐藤の体が暴れ始める。

一瞬のうちに気絶してしまった佐藤が、無意識の中でも純菜のおっぱいから逃れるために体を痙攣させて暴れていく。しかし、純菜のおっぱいは貪欲に男の一物を挟んで離さず、暴れ回る男の体をいなしてしまっていた。

すぐに佐藤の精液は空っぽになった。

「一回打ち付けただけなのに、すごい射精したね」

純菜が言った。

「ほら見て佐藤くん。わたしのおっぱいの中、佐藤くんの精液でどろどろになっちゃった」

純菜が佐藤を解放すると、まるで見せつけるように自分の胸の谷間を開いた。

ドロドロと、大量の白い液体が純菜の爆乳からこぼれ落ちて、リングに横たわった佐藤の体にふりかかっている。

「教本どおりにしてみたけど、そんなにすごかったかな……って、もう聞こえてないか」

リングに横たわり、自分の放出した精液まみれになった男。まったく意識を取り戻す様子がなく、白目をむき、口からはブクブクと泡まで吹いている。

「うん。でもだいぶコツが掴めたような気

がする。次はもっとうまくできるかな」

純菜が笑った。

リング下で顔を真っ青にしている岸田部長にむかって、彼女は死刑を告げる。

「それじゃあ、岸田部長。次の試合の相手、よろしくお願いします。今日はパイズリを徹底的に練習しますので」

極上の女体。

男の精液を浴びて、純菜の魅力はさらに増して見えた。男の精液を絞りとするほど、純菜の体は生命力を増し、ますます魅力的になっていく。リングの上に立つ純菜は、男たちの精力を栄養にするサキユバスのように見えた。

六

純菜の練習は続いていった。

真面目な純菜は、巨乳バトルファッカー専門の教材を熱心に読み込み、練習を重ねて、全ての技をあっという間にマスターしてしまった。

そんな彼女に勝てる男子部員などいるはずもなく、部活動は、男子部員が純菜に精液を搾り取られるだけの時間になっていた。男子部員たちは少しづつ純菜のことを恐れるようになっていった。

彼女の顔色を伺って練習するようになるまでそう時間はかからなかった。

実力差は明らかで、中には純菜に媚びへつらうように接する者も出てきたくらいだ。彼女にバトルファッカーの指導を求める男子

部員も後をたたなかつた。少しづつ、俺たちのバトルファック部は変わっていった。俺はそのきっかけを思い出していた。

＊

バトルファック部の力関係が完全に変わってしまったのは、6月の中旬のことだった。

最初は純菜からの相談から始まった。

「はあ？ 柔らかくなってる気がする？」

場所は俺の部屋だった。部活終わりの帰り道。相談があるといって俺の自室にあらこんだ純菜が困った顔をして言うのだった。

「うん。ほかの男子部員の人たち、勃起の

かたさっていうのかな、そういうのが最初の頃よりなくなってきたの」

「バトルファック中になってことか」

「そう。なんだか心配になっちゃって。変な病気にかかっちゃったのかな。どう思う、健ちゃん」

そう言って、心底心配そうにしている純菜だった。

制服姿の彼女は本当に可愛く見えた。夏服となった制服では純菜の爆乳を押さえることもできず、ボタンがぎりぎりとなんとなく女の子が俺の部屋にいるだけで俺は若干興奮していた。

「どう思うも何も、そんなの当然じゃないか」

「健ちゃん、原因分かるの？」

「ああ。っていうか、お前だよ原因は」

「わ、わたし？」

驚く純菜だった。

俺が教材を渡してからというもの、純菜の成長スピードは驚くものだった。

それによって、男子部員たちは今まで以上に精液を搾り取られている。

毎日毎日、精巢が空っぽになるまで射精させられれば、体力もなくなるし、勃起力だってなくなるだろう。そう思うのが自然なくらい、純菜は徹底的に男子部員たちを絞りとっていた。

「そうか。それが原因だったんだ」

純菜が合点がいったようにつぶやいた。

「でも、けっこう手加減してるんだけどな。

それでも勃起が弱くなっちゃうんだね」

「まあ、男はこう見えて繊細なんだよ。年下の素人バトルファッカーに毎日犯されてたら、遅かれ早かれそうなっちゃまうよ」

「そうなんだね。どおりで最近、藤山副部長が私に媚びてくるようになったなと思ってたんだ。あの人、年下の私に敬語つかってくるんだよ？ リングの上でもすぐ降参して射精するだけになっちゃうしさ。ほんと、バトルファッカーというより家畜だよアレじゃあ」

不快感を隠そうともしない純菜。

ストイックに強さを求めている純菜は、ほかの男子部員たちの情けない様子にいらだちを感じているのかもしれない。純菜の口から出た「家畜」という単語はそれを端

的に表しているように見えた。

「でもそうか。なら、あんまり射精をさせなければいいんだよね」

純菜がブツブツとつぶやく。

「問題は家で自分でしちやうのをどうするかだよ。ずっと監視しているわけにはいかないし。うーん、どうしよう」

一人で考えていく純菜。そこに危ういものを感じた俺は彼女に声をかけようとするのだが、それよりも前に純菜が立ち上がった。

「ありがとうね健ちゃん。参考になったよ」

「そ、そうか？」

「うん。なんとかなりそう。それと、西園寺拓也選手のDVDももう少し貸しておいてもらっていいかな」

「ああ、別にいいけど。女のお前じゃ参考にならないんじゃないか」

「そんなことないよ。バトルファック界で一番あの人が強いんだよね。だからちゃんと研究しておきたいんだ」

ニッコリと笑った純菜。

彼女は俺に対しては変わらずに優しい幼なじみのままだった。

それじゃあねと純菜は笑顔で帰って行く。彼女は解決策をはやくも思いついたようだ。その内容は翌日すぐに知れることになった。

*

「て、貞操帯の着用？」

練習前のバトルファック場だった。

そこで純菜が、男子部員全員を前にしてあるお願いをしていた。それが男子部員に貞操帯を着用してもらうということだった。それを聞いた部長たちは、あまりの驚きでポカンとしていた。

「はい。これから、一日の実践練習を3人までにしたいと思うんです。そうすれば、3日に一度の射精ですむので、先輩方の負担も少ないかと」

「純菜くん。それと貞操帯がどう繋がるのかね」

「はい。そうすると、みなさんには2日間射精を我慢していただくことになるので、そうなる、我慢できずに家でオナニーしてしまう人も出てきてしまうと思うんです」
童顔の純菜からオナニーという単語が出

てきただけで、周囲の男子部員たちがざわめいた。

「だから、貞操帯をつけて実践練習以外では射精しなくてもいいんです。そうすれば、万全の体勢で実践練習ができますから」

「しかし、貞操帯をつけずとも我慢すればいいだけなのではないかね。オナニーをしなければいいのだろうか？」

部長の言葉に「そうだそうだ」とほかの男子部員たちが口々に言った。それを見て、純菜は困ったように。

「でも、我慢できますか？」

「うっ」

「競技場では、私が毎日実践練習するんですよ。この胸でこの舌で、毎日実践練習す

るのに、それを見て、夜、我慢できませんかね」

純菜が自分の腕で爆乳を下から持ち上げた。ぐんにやりと歪んだ圧倒的なおっぱいを見て、男子部員たちが黙ってしまう。

「私の体を思い出して、我慢できずにオナニーしてしまうんじゃないですか？」

「そ、それは」

「こんなふうにおっぱい揺らしてる私の姿を想像して、リングの上と同じように無様に射精しちゃうんじゃないでしょうか？」

魅了のダンスを踊り始める。

次々に姿を帰る爆乳に、部員の中ではそれだけで前かがみになってしまふ奴もいた。それほどまでに純菜のおっぱいは圧倒的だった。彼女の言葉も荒唐無稽というわけでは

ない。この爆乳を前にすれば男たちの前頭葉なんて全くのでくの坊と化してしまうのだ。

「俺はごめんだね」

黙りこくった部員たちの中にあって力強く吐き捨てた男がいた。佐藤だ。彼は怒りで瞳を燃やしながら、純菜に人差し指をつきつけながら言った。

「おい、夢野。お前、なんか勘違いしてないか」

「勘違いですか？」

「そうだよ。少しばかり強いからって、なんでも許されると思ったたら大間違いだぞ」
「そんなこと思ってないです。わたしは、みなさんがさらに強くなれるようになって」
「大きなお世話なんだよ。素人バトルファッ

カーの分際で、先輩に口立ちしようってのがそもそも間違いなんだ」

とにかく俺は認めねえ。

そう言って佐藤は去っていった。その後ろ姿にむかって、純菜は怪しく笑って言った。

「そうですか。それじゃあ、リングの上で「お願い」するしかないですね」

その表情と言葉に全員が石になった。

純菜の言葉はただちに実行に移された。

実践試合とは名ばかりの処刑が始まる。

純菜は決して男たちを射精させなかった。

どこまでも残酷に、男たちの性感を高めるだけ高めながら、いっさいの射精を許さないサキュバス。男たちは乳首と前立腺を徹底的にいじめ抜かれ、メスイキで意識を刈

り取られていった。

胸の中に顔を押し込めて沈め、匂いを吸わせてからのディープリキスだけで廃人に追い込むほどの技量。それほどまでの苛烈な責めなのに、純菜は指一本、男たちの一物に触れることはしなかった。

「イかせてくださいしいいッ！」

男たちは一人の例外もなくそう叫んだ。

特に命令もされていないのに、バトルフ

アックの実践試合で射精を懇願する男たち。

それほどまでに純菜の責めは圧倒的だった。

射精したくてもできない。追い込まれた男

たちはバカになり、純菜に懇願してしまうのだ。

「貞操帯つけてくれますか？ 我慢できないんなら、それしかないですよね」

悪魔のような囁き。

射精を懇願する男の耳元で貞操帯の着用を「お願い」しながら、その指で男の乳首をいじめ抜く。大きな胸を意図的に男の体に押しつけてコントロールしていく。身も心も溶かされてしまった男はそれだけで絶叫した。

「つけますからあぁッ！ 貞操帯つきますから射精しやせてええッ！」

泣き叫んだ男に対して、純菜はニッコリと笑い、悪魔から天使が変わって男たちを射精に導いた。

その爆乳の中に一物をしまいこみ、シェイクするようにして男の精液を絞り出してしまう。その技量は一度の射精で精巢を空にさせてしまうほどで、そのパイズリをくらっ

た男たちは純菜に従順に従うようになっていった。

「つけるからッ！ つけるって言うてるじゃんッ！ 射精させてええッ！」

純菜が特に念入りに「お願い」したのは佐藤だった。

佐藤が屈辱と共に射精を懇願し、貞操帯の着用を約束しても、純菜は「お願い」をやめなかった。

背後から佐藤の下半身をかかえこみ、その長い舌で男の尻穴を犯し尽くしていく。パイズリと並ぶ純菜の必殺技。これをやられた男は人間をやめて家畜になるしかない。獣の悲鳴をあげた佐藤は、それでもなんとか人間の言葉をしゃべって射精を懇談し続けた。次第にその言葉は敬語になり、情

けないものにかわっていく。

それなのに純菜は笑顔で佐藤のアナルを犯していくだけだった。その懇願が耳には届いていないように無視して、ただひたすら「お願い」を続けていく。

「イカしゃやてくださいしいいッ！ 純菜さんッ！ お願いしましゅうっ！」

ついに純菜に敬語を使うようになってしまった。

四つん這いのまま涙をぼろぼろ流して懇願する佐藤。

それでも純菜は「お願い」をやめなかった。彼女の舌が佐藤の前立腺を的確に刺激しながらも、射精の一步手前で刺激は遠のき、その周りだけを丹念に舐めあげていく。佐藤に許されたのは、必死の命乞いだけ。

試合終了まで、純菜の「お願い」は続くことになり、彼女に逆らった男がどうなるのか、ほかの男子部員に見せつけていった。

＊

「はい。みなさん、貞操帯の感触はどうですか」

お願いをきいてくれた男子部員に対して、純菜は優しく問いかけた。

彼女の目の前、そこには全裸で立たされた9名の男子部員たちがいた。男たちの股の間には、銀色の貞操帯が滑稽に光り輝いていた。

「みなさんが私のお願いをきいてくれたおかげで、スムーズに話しが進んでよかった

です。さきほども言いましたが、これからは3日に一度だけ実践形式の試合をします。分かりましたか？」

純菜の問いかけに、男たちが首を勢いよく縦に振る。

「その間、みなさんの貞操帯の鍵はわたしが責任をもって管理します。そうそう。一度でも私に勝てたら、すぐに鍵はお返ししますので、みなさん、がんばってくださいね」

くすりと笑った純菜。

彼女は知っている。自分と男子部員たちの間にある圧倒的な実力の差。それを知って、彼女はまるで嘲笑するように続けた。続けた。

「それから、これからは実践形式の試合中、

みなさんの足りないところを私が指摘しますのでそのつもりでいてください。総体まで2ヶ月を切りましたので、いよいよ努力していく必要があります。みなさん、がんばりましょう」

笑顔の純菜。

彼女はいつものように優しくニッコリと笑った。その笑顔を前にして、男子部員たちは恐怖に震えあがるしかなかった。純菜の迫力を前にして、男子部員たちは戦う前から彼女に負けているのだった。

七

初夏になった。

空気が変わって、じわじわと熱気を感じ

させるものになっていく。街路樹の緑は波のようにどこまでも広がって、空の青さは絵の具でも落としたみたいに映えて見えた。

走っていると体はすぐに汗ばみ、太陽の容赦のない光が直接俺の体を焼くのを感じた。アスファルトが焦げ付くように感じられ、その上を走る俺の体はフライパンの上の目玉焼きのように蒸し焼きにされるようだった。

放課後。

俺はロードワークの最中だった。もはや日々の日課にもなったトレーニング。体力があったら誰にも負けない。そんな自負さえ覚えるほどに、俺は走りに走った。

周りからは「お前いつから陸上部になったんだよ」なんてからかわれたりしたが、

仕方なかった。陸上部の顧問からも勧誘されたが、この練習はすべてバトルフアックで強くなるためのものだったので、丁重にお断りした。

ランニング以外のトレーニングは筋トレだった。学校のトレーニング室で、顔を真っ赤にしながらバーベルを持ち上げプロテインを飲む毎日。筋肉を鍛えることで男性ホルモンが多く分泌され、精神的にも強くなるという研究結果に基づくトレーニングだった。数ヶ月の筋トレの成果もあって俺の体は男らしく筋肉がもりあがったものになっていた。

周りからはこれまた「お前いつからウエイトリフティング部になったんだよ」とからかわれたりしたが、これも仕方のないこ

とだった。

練習相手のいない俺にできることといったら、体を鍛えて基礎体力をあげることくらいだったのだ。だから愚直に、周囲になにを言われようが、俺はランニングと筋トレに精を出していた。

トレーニングの内容からも分かるとおり、部活中、ほとんど俺は競技場にはいなかった。ランニングコースを走り、トレーニング室に入り浸る。競技場に行くのは全てのトレーニングが終わった後になっていた。

競技場に行くのは気がすすまなかった。

貞操帯の一件の後にますます顕著になったこと。あの匂いと悲鳴がどうにも耐えられなかったのだ。俺がランニングと筋トレに集中しているのは、競技場にいる時間を

少しでも少なくするためかもしれない。

「と言っても、ランニングも筋トレも終わったら、競技場に行くしかないよな」

俺は覚悟を決めて競技場へと向かった。

競技場に入ってまず気づくのはムっとする精液の匂いだ。まるで競技場全体に精液を塗りたくっているのではないかと思うほどの濃密な雄の匂い。それが鼻孔をくすぐってくる。

さらに気づくのは男の悲鳴だった。アンと甘ったるい喘ぎ声は、すぐにオオオアンと犬の遠吠えのような獣じみたものになり、絶叫の上で唐突に止む。気絶という救いを得た男はしかし、次の瞬間には覚醒させられ、また喘ぎ声をもらしていった。

リングの上で、純菜が藤山副部長を犯し

ていた。

*

「4回目だから、次は少しはもたせてくださいね」

純菜が言った。

彼女は男の体の上に仰向けで寝そべりながら、パイズリをしていた。

ちょうどシックスナインのような格好。

純菜はムチムチの太ももで男の顔を挟み込み、自分の秘所を男に舐めさせていた。

その格好のまま、自身の爆乳でもって男の矮小な一物を挟み込み、潰しあげて処刑している。さきほどからパンッパンッという肉の殴打音が響いている。

それとは対照的に副部長の舌が純菜の秘所を舐める音は弱々しく聞こえるだけだった。その音もすぐに男の悲鳴によってかけ消されてしまう。

「アヒイイんツ！ やひゃあああッ！」

男は攻撃手段をあっさりと放棄して、純菜のパイズリから逃れようと体を暴れさせ始めた。それは捕らえられた虫が必死に命を守ろうとしているようで滑稽なものだった。

「……ふう」

純菜が退屈そうにため息を吐いた。

彼女は戦う気持ちをなくした相手に対してどこまでも残酷だった。

いきなり、彼女のムチムチした太ももが男の頭部をさらに強く締め上げた。男の顔

面が純菜の巨尻に埋もれ、太ももの中で圧迫される。その肉感はずさまじく、副部長の頭部はすっぽりと見えなくなってしまうた。

「敵前逃亡なんて情けないです。そこで反省してください、先輩」

ぎゅううううッ！

そのまま太ももの締め付けを強め、男の頭蓋骨を軋ませていく。

副部長の体が直接的な意味で死の恐怖を感じたのか半狂乱になって暴れ始める。

その荒々しい動きを、純菜はおっぱいを動かすだけで封殺した。

むにゅううッ！

そんな音が聞こえそうになるくらい、純菜がおっぱいを両側から挟みこみ、乳圧を

増した。

電気ショックでもくらったみたい副部長の体が痙攣して、動きがとまってしまう。「パイズリで連続射精させちゃいます。気を確かにもたないとすぐに気絶してしまいますから、注意してくださいね」

いきます。

そう言って、純菜が荒々しく動いた。犯している。そう表現するのがふさわしい動きだった。男が女を犯すように、純菜はおっぱいを男の急所に打ち付けて、逆レイプしていった。

「おおフォオオンッ！」

すぐに副部長が人間ではなくなった。くぐもった悲鳴が純菜の太ももの中から響きわたり、すぐにビクンビクンと痙攣し

始めた。びゅっびゅと勢いよく射精していることはその尋常ではない痙攣からも明らかだった。

しかし、子種であるはずの精子たちは、すべて規格外のデカさを誇る純菜の胸の中に捕らえられてしまい、一滴たりとも谷間の外に脱出することができていない。

射精しても純菜の殺人的なパイズリは終わらず、それどころか絶え間なく噴出する精液をローション代わりにして、さらなる過激さでおっぱいが一物を犯していく。ぐちゃぐちゃという粘着質な音がリング上に響きわたること3分間。ようやく純菜がパイズリを止めて言った。

「もう空っぽですね。早すぎます」
淡々と事実を確認する純菜だった。

彼女はおっぱいを両手で挟み込みながら、男の一本だけ抜き取ってやった。そのまま、体の向きを変え、男の胴体の上で女の子座りをして男を見下ろす。

「ほら、先輩。見てください。こんなに射精したんですよ」

そう言いながら、純菜がおっぱいを開いた。

どろりと大量の白い液体がこぼれてきて、それが副部長の顔の上に降り注いだ。生クリームでも乗せているのかと思うほどの大量の精液。純菜はそれを意図的に副部長の顔面めがけて注いで、敗者の尊厳を徹底的に奪っていった。

「ほら、起きてください」
純菜が副部長の両乳首をつまみ上げ、的

確に弱点をつく動きをした。

それだけで、副部長はビクンと盛大に痙攣して、意識を回復させてしまった。

「いつまで寝ているんですか、先輩。次の試合があるので、先輩の精液で汚れた私の体、舐めて綺麗にしてください」

どこまでも残酷な純菜だった。

副部長の精液でどろどろになった純菜の体。それを見た副部長がイヤイヤをするように顔を横に振って許しを乞う。眉が下がって、瞳は涙目になって、負け犬のように顔を歪ませた副部長。そんな弱い男に対して、純菜はどこまでも辛辣になれた。

「先輩、指導役のわたしに逆らっていいと思ってるんですか？」

「う、ああアッ」

「あなたは3年生のくせに弱すぎて話しになりません。強くなりたいたいという向上心もない人は邪魔なだけです。弱いなら弱いなりにがんばって貢献してもらわないと。それもできないなら、この部には必要ないということになりますよ」

いいんですか？ と、純菜が念押しした。とどめとばかりに彼女はその爆乳を左右から押し上げ、ぐんにやりと潰した。それがトリガーとなって、男は半狂乱になりながら純菜の体に吸いついた。

「じゅるるるッ！ じゅばああッ！」

副部長が純菜の体を舐めていく。

まずはその大きな胸の谷間。その次は脇の下と、順番に純菜の体を舐め清めていく。それを純菜は淡々と受け止めていた。

「ほら、そこは強弱をつけるんです。前に教えましたよね」

純菜が厳しい口調で言う。

「私の体を綺麗にしてもらうのと同時に、これは先輩の練習でもあるんですからね。ちゃんと女の子を悦ばせるように動かさないと。ほら、また忘れてる。そこはどうやって舐めるんですってっけ？」

容赦のない叱責。

それはここ最近よく見られる光景だった。まだバトルファックを初めて2ヶ月の素人バトルファッカーが、先輩部員たちを指導していく。

同級生の佐藤は最後までがんばっていたが、今ではもう純菜の奴隷に思えるほどに従順な人形になってしまっている。

わずか数ヶ月で純菜はバトルファック部を掌握してしまつたのだつた。

それだけ、純菜の実力はけた違いだつた。俺が教材を渡してからというもの純菜の成長は段違いに伸びた。またたく間に教材のすべてをマスターし、それを実践してしまつた純菜。もはやこの部で彼女に勝利できると思っている者は一人もいなかった。

「そうです。その動きを忘れないでくださいね」

純菜が満足したのか副部長を解放して言った。

彼女はほかの男子部員から水の入ったバケツを受け取ると、それを副部長の下半身にかけて洗い始めた。男子トイレの便器を

ゴシゴシと洗う清掃員のように事務的な手つきを繰り返す純菜。それが終わると彼女は、いつものように貞操帯を取り出した。そのまま銀色に光る貞操帯を男の好物に装着して男の象徴の自由を奪う。

「それでは次は部長です。リングにあがってください」

純菜が宣告し、部長がリングにあがる。まず行われるのは部長の貞操帯をはずす作業だった。

純菜によって管理されている鍵でもって部長の貞操帯がはずされる。部長の好物が期待に胸をふくらませてピクンとフル勃起した。これから絞りとられて散々な目にあわされるといふのに、雄々しく勃起してしまふ男の下半身はあまりにも情けなかった。

「それでは始めましょう。今日はアナル責めをするので耐えてください。もちろん、反撃はご自由にどうぞ」

ニッコリと笑う。

純菜は部長に対してはまだ尊敬の気持ちをもって接しているのだ。

強くなろうと努力しているか、それとも純菜に身も心も捧げて精液を放出するだけの家畜になってしまっているか。

それによって純菜の態度は180度変わっていた。部長はまだ強くなりたいと真剣に努力していた。そんな相手に純菜は本来の優しさでもって接しているのだった。もつとも、精液を絞りとられるという点では同じだった。

「ほら、必死に逃げてください。アナル舐め

られる体勢になったらもう終わりですよ」
純菜が部長の背後にまわりこみ、その背
中を爆乳で潰しながら言った。

部長はなんとかその巨大なおっぱいから
逃げようとするのだが、動けば背中が胸が
擦れてしまい腰砕けになる。あつという間
に部長の膝はリングにつき、四つん這いの
体勢になってしまった。その下半身をがっ
ちりと抱え込んで拘束し、部長の尻穴の間
近に顔を置くことに成功した純菜が言った。
「こうなったらもうダメです。一度、気絶
させますね」

「い、いやあああッ！」
「いきます」

純菜が無慈悲に宣言し、部長の尻穴に長
い舌を挿入した。

肉厚の長い舌が、縦横無尽に部長の尻穴
の中で蠢きまわる。傍目からも、その責め
の過激さは分かった。独立した軟体動物の
ように純菜の舌が動くたびに、部長は人間
を辞めて家畜になってしまった。白目をむ
き、痙攣しながら、人間のものとは思えな
い悲鳴を喚き散らしていく部長。

それとは対照的に、純菜はどこまでも笑
顔だった。人のことを優しい気持ちにさせ
るニッコリとした笑顔のまま、純菜は男
のアナルを舐め、突き入れて、前立腺を蹂
躪していく。

「つつぎゃあああッ！」

弓ぞりになった部長が最後に断末魔の悲
鳴をあげて気絶した。

前のめりになって意識を失い、受け身も

とることができないままに顔面からリングに落ちる。下半身は純菜に抱き抱えられたままで、上半身だけリングに倒れ込んだその姿は、まるで女神様に向けて土下座しているみたいに見えた。

「うん。ちん●ん触るまでもなかったですね」

純菜が舌を尻穴からジュポンと抜き去ってから言った。

彼女はそのまま口元をペロりと舐めとって清めると、部長の一物を一瞬だけおっぱいで挟み込んだ。それだけで、部長は電気ショックをくらって悲鳴をあげながら覚醒した。

「部長、これで分かりましたよね。アナルを責められたら男の子はもうダメなんです。

次はそうならないように努力してくださいね。射精はさせませんでしたから、まだ保つはずですよ。二回戦、いきますよっ」

もはや純菜にとって、男子部員を射精させるのも射精させないのもお茶の子さいさいになっていた。彼女がその気になれば責め続けながらも射精一つ許さないことが可能だったし、それとは逆に一瞬で精巢が空っぽになるまで射精させることも可能だった。結局、部長はアナルを極められて10回メスイキ気絶した。

試合終了後、その不甲斐ない様子に純菜は部長のことを叱責し、罰として射精禁止を命じた。泣き喚いて射精させてくださいと懇願する部長に対して、純菜はニッコリと笑って貞操帯をその一物に装着した。

教えたことがうまくできたら、ちゃんと
射精させてあげます。

そうニッコリ笑った純菜は、まるで見せ
つけるようにして、貞操帯の鍵を自分の谷
間の中にしまってしまった。

男の象徴の自由を奪う鍵が、女性の象徴
であるおっぱいの中に保管されてしまうと
いうのはどこまでも象徴的だった。

*

その日の練習も終わった。

夜はすっかりと深まり、もうすぐ22時
だ。学校の光も既に消え去っており、完全
下校時間まであと少しだった。

「おい純菜。もうすぐ時間だぞ」

俺は競技場に残った純菜に声をかけた。

彼女は既に制服に着替え終わっていた。
それでも練習と指導に余念がないところが
彼女のすごいところだ。

「もう夜も遅いし、家まで送っていくよ」

「うん、ごめんね。仕上げするから、もう
少し待って」

ニッコリと笑って純菜が言った。

その天使のような笑顔は相変わらずだっ
たが、ギャップがあまりにもひどかった。
彼女はイスに座っている。それだけならば
おかしくはない。

問題なのは彼女の尻の下で苦しむ男の姿
だった。男の顔を座布団にして騎乗して
いるのだ。しかもそれだけではなかった。
彼女の太ももの間にももう一人の男の顔面

が捕らえられ、その顔面を秘所に押しつけていた。

制服姿の童顔少女が、座布団にしている男にアナルを舐めさせ、太ももで挟み込んでいる男に強制クンニをさせていた。

「じゅるるるッ！」

「ジュパあッ！ ジュジュッ！」

男たちは一心不乱に純菜のアナルと秘所を舐めていった。

唾液音が競技場に響きわたっている。

それを純菜は顔色一つ変えることなく受け止めていた。容赦なく男の顔面を座布団にして巨尻で押し潰し、ムチムチの太ももで男の顔面を締め付けながら、制服姿の厳しい女主人が家畜たちの仕事ぶりを点検している。

「ほら部長、もっと舌を動かしてください。わたしのアナル責めみたいにやればいいんです。あれだけさんざん舐められたのに、動きや強弱くらい覚えられないんですか？」

厳しい言葉。それは態度になって現れ、純菜はグリグリと尻を動かして部長の顔面を潰した。「むううッ」とうめき声が漏れて、岸田部長が許しを乞うようにして舌の動きを強める。それを純菜は顔色一つ変えずにうけとめた。

「そうです。その動きです。やればできるじゃないですか」

純菜が笑顔で部長を誉める。

しかし、次の瞬間には厳しい視線を自分の太ももに向けた。

「藤山副部長は論外です。さっきから何やっ

てるんですか？ ナメクジでも這ってきてるのかと思うほどに不快です」

ぎゅううううッ！

純菜が冷酷に太ももの締め付けを強めた。

副部長の頭蓋骨が軋み、その頸動脈を絞めつける太ももが男の酸素を奪っていく。顔を真っ赤に鬱血させた男がさらに勢いよく舌を秘所に這わせていくのだが、かえってきたのは純菜の「はあ」というため息だけだった。

「ぜんぜんダメです。藤山副部長は次回も射精禁止です」

結論を出した純菜はすぐさま立ち上がった。

仁王立ちとなって、膝まづく先輩二人に命令を下す。

「今日やったことを忘れないでくださいね。明日、また居残り練習をしますから、その時までにはできるように頑張ってください」

わかりましたか？ と念押しをする純菜。

膝まづいたままの部長と副部長は「ひゃい」「ごしふおうありがほうございまひた」と舌つたらげな言葉で返答した。それだけ純菜の指導が苛烈だったのだ。長時間、アナルと秘所をひたすら舐めさせられて、部長たちの舌は言葉一つしゃべることができなくなってしまうていた。

「それでは、戸締まりはお願いしますね」

そう言って純菜が俺のほうへと駆け寄ってくる。

その顔にはさきほどまでの厳しい指導者の表情はなかった。

「ごめんね、健ちゃん。お待たせ」

「いや、いいけどさ。お前大丈夫なのか？」

「ん？ なにが？」

「さっきまでアナル責めとクンニ責め両方受

けてたじゃねえか。足腰大丈夫か？ ちよっ

と休憩したほうがいいんじゃないか」

俺の言葉に対して、純菜は笑いながら、

「ぜんぜん大丈夫だよ。ダメーじなんて一

つも残ってないしね」

「そ、そうなのか」

「うん。二人とも下手くそだからさ。いく

ら舐められたって、平気だよ。もう少し強

くなってくれば、私の耐久練習にもなっ

ていいんだけどね」

ふふっと笑う純菜だった。

そこには絶対的強者の雰囲気があって俺

は息をのんだ。目の前の少女は、たった数ヶ月でバトルファック部を掌握し、先輩たちを指導するまでになった天才バトルファッカーなのだ。

その可愛らしい童顔の顔つきに騙された男たちは、爆乳に刈り取られ家畜となって精液を彼女に捧げることになる。

幼なじみの少女がここまで強くなるのは俺自身も予想外だった。

純菜にはまごうことなき才能があった。バトルファッカーとしての才能。男を家畜にしてしまう才能に彼女はめぐまれていた。「それにしても、いよいよ1週間後だな」

帰宅途中。

俺は電車内で純菜に声をかけた。

座席は一つしか空いてなかったもので、純

菜に座ってもらっていた。立ち上がったまま彼女の方を見下ろすと、胸元からおっぱいの谷間が見えて目に毒だった。周囲の乗客もさきほどから純菜の巨乳をチラチラと覗き見ていた。

「そうだね。総体まであと1週間か。はやくったな〜」

「でも、純菜だったらいいところまでいけるんじゃないか。部活の中ではもう敵なしだろ」

「どうだろうね。対外試合とかもできなかつたから、少し心配なんだよね」

純菜がつぶやいた。

それは純菜の本心だろう。もはや男子部員では純菜の相手にならないのだ。強い相手と戦うことができていることに対して

純菜が不安を感じるのも当然だろう。俺はなんとかしてやりたいと思ひ、これまで抱えていた考えを口にした。

「なあ、だったら俺とやってみないか？」

「え？」

「バトルファック。俺とは練習してないだろ？ だから、どうかなくて」

俺としても今の純菜の実力を軽視するつもりはなかった。

部長や副部長ですら手も足もでなかった相手だ。純菜のことを素人バトルファッカーとして侮る気持ちなどあるはずがなかった。

しかし、俺には勝算があった。

これまで、男子部員たちは全員、純菜の爆乳に気をとられ、彼女の密壺に挿入することもできていなかった。それこそが俺の

勝算だった。中等部の体育の授業。その時も俺が純菜の中に挿入して勝負を決めたのだ。それを再現できれば、俺にも勝機があるのではないか、俺はそう思っていた。

「うーんと、やっぱりちよっと、ね」

純菜が困ったようにつぶやいた。

「やっぱり恥ずかしいかな。健ちゃんやめるのはさ」

「いや、そうだよな。悪い。練習相手になってもらうときも、俺とはやらないって言うってたもんな」

「うーん。それはもういいんだけどね。ごめんね」

「いいって、純菜が謝る必要なんてないよ」
それきり俺たちは黙りこくった。
ガタゴトと電車で揺られながら会話がな

くなる。俺はなんとかして純菜の力になれないかと思いを巡らすのだが、妙案は浮かばなかった。しかし、その懸念はひよんなことから解消されることになった。

八

「え、大学生とですか？」

俺は部長からの言葉を聞いて驚いていた。放課後の競技場。そこで部長から、今日、大学生のOBが胸を貸してくれることになったことを聞かされたのだった。

「うむ。俺が1年のころに部長だった人なんだ。大学でもパトルファックをやっているらしくて、声をかけたら来てくれることになった」

「でも、いきなりどうして」

「純菜くんのためだよ。彼女の相手は、もう俺たちでは務まらないからな」

寂しそうに言う部長だった。

あれだけ毎日純菜に絞りとられているというのに、部長は純菜のことを考えてくれていたのだ。ありがたいと思っているのは俺だけではないようで、傍らで話しを聞いていた純菜が部長に向かって頭を下げた。

「ありがとうございます岸田部長。わたし、がんばります」

純菜に頭を下げられて部長もまんざらでもない様子だった。顔をあげた純菜の目は期待に燃えていた。

＊

その大学生はすぐにやってきた。

ガタイのいい男だ。精悍な顔つきで、俺たち高等部の学生とは違う大人の魅力があった。

「おおっ、変わってないな、ここは」

部長が男のことを東野正吾と紹介してくれた。

人付きのよさそうな人で、どことなく近所の頼れるお兄さんといった感じだ。愛想よく、俺たち全員のあいさつを受け取ってから東野さんもあいさつをした。

「東野正吾だ。大学でバトルファック部に所属している。今日はよろしく頼むな」

そう言って部員を見渡す東野さん。彼は純菜の姿に目をやると余裕たっぷりに笑っ

て言った。

「君が夢野さんか。岸田からは話しを聞いてるよ。強いんだってな」

「いえ、そんなことは」

「ハハッ。謙遜はいいよ。まあ、今日は大学レベルってやつを体験してみるといい。大丈夫。ちゃんと手加減はするから、怖がらなくてもいい」

「ありがとうございます。よろしく願います」

ニッコリと笑って純菜が言った。

さっそく、東野さんと純菜の試合が始まることになった。

リングの上に二人があがる。

向かい合う二人。そこには真剣勝負そのものの張りつめた空気が流れる。さすがな

のは東野さんだった。競技水着からこぼれる純菜の爆乳を前にしても顔色一つ変えない。さすがは大学でもバトルファックを続けているだけがあった。

試合開始を告げるブザーが鳴った。

最初に動いたのは東野さんだった。

早い。あっという間に純菜の背後をとり、純菜の下腹部を抱き抱えて、そのままリングに押し倒した。純菜がうつ伏せに倒れて、「キャッ」という声をあげた。

「おいおい、すごいな」

「ああ、もしかしたら、」

男子部員たちが期待のまなざしを向ける。もしかしたら。

もしかしたら、純菜がいく瞬間が見れるかもしれない。

「いいか、胸の大きな女性相手に正面から責めてはダメだ」

東野さんが純菜の体の上で座りながら、こちらに視線を向けて言った。

「こうやって背後から責める。できればリングに押さえつけて、胸を使えないようにするのが一番だ。どんな大きな胸だって、リングの床に接してしまえば何もできないからな」

わかったか。

そう言ってほほえむ東野さん。

彼はレクチャーをしてきていた。純菜との戦いを前にしてあまりにも余裕だった。これが大人の貫禄というものなのだろうか。男子部員たちが期待に目を輝かせる。

しかし、東野さんの善戦はここまでだっ

た。

「この状態で、責めていくんだ。いいか、見てろ」

そこで東野さんは押し倒して初めて、純菜の体を見下ろした。

しかし、そんなこととしてはダメだったのだ。純菜を前にしたら、目をつむって戦うしかない。そんなの無理だと思うけど、それしか方法はなかった。

「うッ」

純菜に視線をやった瞬間、東野さんが叫び出した。彼は見てしまったのだ。リングの床で潰れ、体の胴体からはみだすほどに変形した純菜の爆乳を。背中ごしなのに、その大きな肉の塊は自己主張をやめていなかった。まさにこぼれてしまっている横乳の豊

かさに、東野さんの一物がピンとフル勃起した。

「隙あります」

その押さえつけの緩みを見逃さず、純菜が体を反転させた。

うつ伏せから仰向けに。東野さんに向かい合うようにして向きを変えた純菜が、その爆乳を両手で挟み込んで、ぐんにやりと歪曲させた。

「あ、あああッ」

呆然自失。

そんな言葉がぴったりのように、東野さんの目が爆乳を凝視したまま動かなくなってしまう。その隙を見逃す純菜ではない。彼女の手の間の間にか東野さんの後頭部へとまわされていた。そのまま純菜が東野

さんの頭部を抱きかかえ、食虫植物が獲物を取り込むようにして、爆乳で男の顔面を飲み込んだ。

むにゆうううッ！

そんな音が聞こえてきそうなほど、東野さんの顔面が純菜の爆乳に潰されてしまった。そのまま息を吸ってしまった男は、純菜のフェロモンに溺れ、勝負はついてしまった。

「終わりですか？」

純菜が仰向けに横たわりながら言った。

「なんだか他愛がないというか、手応えがないですね。あんなに偉そうに講釈をたれていたのに、おっぱい見せつけたら即敗北。情けないと思わないんですか？」

ぎゅうぎゅうっと、男の顔面を爆乳に押

しつけて潰しながら、笑顔の純菜が言う。

「これなら、部長さんのほうが強いですよ」

「むっふうううッ！ やめふええええッ！」

「ねえ東野さん、あなた、バトルファック部に所属しているって言ってましたけど、あれ嘘なんじゃないですか？」

純菜の問いかけに東野さんが暴れた。

それを許さない純菜が、さらに東野さんの顔を自分の谷間の奥へと誘った。フェロモンの濃度が高くなり、それだけで男の体がビクンとふるえた。

「ねえ、どうなんですか？」

「そうふえす。じぶんが所属してるのふぁ

同好会へす」

東野さんが頭を溶かされて純菜の言いなりになってしまう。

四つん這いになって純菜の爆乳の中に顔を埋もれさせて、ぎゅうっと抱きしめられて拘束されている東野さん。それはまるで純菜の爆乳に直接土下座しているみたいだった。

「そうですね。体育会のバトルファック部だったら、もっと強いはずですよん。東野さんは同好会で、強さも求めず女の子と乳くりあってるだけなんですよね」

「……………」

「返事」

ぎゅうううッ！

さらに締め付けが強化され、男の顔面が完全に埋もれた。

「ひゃあああッ！ そうです、そのとおりです」

「そうですか。始まる前から変だとは思ってたんです。だって、東野さんの下半身から、精液の匂いがしていたんですもん。始まる前にオナニーしてきたんですよね？」

「高等部の後輩に負けたら面目丸潰れだから、オナニーして備えてきたんでしょ？」

「……………」

「返事」

ぎゅうううッ！

「ひゃあああ、そのとおりですううッ」

もはや年上の尊厳なんて何もなかった。

純菜の爆乳の前にすれば、男たちは皆、敗北するしかないのだ。リング下の男子部員たちは絶望で顔を真っ青にしていた。

「それでは、終わりにしましょう」

あっけなく言って純菜が動いた。

あつという間に膝上パイザリの体勢となる。女の子座りの純菜の膝上に、東野さんの臀部がのっかり、その一物を彼女の前に捧げてしまった。

「わたし、ほかの部員にはいつも手加減してるんです」

純菜がニッコリと笑いながら言った。

「わたしが本気を出したら、みんなすぐ壊れてしまいますから。だから手加減してるんですけど、東野さんには必要ないですよね」

ふふっと、天使のようなサキュバスが妖艶に笑う。

「本気パイザリで男の人がどうなるか、試させてください」

やめて。

その言葉は悲鳴によってかき消された。

「ヒッギイイイイッ！」

純菜が笑顔のまま、ぎゅううっと乳圧をあげた。

それは今までほかの男子部員たちに施されていた乳圧をはるかに越えるものだった。その爆乳がギリギリと変形し、柔らかそうな肉が、その谷間に入った哀れな獲物を潰しにかかっている。

逆レイプが始まった。

縦横無尽に、純菜の爆乳が男の一物をすり潰し、溶かし尽くした。

すぐに男は射精した。白目をむきながら、絶叫をあげ、ビクンビクンと体を痙攣させる。それでも純菜のレイプは終わらず、荒々

しくおっぱいを男の腰めがけて打ち付けていく。「ひゃああ」というあられもない悲鳴をあげているのは大学生の男だ。それに対して、その悲鳴を与えているのは童顔のJKだった。その体格差だけ見れば大人と子供の戦い。しかし、圧倒しているのは子供のほうだった。男が断末魔の悲鳴をあげていく。

「あ……どうしようかな」

純菜がつぶやいた。

彼女は、少しだけレイプの動きを弱めて、男の状態を観察している。どうしたのだろうかと思うのもつかの間、純菜はふっきれた顔になって言った。

「うん。まあ、いっか」

そのまま、彼女がさらに乳圧を強めた。

もはやそこに挟まれた一物がミンチに変わってしまうのではないかと思うほどの乳圧。その状態のままおっぱいを打ち付けられて、男は涙を流しながら命乞いを始める。「ゆるしてええ！ お願いですううッ！

俺の負けでいいからッ！」

男の懇願がうるさかったのか、純菜がさらにパイズリを早くして黙らせた。

もはや人間の言葉を発することもできなくなってしまう男は、そのまま最後に勢いよく射精して、動かなくなった。

「はい、あつという間に空っぽです。ふふっ、年下JKに失神KOされちゃいましたね」

純菜は笑って、おっぱいを開いた。

純菜は負け犬の精液をその顔面に塗りたくっていく。白い液体で顔面を覆われた男

を見下ろして、純菜がくすりと笑った。

「それじゃあ、確かめてあげますね」

彼女は立ち上がる時、そのまま東野さんの体を肩に乗せてかつぎあげてしまった。

男の巨体を純菜のような少女がかついでいる様子はどこか現実離れしているように見えた。しかし、純菜は息を荒くすることもなく、笑顔で東野さんを持ち上げ、そのまま俺たちのほうに歩いてきた。

「見てください。東野さんのちん●ん、こんなに縮こまってしまいました」

見せつけるように、純菜が乱暴に一物を握りしめて、俺たちのほうへと掲げた。そこには、純菜の小さな手ですらおさまってしまうほどに縮こまった東野さんの男根があった。

「見ててください」

純菜が笑顔で一物をしごき始める。

その動きは熟練したバトルファッカーのものであった。その手にさんざん絞りとりられてきた男子部員たちは、前かがみになり、恐怖にふるえた。精巢が空っぽになろうが関係なく、その手にしごかれればすぐにフル勃起。激痛を感じながらも立ち上がって、純菜にさらなる責め苦を味あわされることになる。しかし、いつまでたっても東野さんの一物は縮こまったままだった。純菜の手技にビクンビクンと痙攣を強めているのに、その男根だけが微塵も反応しなかった。

「あ、やっぱり壊れてますね、これ」

純菜が言った。

「途中で手応えがあったんですよね。ち●

ぽの芯が壊れちゃったような、もう元に戻らなくなってしまうような感触があったんです」

笑っている。

純菜がサキュバスのように笑っている。

「まずいかなとも思っただんですが、東野さんは部員でもないですし、プロを目指してがんばってるわけでもないから、まあいいかなって思って、そのまま本気パイズリを続けたんです。そうしたら、やっぱり壊れてしまったようですね」

人差し指でピンと一物をはじく純菜。童女がビー玉で遊ぶみたいにして、可愛らしい爆乳少女が壊した一物で遊び始める。

「もう東野さんは一生勃起できません。あの感触からすると、もう射精もできないか

もしれませんね。精巣が限界を迎えて焼けるようになってしまったから。だから、このぶらさがってるのは、もうおしっこするしか能がない役立たずというわけです。まあ、わたしが壊してしまっただんですけどね」

くすりと笑って、純菜がリング下の男子部員たちを見下ろした。

「先輩たちも、私の指導についてこれなかったら同じ目にあうことになるかもしれないまんよ」

「う、あああッ！」

「もうコツは分かりましたから。ち●ぽ壊れるまでパイズリするなんて朝飯前です。次はもっと効率的に壊せると思いますし」
ふふっと笑って、純菜が東野さんの体をリング下に放り投げた。

巨体が宙を舞って、ドサリと地面に落ちる。ビクンビクンと痙攣したままの大学生の男。年下JKに失神敗北したあげく、自分の男性の象徴を粉々に壊されてしまった哀れな男の姿がそこにはあった。

「それでは、今日の練習をしましょう」

純菜が笑って言った。

「総体まで1週間を切ったことですし、がんばりましょうね、みなさん」

男子部員たちは恐怖に震え、リング上に君臨する女神に服従を誓うしかなかった。

彼女に逆えばどうなるか分からない。目の前の大学生のように壊されてしまうかもしれない。それがあまりにも恐ろしく、男子部員たちはビクビク震えながら純菜に従って練習という名の搾精に付き合わなければ

ならなかった。

その日も、夜遅くまで、競技場には男子
部員たちの悲鳴がこだましていた。

第2章 地区予選大会

一

総体の開会式当日はあつという間に訪れた。

季節は夏。灼熱の太陽が身も心も溶かして、青春の戦いを繰り広げる熱い日々を迎えることになった。

バトルファックの開会式は第3武道館で行われることになっていた。都内のすべてのバトルファック部員が勢ぞろいし、2週間の間、戦いが繰り広げられる。最終的に、勝率1位の男子バトルファッカーと女子バトルファッカーがここ第3武道館で雌雄を決する戦いを行い、優勝者だけが全国大会

に出場することになっていた。

ここで好成績をあげたものがプロの道に進むことも珍しくなく、マスコミによる盛り上げも半端がない。特に東京都の地方大会はレベルが高く、優勝候補や有名校の選手たちには特集も組まれて、優先的にテレビ放映されていた。

「すごい人だね」

純菜が驚いたように言った。

第3武道館の会場には各校のバトルファッカーたちが勢ぞろいしていた。中央のリングをぐるりと囲んだ観客席。そこに俺たちは座っていた。学校ごとに座る位置が決まっていて、先頭にはそれぞれの学校の看板が設置されていた。

「これ、みんなバトルファックやる人なん

だよね」

隣に座る純菜がなおも驚きながら言った。

彼女はこれが初めての総体だから無理もなかった。俺も去年、はじめて開会式に参加し、その迫力に圧倒されたのを覚えている。

「そうだけ。この中の1位しか全国に行けないんだからな。なんていうか、気の遠くなる話だよ」

「ええと。確か、男女7人づつのグループにわかれて総当たり戦で戦って、勝率を競いあうんだよね」

「そうだ。勝率が同率だったらKO数の多さ。KO数も同じだったら、KOまでの時間の短さで、最終的に男と女の1位を決める」

「それで最終決戦だもんね。全部で8試合か。それを2週間のうちでやるんだから、大変だね」

圧倒されている純菜だった。

開会式に出席すると、周りの人間がみんな強そうに見えるから不思議だ。どことなく、隣の高校の女子がとても魅力的に見える。こんなアイドルみたいな奴に勝てるわけじゃないじゃないかと不安な気持ちになる。そんな中でも輪にかけて整った容姿の奴らが勢ぞろいしている学校が近くにあった。

「純菜、あそこ見てみろよ」

「え、どこ？」

「俺たちから右斜めむこう。ほら、あのやたら派手な制服のところ」

俺が指さした先には青色の制服を来た集

団がいた。

どこことなく露出が高い制服に身を包んだ彼らは、バトルファック界での有名校だった。バトルファックの腕に覚えのある学生たちが全国から集まる学校。プロ養成コースもあるバトルファックの専門校だった。

「BL学園だ。今年もあそこが優勝候補だよ。人数制限の10名に絞るだけでも、学園内で熾烈な戦いが繰り広げられるらしいぜ」

「ふあー。見るからに強そうだねー」

「ああ。ほら、一番前に立っているのが去年優勝した榎本先輩だ。全国でもベスト4に入ってたしな。今年も文句なしの優勝候補だよ」

そのほかにも強そうな奴らばかりだった。

男だけではなく、女子生徒もレベルが違っていた。

一般生徒の中に芸能人がまぎれこんでしまっているような印象。しかも、芸能人たちはグラビアアイドル顔負けのスタイルの良さで、遠目でもその大きな胸が自己主張しているのが分かった。

「あ、ねえ、アレ、西園寺選手じゃない？」
俺がBL学園の選手に見とれてしていると、俺の袖をひっぱって純菜が指さした。

リング脇のVIP席。解説者の席の隣に、純菜の言うとおり俺の憧れのプロバトルファッカー西園寺拓也選手が笑顔で手を振っていた。ざわざわとした気配が広がり、周りも彼の存在に気づき始めているようだった。

「ほ、本当だ。西園寺選手だ」

「ゲストなのかな。あの人」

「そうかもな。BL学園出身だし。あと、今年の全国大会はこのまま都内で開催されることになってるから、特別ゲストってことで、地方大会から盛り上げようとしてるんだろう」

「それにしてもあの人のまわりだけ、テレビのカメラがすごいね」

「そりゃあ、プロバトルファッカーの中でも生きる伝説だからな。すげえ、あの人に試合見てもらえるかもしれないのか。うわっ、サイン欲しい」

取り乱した俺に、純菜が呆れて言った。

「ほんとう、あの人のこと大好きだよね、健康ちゃんは」

「そりゃあそうさ。俺の憧れだもの。とうか、お前だってあの人のDVD今も見るんだろう？」

「まあ、そりゃあ、研究対象としてはすごくタメになるけど」

どうでもよさそうに純菜は言った。

女性バトルファッカーにも熱烈なファンがいて、その甘いマスクに黄色い歓声をあげる女性も多い。今年も10年連続で「犯されたいバトルファッカー部門」で1位になった西園寺選手だというのに、純菜はそこまで興味がないようだった。

「あ、そろそろ始まるみたいだよ」

純菜の言葉どおり、照明が少しづつ暗くなっていった。

隣の純菜さえ見えなくなるほどの暗闇。そ

れがいきなりリングの上だけ照明がともったかと思うと、燕尾服を着た司会役の男性がリングに登場していた。恰幅のいい男が、よく通るダミ声で、会場中にむかって叫んだ。

「これより、第100回バトルファック競技会地方大会を開催しますッ！」

まるでプロレスの司会のような物言いに、周囲からは爆発的な歓声があがった。イベントのボルテージはいつきに高まる。その音量に隣の純菜は目を白黒させていて、可愛かった。

「それでは、今回のスペシャルゲスト、西園寺拓也選手から一言いただきましょう」
スピーディーに開会式は進行していき、西園寺選手が呼ばれた。彼は甘いマスクに

爽やかな笑顔を浮かべて、颯爽とリングの上にあがった。

さすがはプロバトルファッカーといった軽快さで登場した西園寺選手にむかって、どこからともなく「拓也ー」と声があがる。そちらにむかって慣れた手つきで手を振って笑顔をむけた後で、彼はマイクを手にした。

「まず、この大会が今回も無事に開催されたことに、感謝したいと思います。バトルファック協会の方々の努力なくしては、ここまで盛大な大会を開くことはできません。みなさん、暖かい拍手を」

イケメンの甘い声に誘われて、会場から万雷の拍手がバトルファック協会の実行委員に向けられた。予期せぬサプライズに実

行委員の中には涙ぐんでいる人もいた。その女性は絶頂でもしてらんじやないかと思うほどに恍惚とした表情で西園寺選手を見つめている。

「みなさんの中にはプロのバトルファッカーを目指している人もいます。私もそうでした。しかし、忘れて欲しくないのは、今、この瞬間でしか味わえないものがあるということ。学生時代のバトルファックは記憶に刻まれ、その後の人生すら左右することもあります。みなさんにはどうか、正々堂々、スポーツマンシップに恥じないバトルファックを期待します」

爽やかな笑顔と共にしめくくる西園寺選手だった。まさしく人格者。俺も胸が熱くなった。

「それでは、グループの抽選を行いたいと思います。モニターをご覧ください。なお、抽選結果は、事前登録いただいているアドレスに送信させていただきますので、詳しくはそちらをご覧ください」

会場に備え付けられている大型モニターに視線をやる。試合が始まればそこにも映像が流れ、リプレイ映像が映し出されるものだった。

そこに全出場選手のグループリング結果が発表される。コンピュータが無作為に選出する14名の組み合わせ。それが一瞬のうちに関わられ、発表されることになっていく。

「それでは、今年度のバトルファックの組み合わせ結果を発表しましょう」

同時にモニターに結果が発表された。

自分たちの席からはモニターが遠く見えない。だから手元のスマホに目をやった。メールが受信されており、それを開くと抽選結果が表示されていた。男7名はどうでもよかった。大事なのは対戦相手となる女7名だ。名前と学年と所属高校。それに目をやった。

「げっ、一人BL学園のやつがいる。でも1年か。それ以外は特に問題ないかな」

俺の対戦相手をひとしきり眺める。

周囲もその結果に喜んだり絶望したりしていた。その中でも、「もう嫌だ」と涙を流しそうになっている女性がいて、そいつをなぐさめている集団があることに気づいた。周囲でもモニターを見てザワザワしている。

「おかしいでしょ、これ。どういうことよ」
「14組のあれ、女かわいそうすぎるだろう。あれじゃあ一勝もできないんじゃないか？」

「死のグループだわ、あれマジでヤバイ」

ざわめきが遠くからも聞こえてくる。俺は目をこらしてモニターを見てみた。その男性陣の顔ぶれを見て、俺も驚きの声をあげた。

「BL学園が7人って……おいおい、どんな偶然なんだよ、あれ」

14組の顔ぶれは驚嘆の一言だった。

14組の男性陣7名は、全員BL学園のバトルファッカーたちだった。しかも、優勝候補筆頭の榎本選手も入っていた。

「14組の女性陣はかわいそうだな。それ

で純菜、お前の対戦相手はどうだった？」

隣に振り向く。

そこには驚いた表情を浮かべた純菜がいた。彼女はこちらにスマホの画面を見せながら言った。

「わたしも14組になっちゃったみたい」

＊

開会式は終わって、その日はすぐに解散となった。

日曜日。都内まで出てきたこともあって、すぐに帰宅することはせずに遊びに出る選手たちも多い。しかし、俺と純菜は第3武道館内にある喫茶店の中で作戦会議をしていた。

「しかし、純菜が14組になっちゃうとはな」

俺はつぶやいた。

まさかの展開だった。出場選手1000人を越える最大級の地方大会にあって、まさか死のグループ7名の中に純菜が入ってしまうとは。

「まあでも決まったことは仕方ないよ。最善を尽くすしかないよね」

純菜はそう言ってニッコリと笑った。

そこに絶望やあきらめといったものはない。しかし、それは彼女がBL学園の実力を知らないからだろう。いくらうちの学校のバトルファック部で敵なしだからといって、それは井の中のカエルにすぎない。下手な自信を持ったままBL学園の選

手と戦ったら、再起不能になるほどイキ狂わされてしまうだろう。

「あつたぞ。ほら、去年の榎本選手の動画」

俺はバトルファッカー御用達の有料動画サイトから目当ての動画をダウンロードし、純菜に見せた。

「すごい。こんなのあるんだね」

「まあ、有名選手のものじゃないけどな。この動画は去年の総体の試合をまとめたものだよ。榎本選手が優勝したときの大会だな」

動画内では榎本選手と相手女子選手がリングで向かい合っていた。

榎本選手は長身で陰の似合う寡黙な選手として知られていた。無駄口や笑顔を見せず、ストイックに相手に快感を与え続けるその姿から、BL学園の冷酷悪魔の二つ

名で呼ばれている。

「ほら、この試合も一方的だったんだ。見ろよ」

動画内では榎本選手が女子選手の唇を奪い、めちゃくちゃに犯していた。

はやくも目をトロンとさせた女子選手の秘所を手早く責めて、ぐったりしたところで挿入。なかなか諦めない女子選手はさんざんに犯され、泣き叫びながら白目をむいて、最後には潮をふいてビクンビクン痙攣しながら気絶してしまった。

「な、すさまじいだろ。言っておくけど、相手選手も弱いわけじゃないぜ。栄光女学院の3年生で主将をつとめてた人だよ。確かプロバトルファッカーテストにも合格してたのに、この試合の後遺症が残ってそのま

ま引退しちまった。なんでも、榎本選手みたいな長身の男性を前にしただけで体が震えるようになったっていうんだからな。すごすぎだよ」

俺がひとしきり解説する。

その言葉を聞いているのかどうか、純菜は俺のスマフォを食い入るように見つめるだけだった。真剣そうな表情で、なにやらブツブツつぶやいている。

「おい純菜、聞いているのか」

「あ、ごめんごめん。ちょっと集中しちゃった」

スマフォから視線を戻し、バツが悪そうに純菜が笑った。

「そんな化け物含めてBL学園7名が相手なんだ。とにかく、無理だけはするんじゃない」

ねえぞ」

「無理って？」

「だから、ギブアップは早めにしろってことだよ。いくらお前が強かったって、相手はバトルファックの専門コースで鍛えてる奴らなんだ。専門のコーチが何人もいて、最先端の機械をつかって鍛えてる。だから、無理だと思ったらすぐギブアップするんだ。お前はまだ1年目で、来年だってあるんだからな」

「うん。大丈夫だよ。心配してくれてありがとうね、健ちゃん」

「お前なあ……」

本当に分かっているのかどうか。切迫感が伝わってこない純菜だった。

彼女はそのまま食い入るようにして動画

に見入った。真面目で研究熱心なのは相変わらずらしい。その向上心は尊重しないとイケないだろう。俺はあとで動画をDVDに焼いて純菜に渡してやろうと、そう思った。その矢先、聞きたくない男の声が背後からした。

「ブハハッ。おいおい、こんなところで対策練るとか、焦りすぎだろうがよッ」

そちらを振り向きたくはなかったがそうは言われてられない。振り返ると、そこにはBL学園の制服に身を包んだ黒宮が立っていた。

「黒宮……なんの用だ？」

「なあに。お前のところの選手が14組に入ったって聞いたからお祝いしてやろうと思ってる。そいつがその運のいい女か？」

黒宮がじろじろと純菜をいやらしい目つきで見渡した。

純菜が怯えないかと心配になったのだが、彼女はジッと黒宮を見つめて黙ったままだった。

「俺はあいにくと37組でお。その可愛らしいお嬢さんをめったくそ犯してやることができないんだが、まあ、うちの先輩方も俺の次には強いから、期待しとけよ」

「お前もメンバーに選ばれたのか」

「当然だろうが。言っておくが、BL学園の校内選考では、榎本のバカより俺のほうが勝率高かったんだからな？ エースってやつだよ」

信じられなかった。

こいつ、いつの間になんかに強くなっ

たんだ。

「まあ、弱小校は弱小校らしくせいぜいがんばることだな。応援してるよ」

「ブハハッと笑いながら黒宮が去っていった。」

「黙ったままだった純菜がようやく口を開いた。」

「黒宮くん、変わらないみたいだね」

「知ってるのか？」

「中等部のとき、一度だけクラスが一緒だったんだ。地味な私のことは認識すらしてなかったんじゃないかな。あの人、中等部から自信家だったし」

「まあ、そうだろうな」

「中等部の真面目で地味な純菜と、今のあか抜けた純菜では、もはや別人物といって

もよかった。黒宮が気づかなくても当然なのかもしれない。

「とにかく、ほかのBL学園の選手の動画も探してあとで渡すから。それで傾向と対策をかんがえよう」

「俺は言った。」

「セコンド役には俺がつくよ。限界と思ったらすぐにタオル投げてやるから、心配するな」

「俺の言葉に純菜は困ったような笑顔を浮かべた。」

「やはり内心では緊張して戸惑っているのだろう。俺はそんな純菜の力になりたいと強く思った。」

試合当日まで純菜の練習は続いた。

動画を研究し、傾向と対策に基づいて技の練習に余念がない。そのせいで、バトルファック部の男子部員たちはさらなる地獄を見ることになったのだが、部員は全員、純菜の練習相手に積極的になってくれた。

試合当日も男子部員たちの精子を搾り取った純菜は満面の笑みでお礼を言った。ご褒美として貞操帯の鍵を全員にプレゼントして、男たちはつかの間の自由を得ることになった。

そして、本番を迎えた。

*

場所は千代田区の体育館だった。

そのリング近くにはマスコミ関係者の姿があふれかえていた。カメラが何台も持ち込まれ、さながらプロの試合のような様相を呈している。

それも無理もないことだった。純菜の初戦の相手はあの榎本選手だったのだ。プロ注目の優勝候補がいきなりの初戦とは純菜はどこまでもついていかなかった。俺はリング脇のセコンド席で純菜にむかって最後の言葉をかける。

「いいか。無理だけはするなよ、純菜」

「うん。分かってるよ」

「じゃあ、もうそろそろ上着を脱ぐか」

「はい」

純菜が着ていた大きめのパーカーを脱い

だ。

あらわになる純菜の爆乳。最初のころよりも明らかに大きくなっていて二つの果実が、純白の競技水着からこぼれるほどになっている。肌のツヤも増しており、こうして近くにいるだけでなんだか頭がぼんやりとしてくるいい香りがした。

成長しているのだ。男たちの精を浴びて、この爆乳は今もなお成長しているのだった。

「それじゃあ、いつてくるね」

「あ、ああ」

純菜がニッコリと笑ってから、ロープをくぐってリングの上に立った。

その正面には、長身の榎本選手が無表情のポーカーフェイスで待ちかまえている。純菜の爆乳を前にしても榎本選手は表情

一つ変えなかった。規格外の大きさのおっぱいにザワザワしている競技場内であって、対戦相手の榎本選手だけが平常心だ。

長身の男と小さな少女。

純菜は見上げる形でしか榎本選手の顔を見ることができない。純菜の童顔とあいまって、まるで大人と小学生の戦いのように見えた。

「それでは15分ハーフ。2セット。3ノックダウンKO方式で開始する。いいね？」

審判員が二人に声をかける。

無表情の榎本選手と、ニッコリ笑顔の純菜はどこまでも対照的だった。二人が握手をして、離れる。審判員の合図と共に、ブザーが鳴り、時計が動いた。

＊

俺との話し合いでは、時間を稼ぐことになつていた。

あの榎本選手を相手に30分間を戦い抜くことは不可能。勝機があるとすれば、徹底的に勝負を避け、最後の5分間でパイズリを炸裂させて逆転を狙う。それしかない。と俺は純菜にアドバイスしていた。

それなのに、最初に動いたのは純菜だった。

彼女は勢いよく突進し、榎本選手に抱きついた。

「あのバカ」

そんな戦法が天下のBL学園部長に通用するわけがない。すぐに反撃を食らい、返

り討ちにあうことになる。俺は白旗を告げるタオルをグッと握りしめた。

今にも榎本選手の冷酷悪魔が純菜を餌食にしてしまう。しかし、そんな会場中の予想は誰かの呻き声によって消え去った。

むにゅうううッ！

「うあッ」

純菜の爆乳が、ちょうど榎本の股間に炸裂し、ぐんにやり歪むほどに押しつけられている。苦悶の表情を浮かべた男が純菜を引きはがそうとするのだが、その瞬間、純菜がグリグリと爆乳を押しつけた。それだけで男の呻き声は増し、動きが止まってしまう。

「どうしたんですか、榎本さん」

純菜がニッコリと笑っている。

その笑顔の端には榎本のことをからかうような感情が含まれていた。身長差から、純菜は榎本に抱きつきながらも上目遣いで彼を見上げることしかできない。その体勢は明らかに純菜にとって不利なはずなのに、明らかに純菜の方が試合を有利に進めていた。

「膝、笑ってますよ？」

「く」

「もっと押しつけてあげますね」

純菜が笑って言った。

暴力的なまでにおっぱいが榎本の股間を直撃し、その膝が落ちた。膝カクンをさされたように榎本の体勢が崩れ、両膝をリングについてしてしまう。

あれだけの身長差があったのに、今では

純菜と榎本の顔は同じ高さになった。

「ふふっ、いただきます」

じゅるるるッ！

「むふううッ！」

ディープキス。純菜の長い舌が榎本の口内に入し、襲いかかった。

しかし、キス勝負は榎本の専売特許だ。数々の強敵を榎本はディープキスで沈めてきた。真剣な表情を浮かべた榎本が、闘志をむき出して舌を絡ませた。

「あひいんッ！」

あえぎ声が響く。

それは男の声だった。榎本の舌の動きに「くすり」と笑った純菜が、いやらしい唾液音をたててその舌を啜り、自分の口内に閉じこめてしまった。あとは一方的な展開だ。

まるであめ玉でも舐めるようにして榎本の舌をなぶり尽くしていく。次第に榎本の体から力が抜けていった。

「はい、トドメです」

頃合いを見計らって、純菜が榎本の顔面を抱き抱えた。

爆乳の中にとじこめられ、その極上フォロモンをかがされた榎本がビクンビクンと震える。

「堪能させてあげたいのは山々ですが、K Oまでの時間も重要なので、手早くすませますね」

そう言っ、純菜が必殺の体勢に入った。膝上パイズリ。

榎本の弛緩しきった顔を爆乳から引きずり出すと、熟練した手つきでその体勢を

完成させてしまう。いやいやをして顔を振る男。そんな男をニッコリと笑顔で見下ろすと、純菜は男の一物をおっぱいで挟み込んだ。

「ひゃあああんンッ！」

今まで聞いたことのない悲鳴が試合会場に轟いた。

B L学園側のセコンドも呆然としてその光景を見つめるしかない様子だった。

最強の男が。去年の優勝者が。今年の優勝候補でもある冷酷悪魔が。

まだバトルファックを始めて3ヶ月の少女に手も足も出ずに犯されていく。

「本気パイズリでいっきに決めます！」

元氣よく言っ、純菜が動いた。最初から全力。左右から爆乳をぐいっと

挟みこみ、乳圧を手加減抜きで最大級にする。それと同時に、その重量を体全体をつかって持ち上げ、そのまま男の腰めがけて打ち付けた。

パンッッ！

大きな肉の殴打音が響き、それが連続した。小柄な童顔少女が長身の優勝候補者を犯していく。荒々しい動きでもってパイズリを続ける純菜。彼女は笑顔だった。笑顔のまま男を犯した。

「ひっぎいいいッ！」

榎本は白目をむいた。

もはや悲鳴は人間のものではなくなっていた。体をビクンビクンと痙攣させている。純菜がおっぱいを打ち付けるたびに、全身がリングでバウンドするように暴れる。

めちゃくちゃにされている。ぼろ雑巾にされて、蹂躪されている。

それが傍目から見ても分かるほど、榎本は急速に壊れていった。

そして、

「ん。一回目ですね」

純菜がつぶやいた。

俺たち富士見ヶ丘バトルファック部の部員以外で、その言葉の意味を理解できる人間は皆無だったろう。

射精したのだ。あっという間に射精してしまった。しかし、敗北の白い液体はすべて純菜の谷間の中に注ぎ込まれて、その射精に気づけるものはいなかった。しかも、射精中は連続攻撃が許されている。もはや純菜を止めるものはおらず、彼女の公開逆

レイプはなおも続いた。

「ヒツギイイッ！　だ、だめッギャアアア！」

男が暴れ回っている。

ばんばんという肉の殴打音と男の悲鳴。

白目をむきながら悶絶する男とニッコリ笑顔の純菜。

リング外はシーンと静まりかえり、その逆レイプを呆然と見つめるしかなかった。

「はい。4回目。もう限界ですかね」

純菜が笑って言った。

榎本は喋ることもできずに悲鳴をあげるだけ。そこまできて、ようやくBL学園のセコンドが気づいた。はやくしないと手遅れになる。慌てたセコンドが白いタオルを探すがそんなものの準備はしていないよう

だった。焦ったセコンドは慌てて自分の競技パンツを脱いだ。その純白のパンツをリングにむかって放り投げる。

パンツが宙に舞った。

それが地面についた段階で試合は終了となる。その瞬間、純菜の瞳がキラリと光った。

「壊れろ」

ぎゅううううッ！

「ひっぎいいいいッ！」

これまで以上に乳圧を強め、最後の絞りとりを行った純菜。

たまらず榎本は悲鳴をあげ、そのまま失神した。

「ブレイクッ！　ブレイクッ！」

審判員がようやく純菜と榎本の間を割っ

てはいる。

遅れてセコンドが投げた競技パンツが地面ではなく榎本の顔面に落ちた。くすりと笑った純菜が、まるで見せつけるようにして谷間を開く。そこから大量の液体が零れおちてきて、それでようやく、観客たちは何がおこったのかを悟った。

その爆乳を両手でつかみながら戦利品である男の精液をこねくりまわす純菜の姿。計算され尽くしたその動きはBL学園のほかの面々の脳味噌をジャックし、ついでに、全国のパトルファックファンの気持ちもがちりとつかんだ。

「勝負続行不能！ TKO！ 勝者、夢野純菜っ！」

審判員が純菜の手をつかんで大きくあげ

た。

ニッコリと笑顔を浮かべた純菜が、高々と腕をあげ、周囲の観客に手を振る。

その足下では、いまだに白目をむきながら痙攣し、時折、どびゅどびゅと力なく射精し続ける榎本がいた。試合開始から5分も経過していなかった。

三

俺たちは学校近くのファミリーレストランに集まっていた。

都内の試合会場で試合を終えた男子部員たちも一緒だった。その目的はただ一つ、純菜の初戦勝利を祝うためだ。

「それでは、純菜くんの勝利を祝って、乾

杯」

部長の音頭にあわせて、ドリンクバーの
コップを盛大にあわせて乾杯する俺たち。

主役はもちろん純菜で、男子部員全員が
純菜のことを祝福していた。

「しかし、純菜くんの勝利には驚かされた。
まさか、あの優勝候補の榎本に勝利してし
まうなんてね」

「しかも圧勝だもんなあ。BL学園の奴ら、
真っ青になって信じられないって顔してた
ぜ」

「あ、ちょうど動画がアップされたみたい
ですよ」

試合会場にいなかった部員たちがすかさ
ず自分のスマホをチェックする。

映し出されたのはフィニッシュを決め、

榎本を気絶させた後で、彼の吐き出した精

液を見せつけているシーンだった。テレビ
もその試合を特報級に扱っていて、突如と
して現れた女神の誕生を祝福していた。

「ありがとうございます。これも、みんな
が協力してくれたおかげです」

純菜が真面目に言った。

ニッコリと笑った彼女は見る者を優しい
気持ちにさせる表情を浮かべていた。この
真面目で控えめな少女が、動画内で優勝候
補のバトルファッカーを再起不能に陥れた
あの淫らなサキュバスと同一人物だとは信
じられないほどだ。

「あ、やっぱり榎本選手、ダメみたいッス
ね」

佐藤がバトルファッカーニュースの掲示

板を見て言った。

俺も掲示板を見てみると「病院送りになった榎本選手が残りの試合を全て棄権することになった」と速報で報じられていた。

「まあ、夢野さんのパイズリきまったらあ
あなっちゃうのも無理ないよな」

「そうそう。むしろよく死ななかつたよ」
「いつもさんさん絞りとられてる僕たちだっ
て慣れることないんだからな。初見で対処
しろって言うほうが無理だよ。でも、優勝
候補がちょっと情けないよね」

男子部員たちが口々に純菜を誉める。

藤山副部長を筆頭に、男子部員たちはま
るで我がことのように喜び、純菜のことを
誇っていた。純菜はそんな様子を嬉しそう
に見つめていた。しかし、彼女はそんな中

でも度を越して浮かれている男に厳しい視
線に向けた。

「藤山副部長」

純菜の冷たい声に副部長が石になって硬
直する。

優しそうな線の細そうな先輩は見るから
に緊張して、「な、なんでしょうか純菜さん」
と敬語で返事をした。

「あなた、自分の立場が分かっていますか？」
シーンと静まりかえった部員たちの中で、
指導者としての純菜が厳しい眼を副部長に
向ける。

「あなた、今日の試合で3分ももたずに失
神KOでしたよね。恥ずかしくないんです
か？」

「そ、それは」

「別に弱いことは今に始まったことではありませんけど、そんな惨敗していて、榎本さんのことをバカにするなんて許されるわけないって分かってますよね？ あの人は最後まで私に向かってきましたよ。あなたはどうなんですか？」

「ひ、ひい。す、すみませんでした」

ガチガチと震える副部長だった。

そこに先輩としての威厳は何もなかった。その様子は見ているだけで痛々しいもので、情けなかった。

「ま、まあまあ純菜くん。藤山も、悪気があったわけじゃないんだ。許してやってくれないか」

部長が取り繕うように言った。

「しかし、純菜くんの言うとおりの榎本のこ

とを悪く言うのはナシだ。彼も立派なバトルファッカーであることは間違いないことだからな。敗者を陥れることはしないでおう」

その言葉に、純菜の怒りもおさまったようだった。「部長がそう言うなら」と、岸田部長の顔をたてて、それ以上の叱責を続けることはなかった。

「それじゃあ、純菜くんの勝利を祝ってもう一度乾杯しようじゃないか」

部長が仕切り直して言った。

男子部員たちは純菜の顔色を見ながら祝杯を続けた。途中で藤山副部長が純菜のドリンクバーのお代わりを率先して運んでいる様子が印象的だった。まるで純菜の子分のようになってしまう藤山副部長を見て、

俺はなんだか哀しくなってしまうたのを覚えてる。

＊

祝賀会の帰り道。

俺と純菜は二人きりで帰宅の途についていた。電車で自宅の最寄り駅でおり、後は徒歩。夏の熱気が夜なのにまだ残っていて、汗ばむのを感じた。

驚いたのは駅や電車内での出来事だった。何人か、純菜にサインを求めてきた人たちがいたので。しかも、そのほとんどが女性であることが驚きだった。ふつう、女性バトルファッカーのファンは男性ばかりとなる。それが、まるでアイドルを前にする追っ

かけファンのように、女性たちが純菜に群がっていた。

「わ、わ、あ、応援ありがとう、ごさいます」

慣れないことにアタフタしながら純菜が不器用にサインを書いてあげていた。

崩したサインなんて準備しておらず、ごくふつうに「純菜」と書いていた。それだけでも嬉しいらしく、声をかけてきたファンたちは「がんばってください」「かっこよかったです」「応援してます」と興奮した様子で純菜に声をかけていたのだ。

「しかし、本当によく勝てたな。すごいよ」俺は隣を歩く純菜に声をかけた。

「勝算はあったのか？ いきなり勝負をしかけてたけど」

「うん。健ちゃんにもらった動画で研究してただけけど、コレならいけると思ったんだ。下手に小細工をしなくても正面から当たれば大丈夫って」

「そうか」

「これも健ちゃんのおかげだよ。14組に入ったとき、ほかの人は諦めモードだったけど、健ちゃんだけは勝利のために色々助けてくれた」

「いや、俺なんて動画をおまえに渡しただけで」

「それが大きいことなんだよ。本当にありがとうね、健ちゃん」

心の底から感謝しているのが分かる純菜の様子に、俺も照れくさくなってしまった。俺は顔を真っ赤にしてそっぽを向いて歩

くしかなかった。そんなふう歩いていると、俺の中に疑問が生まれてくるのを感じた。それは、榎本選手との試合が終わった後からひっかかっていることだった。俺は隣の純菜に質問していた。

「なあ、あそこまでやる必要って本当にあったのか？」

「え？」

「榎本選手に対してさ。あれじゃあオーバーキルなんじゃないのかよ。病院送りにするまで絞り取る必要があったのかなって」

純菜のパイズリは執拗に榎本選手をいたぶるものだった。

その屈辱的な敗北によって、榎本選手の株価は急落し、スレッドには白目でアへ顔になった榎本選手の顔写真が乱立して、彼の

ことをバカにするスレが目立つようになっていた。

あそこまでやる必要が本当にあったのだろうか。これでは西園寺選手が言っていたスポーツマンシップに反することになるのではないか。俺はその疑問を純菜にぶつけてみた。

「うーんと。確かに、思っていたより弱くて、手加減を間違えちゃったっていうのはあるかもしれないかな」

純菜が言った。

「でも、それより初戦が大事だったんだ。榎本さん以上に強い人は、たぶん14組にはいないはずだからね。ここで圧勝しておけば、後が楽だと思ったんだよ」

「どういうことだ？」

「ほら、バトルファックって、メンタルが大事でしょ？ B L学園の精神的支柱をポコポコにしちゃえば、後は勝手に自滅してくれるかなって、そういう計算もあったんだよ」

「そ、そんなにうまくいくもんなかな。ほかのB L学園の奴らだって、猛者ぞろいだろ？」
「うーん。まあ、大丈夫だとは思うけどね。健ちゃんがそう言うなら、次の試合も油断しないで徹底的にやるよ」

その時、純菜の瞳が妖艶な光を帯びた。
ニンマリとしたその笑みに俺の背筋が凍った。まるで、横に立っているのは幼なじみの少女ではなく、男の精を奪いとる化け物のように感じられた。俺は初めて、純菜のことが怖いと思った。

「だから、次の試合もちゃんと見ててね、健康ちゃん」

そう言って純菜はニッコリと笑うのだった。

そこには天真爛漫とした天使の笑顔だけがあった。そのギャップにめまいがした。俺は「あ、ああ」と力なく応えることしかできなかった。

四

けつきよく、俺の心配は杞憂に終わった。

純菜の予想どおりになったのだ。

「ひゃあああんツ！」

試合会場に男の悲鳴がこだまする。

それをリング外のBL学園生徒が絶望の

眼で見据え、その他の観客が熱狂と共に応援をしていた。

リング上。そこには、もはや予定調和のようにして、BL学園の生徒が純菜に犯されている光景があった。

「や、だめえええッ！ おっぱいだめえええッ！」

筋肉隆々とした大の男が小柄な少女に恐怖して怯えている。

リング上に倒された男。仰向けになった男は、少しづつ近づいてくるその爆乳に心底恐怖していた。仰向けに倒れた男の股間めがけて、じりじりと純菜のおっぱいが迫っていく。

男は純菜の肩をつかんでなんとかその爆乳が接近してくるのをくい止めようとして

いるのだが、さきほどから筋肉でかためられた二の腕はプルプルと震え、純菜の爆乳の接近を許してしまっている。

「ふふっ。ほくら、少しづつ近づいていきますよ。しっかりしないと、おっぱいに捕まっちゃいますよ〜」

純菜が笑いながら言った。

その迫力。純菜を見上げた男が「ひっ」と悲鳴をもらして、心が折れてしまった。

「は〜い。おち●ん、つかまっちゃいました〜」

「ひっぎいいいいッ」

爆乳の中に矮小な一物が挟み込まれる。

それだけで男は白目をむいてしまった。その破壊力を知っている観客たちが、期待に胸をおどらせてコールを始めた。

「壊せ！ 壊せ！ 壊せっ！」

それは大合唱だった。満員となった観客席が一つになって、興奮は最高潮に達した。

もう何人ものBL学園生徒を再起不能に陥れた純菜の必殺技が炸裂したことで、観客たちの期待は一つだった。あのBL学園の冷酷悪魔を病院送りにしたパイズリ。誰が最初に言い出したのか分からないが、純菜のパイズリは「悪魔殺しの大鉄槌」と呼ばれ、熱烈な人気を誇っていた。

「みんな〜、いっくよ〜」

純菜が観客をあおって、さらに熱狂が増した。

笑顔を浮かべた純菜が、勢いよく乳圧をあげた。

「ひゃッギャアアアっ！」

男が断末魔の悲鳴をあげる。

パンツと肉の殴打音が響き、男の体がリングの上で陸揚げされた魚のようにはねた。さらに純菜が妖艶な笑みと共におっぱいを持ち上げた瞬間、セコンド席からタオルが投げ入れられた。審判員が慌てて、純菜と男を引き離す。男の一物がスポンと音をたてて純菜の谷間から解放された瞬間、堰を止めていた決壊が崩れ、白い液体が噴出した。男の体がビクンビクンと痙攣し、そのまま意識を取り戻すことはなかった。

「TKO！ 勝者、爆乳天使の純菜っ！」

審判員が純菜の手を高らかにあげた。

有名選手でなければつけられることのないリング名。これもまた誰がつけたのか分からなかったが、爆乳天使という二つ名も

あつという間に浸透していた。その童顔で優しくほほえむ様子は天使のようであり、天使には似合わない爆乳がとんでもないギャップと魅力をあらわしている。

「あ、残念ですね。せっかく、榎本さんみたいなのに、空っぽになるまでいき狂わせてあげようと思ってたんですけど」

純菜がニッコリと笑って言った。

彼女は恒例となった勝利後のポーズをとった。片腕でおっぱいをぐいっと持ち上げて、観客席に手をふった。

「応援ありがとうございます。次の試合もがんばりますので、応援よろしくお願いします。次は、回復できないくらい完全にブツ壊してみせるので楽しみにしてください」

ワアアツと歓声があがる。

その中には黄色い声もまじっていて、女性ファンの多さが目立った。童顔少女が屈強な男たちを圧倒し、壊してしまいう光景が、女性たちの心をつかんで離さないらしくかった。その選手イメージにあわせるように、純菜は時折ドSで強気の言葉を残すようになっていた。

「ありがとうございます。ありがとう」

リングの上を歩きまわって観客に手を振る純菜。

その足下では、対戦相手がいまだに体を痙攣させていて、他のBL学園生徒たちが必死に応急措置をしている。

勝者と敗者。

それはここ2週間のうちでさんざんに見

てきた光景だった。

*

純菜は、榎本選手の後も、BL学園生徒を次から次へと撃破していった。

2人目、3人目は榎本選手と同じく病院送りになって、そのままその後の試合も棄権するしかなかった。大量の白い液体が純菜のおっぱいにこべりついた映像がインターネットの世界を席巻し、榎本選手との勝負が決してピギナーズラックではないことを証明した。

4人目からはセコンドがタオルを投げ込むタイミングが早くなり、病院送りにはならなくなったものの、失神KOは相変わらず

ずだった。

5人目に至っては開始3秒、パイズリが極まる寸前でタオルが投げ込まれ、大会最短KO記録が生まれた。それがあまりにも情けなく、内外からさんざんなバッシングを受け、ネットでは屈辱的なコラ画像があふれるに至ってむかえた6人目。

それがさきほどの試合だった。胸を押しつけられて腰が抜け、パフパフで意識を刈り取られて、あつという間のパイズリ失神KO。タオルが投げ込まれるのが少し遅れただけで、男は壊れてしまった。おそらく、このまま病院送りだろう。今後の試合を棄権しなければならぬかどうかは神のみぞ知るといった感じだ。

純菜はBL学園選手たちを6人連続でK

Oしてしまったのだ。

決まり手は全てパイズリ。

あの爆乳で強豪たちを圧倒し、全勝勝ち抜けまであと一人にまで迫っていた。

BL学園の選手もバカではない。あの爆乳に正面からぶつかれば勝ち目がないことは当然に分かっていた。しかし、彼女の規格外のおっぱいはどんな対策も無効化し、そんな小細工をする男たちをあざ笑うかのように、男たちの精液を絞りとり、壊してしまった。

女の象徴であるおっぱいで、男の象徴である一物をミンチにして、搾り取る。

純菜の爆乳を前にすれば、男のどんな巨根も矮小に見えた。

偉そうな男たちが童顔少女に手も足もで

ずに悲鳴をあげ、白目をむき、失神して病院送りになる映像は衝撃的なもので、それが純菜のファンを急拡大させている原因らしかった。

＊

「しかし、おまえは本当に強くなったな」

第6回戦を終えた帰り道。

俺は純菜と一緒に帰宅している途中だった。純菜はどことなく疲れているように見えた。顔色が少し悪い気がする。

「そうだね。わたしも、ここまでできるなんて思ってもなかったよ」

純菜がそう言った。

少し陰を感じさせながらも、ニッコリと

笑ったその顔は俺の知った幼なじみのように思えた。しかし、彼女は今では、全国でその名を知らぬ者はいないバトルファッカーなのだ。その落差に、俺はなんだか戸惑いを感じてしまっていた。

「でもお前もさすがに疲れちまってるようだな。さすがに連戦はこたえるか」

「うん。試合ではぜんぜん疲労は感じてないよ」

「そうなのか」

「うん。相手もそんなに強くないからね。これなら何回やっても同じだよ。問題は、試合外だね」

そこで純菜がズーンと疲れた様子を見せた。

「ファンの人たちへの対応が慣れてなくて、

それで疲れちゃってるのはあるかも。どう
対処していいか分からなくてさ」

「ああ、今日もすごかったもんな」

試合が終わった後、試合会場を出た純菜
を待っていたのは道路を埋め尽くすほどの
おっかけファンだった。そいつらが純菜に
殺到し、全員がサインを求めたり、握手を
せがんだりしたから困ったことになった。

優しく真面目な純菜は全員に対処しよ
うとして前に進めなくなってしまう。そ
れを見かねた俺が割って入り、強引に純菜
を人混みから脱出させて帰宅の途についた
のだった。

しかし、帰宅途中も純菜に気づいたファ
ンたちが殺到し、対処に困っていた。純菜
の爆乳があればそれが目印になるのだから

変装することもできなく、どうしようもな
かった。

「ストレスたまってるんだろ、純菜」

「そんな、ファンの人をストレス扱いした
らバチがあたるよ。ありがたいことだもん」
「お前は変に真面目だからな。あんまり抱
え込むなよ。適度なストレス発散も大事だ
ぞ」

俺は早くも疲れた様子を見せる純菜を見
て心配になった。

「何か俺に協力できることがあれば言って
くれよ。ストレス解消でもなんでもさ。お
前の頼みなら、なんでもしてやるから」

「な、なんでも？」

「ああ。この道に引きづりこんだのは俺だ
からな。なんでも言ってくれよ」

顔を赤くして、モジモジとする純菜だった。

何をためらっているのだろうか。まったく理解できなかった。そんな彼女が意を決して口を開こうとした。そのときだった。「おいお二人さん。ちょっとこっち来てくれる？」

敵対的な声色。

目の前。暗闇の中で男が3人立っていた。そのうちの二人には見覚えがあった。

「お前ら、BL学園の」

純菜の4回戦と5回戦の相手だった。

もう一人も、BL学園の制服に身を包んでいる。彼らは追いつめられた表情を浮かべており、その張りつめた顔は今にもナイフでも取り出しかねない危うさを秘めている。

た。

「なんだ。お前ら、こんなところでなんの用だ」

「お前には用はねえんだよ。そっちの女だよ、用があるのはよお」

そいつらは純菜のことを親の敵でも見るようにして睨みつけた。

その剣幕は冗談ですむようなものではなく、俺は純菜の前に立って立ちはだかった。「だから、純菜になんの用だっていうんだ」「うるせえよ。お前には関係ねえ。黙ってろ」

ずかずかと3人組がこちらに迫ってくる。俺が純菜を背にして対峙するのをつかの間、いきなり、先頭の男が俺の腹部にアッパーをかましてきた。直撃を受け、息がっ

まった。激痛に膝が折れ、地面に倒れる。

「け、健ちゃん！」

純菜が大きな声を出した。

その慌てた様子に、3人組が下卑た笑みを浮かべて喜んでいる。

「さんさんコケにしてくれてよお。榎本先輩はお前のせいでインポになっちゃったよ。もうバトルファックも引退だ。お前のせいでよお」

ろれつのまわっていない下品な声。口から涎を垂らして、これから行う陵辱のことしか考えていない男たちがそこにはいた。「俺たちの試合でもさんさん好き放題やりやがって。お前みたいなぼっと出の素人が、たまたま勝ったからって調子に乗りやがってよお。へへへ、だから今度は俺たちの番

だよ。お前がヒイヒイ言って壊れるまで、犯してやるから覚悟しろよ」

男たちが純菜に近づく。

怯えた表情の純菜の肩を掴んで、乱暴にひっぱった。それだけで上着のボタンがはずれて、純菜の半裸がさらされる。ストイックな純菜はいつものように競技水着を着用していたのだが、それが男たちには我慢できないようだった。怒った男は純菜の腕を力任せにつかんで引っ張った。人気のないところに連れていくらしい。

「や、やめろ」

俺は腹部の一撃で息もできなかったが、力を振り絞って言った。

「じゅ、純菜に手を出すな。こんなことして、許されると思ってるのか」

「うるせえな。そうだ、そいつも連れてこようぜ。彼女が目の前で壊されていく様をじっくり見せつけてやろう。ヒヒヒ」

男の一人が俺の腕を掴んで立ち上がらせた。

そのまま男は俺の腹部に膝蹴りをかまし、俺の顔を殴って満足そうな笑顔を浮かべた。俺はぐったりして、そいつらのされるがままになった。

「け、健ちゃんっ。大丈夫っ」

純菜が暴れてこっちに来ようとした。

それを男が羽交い締めにして食い止める。男と女の力の差。体格差だって段違いで、男たちの力をふりほどくことなんて不可能だった。

「ひひっ。いい気味だなあ、おい。いいか、

バトルファックには総合格闘技ありのデスマッチだつてあるんだ。その条件なら、俺たちが負けるはずがねえんだよ。弱い女の分際でいい気になりやがって。今日はたっぷり可愛がってやるからな」

下品な顔を純菜に近づける男。

俺は口の中に鉄の味を感じながら、なんとかしようと必死だった。

「やめろお前ら。純菜には手出すな。バトルファッカーがこんな卑怯なことしていいと思ってるのか」

「ああん。なに言ってるんだ、てめえ」

「開会式で西園寺選手だって言ってただろうが。正々堂々、スポーツマンシップにのっかってバトルファックすることが大事なんだ。BL学園の先輩の言葉だろうがッ。そ

れをなんでお前らが台無しにするんだよ」

「うるせえな」

俺を背後から羽交い締めにした男が俺のこめかみめがけて拳を繰り出した。衝撃で喋れなくなる俺の首に腕が巻き付けられてチヨークスリーパーをかけられる。苦しくなって暴れるが、完全にきまった技をふりほどくことなんてできるはずがない。俺はなすすべもなく背後からの言葉聞いた。「もうそんなのはやらねんだよ。黒宮だつて部内で好き勝手やってるんだ。暴力、乱暴、なんでもありなのがバトルファックなんだよ。それをこれから見せてやるからよ」

へへへと笑う声。

俺の首にまきついた腕が力をもった。ぎりぎり肉が潰れる音がする。顔が真っ赤

になり、目の前が暗くなるのを感じた。

「いっぺん墜としとくか。死んじまうかもだけど」

「ああ、それがいい。この女には何度も気絶させられたからな。彼氏も気絶させようぜ。何回まで正気を保てるか楽しみだぜ」

もはや完全に一線を越えてしまった男たちだった。

俺は命の危険を感じたが、男たちの意識が俺にむいていれば純菜が傷つくことはない。そう思うと少しだけ希望がわいてきた。後はなんとか隙を見て純菜だけでも逃げ出してくれれば。そう思っていた俺の期待を裏切る声があった。

「もういい」

純菜だった。

彼女は今まで見たことのない表情を浮かべていた。ああ、人が本当に怒ったらどうなるのか、それが初めて分かった気がした。

「ぜったいに許さない」

「ああん。なんだてめえ、むぐッ！」

純菜の手を掴んでいた男は完全に油断していた。目の前の少女の武器がなんであるのか、忘れてしまっていたのだ。そう、純菜の武器は腕力でも暴力でもなかった。その他者を威圧する爆乳こそが、彼女のなよりの武器だったのだ。

「て、てめえ、や、やめろ」

男の手が純菜の爆乳に埋もれている。それを誘っているのは純菜の手だった。彼女は捕まれた手をそのまま自分の胸の中へと引っ張りこみ、男にその禁断の果実にふれ

させたのだった。

「は、離れろ。おい」

男の手が純菜の胸をつかんでしまった。

そのぐんにやりとした柔らかさが、男の脳味噌を溶かした。彼は条件反射的に、もう片方の手でも純菜の胸をつかんだ。男自身、自分がなぜそんな行動をしたのか分かっていない様子だった。男は純菜から離れようとしたのだ。それなのに、何故両手でおっぱいを揉んでいるのか。

「す、すごすぎる。やめろッ。あ、手、手が、とまら、あ、アアンッ！」

揉むごとに純菜の爆乳は形を変え、その視覚情報が男の頭をジャックして操り人形に変える。男は自分の意志を手放し、もはや猿のようにして純菜のおっぱいに夢中に

なった。

「お、おいお前なにやってんだ」

もう一人の男が声をかけるが、それよりも早く純菜が動いた。

夢中になった男の顔面を掴むと、そのまま必殺のパフパフにもちこんだ。男の顔面が純菜の殺人おっぱいに埋もれ、動かなくなつた。

「息を吸え」

底冷えするような純菜の声。それは絶対命令として男の脳裏に響いた。彼は大きく息を吸い、純菜のフェロモンを大量に摂取してバカになつた。

「もっと」

「すうはあ。すうはあ」

「もっとだよ。ほら」

ドスウンッ！

純菜が男のみぞおちを殴つた。そのせいで空気が肺の中からなくなり、男は盛大に純菜の芳香を吸い込み、ビクンビクンと痙攣し始めた。

「そこで寝てろ。あとで念入りに壊してやるから」

純菜は地面に倒れた男に一瞥もくれないことなく、もう一人に襲いかかった。

何が起きているか分かっていない男にむかって低空タックル。地面に仰向けに倒れ込んだ男によじのぼって、そのまま爆乳をすり付けていく。

「ひいひいッ！ あ、よ、よじのぼる、なああッ」

純菜が男の股間を爆乳で潰し、じりじり

と男の顔面めがけて移動していく。仰向けに倒れた男の体を滑走路にして、純菜の爆乳が行進を続ける。おっぱいが男の体で擦れるたびに、滑稽なほどの悲鳴が男の口から漏れた。

「溺れろ」

ぎゅううううっ！

そのまま移動を完了した純菜は、爆乳でもって男の顔面を食らった。捕食と吸収。純菜の谷間の中に埋もれて男の頭部が見えなくなってしまう。すぐにフェロモンを嗅がされ、男の抵抗していた腕がダランと墜ちた。傍目からも気絶したことが分かった。

「ひい、く、くるなあ」

最後に残った俺を羽交い締めに行っている

男が半狂乱になった叫んだ。

それには無頓着に、純菜がゆっくりと立ち上がった、こちらに歩いてくる。ゆっくりと。一歩づつ。それは強者の歩みだった。圧倒的強者だけに許される歩みで純菜がこちらに近づいてくる。背後の男は「来るな」と叫びっぱなしだった。

「その手を離しなさい」

底冷えする貫禄に満ちた声。

俺の目の前にきた純菜は冷たい瞳をしていた。光がまったくない。冷酷な鉄仮面。しかし、その仮面の下からは怒りがふつふつと沸いてきているのが分かった。「ひい」という悲鳴。俺の首にかかった腕の力が緩む。「聞こえなかったのか？ その汚い手を健康ちゃんからどかせて言ったんだけど」

純菜がダンと一度だけ足を地面で踏みならした。

男はビクンとして、咄嗟に俺の首から腕をはなした。「あ」と後悔の表情を浮かべた男は、次の瞬間には驚愕することになる。目の前。そこに純菜の姿はなかった。

「こっちだよ、ノロマ」

いつの間にか背後にまわりこんだ純菜が、男の背中を爆乳で潰しながら言った。不意をつかれた男がガクンと地面に膝をつく。それを逃す純菜ではなかった。

「墜ちろ」

じゅるるるるッ!

「ひいひいひいッ!」

背後から純菜の唇が男の矮小な口を奪った。

そのままディープキスで男の呼吸と抵抗を奪ってしまう。喘ぐ男を見下ろす純菜の冷たい視線がただただ恐ろしかった。人間を見る目ではなかった。下等な家畜でも見るように、その視線はただただ冷やかだった。

「あひん……」

男の体が弛緩した。

墜ちたのだ。気絶してしまった。まわりには、体を痙攣させる3人の男たちが倒れている。

「健ちゃん、大丈夫っ!？」

純菜がすぐに俺の体を支えて起こしてくれた。

その瞳には涙があった。さきほどまでの冷たい様子はなりをひそめ、優しい幼なじ

みがそこにはいた。

「ごめんなさいっ。わたしのせいだよね。わたしがちやんとしてないから」

「なんでそうなるんだよ。お前のせいじゃない。それよりごめんな。守ってやれなくて」

「ううん。そんなことないよ。健ちゃんを守ってくれようとしたもん。3人相手に立ち向かって、すごくかっこよかったよ」

涙目の純菜。彼女は感極まったらしく、そのまま俺の唇を奪った。爆乳が俺の胸で潰れて、腰が抜けそうになる。

驚きで目を見開いた俺は、純菜が目を閉じて、一生懸命に俺の唇に吸いついてくる光景を見た。それは親を求める雛鳥みたいで、すごくかわいかった。

「ごめんね。ありがとう」

純菜が唇を離して言った。

「ちよっとここで待っててね。すぐにすませるから」

「す、すませるって……お、おい純菜」

俺の声を聞かずに純菜が気絶した男3人を一人づつ裏路地にひっぱっていった。周囲の視線が届かない建物と建物の間。人の気配がない暗闇に支配された一角だった。

「いつまで寝てるの」

地面に寝そべっている男を純菜が蹴った。手加減も何もない力任せの一撃が男の顔面に炸裂する。悲鳴と共に男が一人、意識を取り戻した。その男は、純菜が4回戦で戦った相手だった。

「男に生まれてきたこと、後悔するほど犯

してあげる」

冷徹な瞳と声。

それだけで戦意を失った男はみるみる顔を真っ青にして怯えた。

「た、助けて、っぎゃあああッ！」

男の命乞いには耳を貸さず、純菜が男の服をはぎとって全裸にした。

男はパフパフの影響でまだ体に力が入らない様子だった。怯えて命乞いをする男を無視して、純菜が必殺の膝上パイズリの体勢になった。

「残さずミンチにしてあげますね」

冷徹な眼のままにニコリ笑った純菜。

その迫力に悲鳴をもらした男が、爆乳に挟み込まれてさらに鳴いた。純菜は手加減をするつもりはないらしく、いきなり乳圧

をあげておっぱいを打ち付けだした。

「ひゃっぎゃあああッ！」

男が悲鳴をあげて射精した。どびゅどびゅと盛大な射精が純菜の爆乳の中に打ち付けられていく音がする。いつものようにその谷間からは一匹の精子だって脱出することはない。男の子供の種となる遺伝子情報は巨大な乳房の中に吸収され、その役割を果たすことなく、その肉の監獄の中でミンチにされる。

「4回戦ではセコンドの人が早めにタオルを投げてくれたから、最後まで出し切ってなかったですよ。ほかの人たちと同じように、絞りきってあげますからね」

「ひゃだあああッ！ 助けてええッ！」

「ほら、2回目です」

「ひいひいひいッ！」

男が悲鳴をあげてバウンドした。体を暴れさせて射精の快感を逃そうとしている。それを許さないのは大迫力のおっぱいで、純菜は完全に男の体をコントロールしていた。

すぐに男は白目をむいて、体から力がなくなり、気絶した。しかし、怒っている純菜がそれで許すわけがなかった。

「起きろ！」

ぎゅううううッ！

「ひっぎひいひいッ！」

純菜が乳圧をあげると、男の体が電気ショックをくらったように暴れて、すぐに覚醒した。ふはっと何が起きたのか分かっていない男は自分の股間に吸いついて離れない

いその爆乳と、底冷えするような笑顔を浮かべた純菜に気づき、顔を真っ青にさせた。「安心してください。気絶してもすぐに起こしてあげますからね」

純菜がおっぱいを打ち付け、笑顔で男の悲鳴を受け止めながら言った。

「ほかのお仲間さんも、同じようにめっちゃくちゃに犯してあげますからね。気持ちよすぎて死んじゃうかもしれないませんが、こんな大きなおっぱいに殺されるんだから本望ですよね」

どこまでも辛辣に純菜が言った。

彼女は容赦をするつもりはないらしく、純菜のパイズリはさらに続き、男は気絶と覚醒の狭間の中で人格を崩壊させていく。それが永遠と続いた。夜の住宅街で、サ

キュバスが獲物3匹をひたすらに犯し続け
ていった。

＊

けっきょく、彼女は言葉どおり、3人を
血祭りにあげてしまった。その大きなおっ
ぱいを前にして、男たち3人はあまりにも
無力だった。

「すびばせんでした。ゆるちてくだひゃい」
もはやろれつもまわらないほどに犯され
た3人が、横一列に並んで純菜に頭を下げ
ている。深々としたおじぎが、これまでの
純菜の逆レイプの凄惨さを如実に物語って
いた。

「ねえ、あなた達は謝罪の仕方知らない

んですか？」

そんな尊厳を刈り取られた男たちを前に
しても、純菜はどこまでも残酷だった。彼
女は厳しい眼で男3人を睨みつけた。

「謝るなら土下座でしょ？ なに？ まだ
足りなかったかな」

おっぱいを両手で挟み込み、潰した。
肉がぐんにやりと歪曲して谷間が強調さ
れる。その谷間には今は何も挟まれていな
い。しかし、その動きだけで、男たちは半狂
乱に陥り、勢いよく地面に膝をついて、額
を地面にこすりつけた。

「すびばせんでした。ゆるしてください！」
男3人の土下座。

とうの昔に男たちの制服ははぎ取られ全
裸だった。フルチンで住宅街に立たされ、

少女一人に向かって涙を流しながら土下座をしている。

「どうしようかな。このまま続けて、本当に殺しちゃってもいいんだけどなあ」

純菜がなんでもないように言った。

ビクンと震えた男たち。

彼らは知っていた。純菜は本気だと。彼女が本気を出せば、そのパイズリだけで自分たちの命を刈り取ってしまうことができる。それを骨の随まで教え込まれてしまった男たちはガクガクと震えながら、土下座を継続し、自分たちの命を握っている少女の慈悲を乞うしかなかった。

「ほら、命乞いしろよ」

純菜が乱暴に言った。

「言われないと分からないのか、お前らは。」

はやく命乞いしろ。上手にできたら助けてやるから」

その冷徹な声色と家畜でも見下ろすような冷たい瞳。それに恐れをなした男たちが、堰を切ったように絶叫し始めた。

「助けてください！ 命だけは助けてッ！」

「お願いします純菜様ああッ！ 命だけは

勘弁してくださいッ！」

「なんでもします！ 俺たちが間違っていました！ だから純菜様、命だけは助けてください」

年上の男たちが年下の少女に心の底から命乞いをしている。それを純菜は満足そうに見下ろしていた。腕を組み、支配者のような格好で、男たちの命乞いを点検している。

次第に、彼女の冷たい表情が熱を帯びていくのが分かった。瞳は妖艶に歪み、頬に赤みがまじって、口元がにんまりとあがっていく。

興奮してるのだ。それが分かった。彼女は男たちに命乞いをさせて性的興奮を覚えている。それが俺には信じられなかったし、恐ろしかった。

「ふふっ、わたしに負けた男はみくんなこうなっちゃうんだよね。人間としての尊厳を捨てたマゾ家畜。お前たちも、わたしに精液搾り取られるだけのマゾ家畜になっちゃった」

純菜が一人でつぶやく。その自分の言葉ですらに興奮しながら。

「家畜になった男に優しくしても仕方ない

もんね。だって家畜なんでもん。こいつらには何をしても許される。生かすも殺すもわたし次第。それってなんて素敵なんだろう」

ふふっ。

笑い声を聞いた家畜たちがさらなる命乞いの声をあげた。さきほどからガクガクと震えて、滑稽と叫びたたらなかった。

「健ちゃん、どうか」

純菜がそこで俺のほうを振り返って言った。
そこにはニッコリと天使のように笑う幼なじみがいた。

「この人たち、どうしようか」

「ゆ、許してやっていいんじゃないか？
こいつらも反省しただろうし」

「そうかな。こんなことしでかしたんだもん。もう処分してもいいんじゃないかな？」

「い、いや。さすがにさ。そういうのはやめておこうぜ。なっ」

俺の言葉に純菜が仕方ないなーとばかりにつぶやいた。

「聞いたよね。健ちゃんが許してくれるってさ。よかったね」

彼女が言う。しかし、その口元にはニンマリとした笑顔があった。

「それじゃあ、殺さないで置いてあげる代わりに、壊すね」

言い終わるやいなや、純菜が土下座をする男の髪の毛を掴んで持ち上げた。

そのまま地面に倒れ込ませ、もはや息を吸うような自然な流れで、膝上パイザリの

格好になった。爆乳の中に一物が挟まれる。

「なんでええッ！ 助けてくれるってさっき！」

男が混乱と絶望に顔を歪ませた。それを受け止めた純菜がニッコリと笑顔になって言った。

「うん。だから殺さないであげるよ。でも、コレはもう元通りにならないように壊す。徹底的に。今後の人生で絶対に回復しないようにブッ壊すから」

「ひゃだあああッ！ やめてえええッ！」

「それじゃあ人生最後の射精、楽しんでね」
笑っている。純菜が笑いながら男を壊し始めた。

おっぱいが男の腰に打ち付けられる。肉の殴打音と共に男の悲鳴がさらに増した。

命をからす絶叫。人間のものとは思えない断末魔。ほかの二人はガチガチと震えながら目の前で仲間がおっぱいに壊されていくのを見つめるだけだった。恐怖のあまり、そのうちの一人が後ずさりを始める。それを見咎めた純菜がすかさず言った。

「逃げたら殺す」

「ひいひいッ」

「分かっていると思うけど、わたしは本気だから。バトルファックの模擬戦で返り討ちにしたら腹上死しましたって言えば、まあなんとかなるだろうしね」

「お願い。助けて」

「そこでジッと仲間が壊されていくのを見てなさい。大丈夫。次はあんたの番だから。逃げなければ殺さずに壊すだけにしてあげ

る。うれしいでしょ？」

ニッコリと笑った純菜がパイズリを続けた。

すぐに一人目の男が壊れた。

錯乱して爆笑をあげながら、頭をぼかぼかと殴り始める男。そんな奇行は無視して、純菜がさらに乳圧をあげた。

「あ、わかっちゃった。壊れる瞬間。ここだよね」

純菜が笑って言う。彼女はおっぱいを男の腰に打ち付けるのを止めて、制止した状態で話し始めた。

「心とち●ぽの芯が折れる瞬間って分かるんだよ。ほら、あとちよっとでも動いたら壊れるよ。もう二度と勃起できない。射精できない。そんなふうに壊れちゃうよ」

「ひゃだああッ！ 動かさないでええッ！
おっぱい動かしたらひゃだああッ！」

「ふふっ、ばいばい」

ぎゅううううッ！

純菜が乳圧をマックスにしておっぱいを腰に打ち付けた。ビクンと痙攣して唐突に男の体が地面に墜ちた。まるでブレーカーを落としたように、動かなくなってしまった男。

「はい、処分完了」

純菜が言った。

彼女はようやく男を解放するとその一物を掴んで遊び始めた。熟練した手技をもつてしても反応一つ見せない一物を見て、純菜が嬉しそうに笑った。

「ふふっ、家畜のち●ぽ壊すのってやっぱ

り楽しいな」

純菜が笑う。

「どんなストレス解消よりも最高だよ。まだ残ってるし、次やろう」

純菜の瞳が残りの二人をとらえた。

彼らは仲間が壊されても逃げることも助けに入ることもできなかった。それほどまでに、男たちは純菜に恐怖し、屈服してしまっていた。

「次は開始3秒で負けたお前にするね」

純菜がそう言って、壊した。

あつという間に、男の一物は純菜のおっぱいで壊された。彼の男性としての機能はここに終わりを告げることになった。その結果を純菜は満足そうに点検していた。満面の笑みで、自分が壊した一物をつまみあ

げ、乱暴にシコったり、ピンと人さし指ではじいたりする純菜。そこには純真そうな童女がいるようにしか見えなかった。

「最後はお前だね」

純菜が笑顔で言った。

最後の一人。ほかの2人の仲間が壊されていく光景を目の前で見せられた男は、純菜に笑いかけられただけで「ひいひいッ！　ひいひいッ！」と滑稽な悲鳴をあげて後ずさりを始めた。

顔は恐怖でひきつっており、純菜のことをただただ恐れている。男の体はすぐに路地裏の壁にぶつかつた。袋とじ。どこにも逃げることはできない。笑顔の純菜が迫つた。

「お前って、わたしの次の対戦相手だよね。」

14組の最後の試合相手」

純菜が笑顔で言った。

「わたしのこと、リング外で襲って不戦勝ねらいだっただんでしょ。最低だね。そんな男がどうなるか、もう分かっているよね」

純菜がおっぱいを両手で挟み込んだ。ぐんにゃりと歪曲する爆乳の谷間。それを見た瞬間、男の恐怖は限界点を突破した。

「ああああッ！」

じよろじよろじよろッ！

黄色い液体が縮みあがった一物から漏れていく。全裸の男の情けない放尿だった。彼の股間周辺に水たまりができた。

「うわっ、漏らしたよコイツ」

純菜が男を見下ろして鼻で笑った。

おっぱいを強調したただけでお漏らしをし

た家畜が面白かったらしく、純菜は前かがみとなつて男の眼前に爆乳を突きつけた。それだけで悲鳴をあげ恐怖でおかしくなつていく男を見て純菜が爆笑をあげた。

「ふふっ、今日は壊さないであげる」

純菜が妖艶に笑つた。

「その代わり、明後日の試合、ぜつたいに棄権するなよ？ いいか？ もし棄権したら、お前が地球の裏側に逃げたって探し出して、生まれたこと後悔するまでいじめ抜くからな」

分かつたか。

そう念を押された男は、返事の代わりに土下座をした。

純菜の足下で地面に額をこれでもかとおしつつける。恐怖のあまり漏らしたおしっこ

の水たまりの中に自ら頭をつっこみ、純菜に絶対服従を誓う男。

そんな男を見下ろした純菜は、興奮を抑えきれない様子だった。彼女はニンマリと笑い、もはや隠すことすらしないサディストぶりを発揮して、土下座する男の後頭部を踏み潰した。

彼女の革靴ローファーが容赦なく男の後頭部を踏み抜く。ぐりぐりと足が動かされ、男が尿の中で溺れた。その暴れる様子がおかしかったようで、純菜は見せ物と化した家畜でいつまでも遊んでいた。

*

「ごめんね、お待たせ」

凄惨な拷問の後、純菜が俺のもとにかえってきた。そのまま俺たちは男3人が壊された現場をあとにして、自分たちの家に向かって歩いていく。

隣を歩く純菜。

男たちに乱暴されてはだけていた制服の上着も直されていた。彼女はどこからどう見ても、童顔の胸の大きな女の子に過ぎなかった。真面目で優しそうな俺の幼なじみだ。

しかし、彼女はさきほどまで、男3人を返り討ちにして、その男性としての機能を完膚なきまでに壊して、男の尊厳を根こそぎ奪ったサディストなのだ。

さきほどまでの純菜の笑顔と男をいたぶることに性的興奮を覚えていた笑い声が俺

の脳裏から離れなかった。それがこの目の前の少女とうまく繋がらず、俺は混乱してしまった。

「あ、健ちゃん、ここ血が出てるよ」

心配そうな表情を浮かべた純菜が俺のこみかみを指さしていた。

手でさわってみると確かに血がついていた。殴られて転倒した時にすりむいたらしい。顔面と腹部もまだ痛かった。

「大変。ちょっと動かないでね」

純菜が自分のハンカチを取り出して俺のこめかみにあてがった。ハンカチが俺の血で汚れていく。

「いいよ、大丈夫だ。汚れちまうぞ」

「そんなの関係ないよ。そうだ確か唾つけるといいって」

そう言うと純菜が俺の頭部を抱え込み、大きく口をあけた。そして、コミカミの擦り傷をその長い舌で舐めあげた。その感触に俺の下半身が反応してしまう。

「ばっ、いきなり何するんだよ」

「だって。健ちゃんの傷が」

「いいから。これくらいかすり傷だよ。それより、お前は怪我なかったか？」

「わたしは大丈夫だよ。それより健ちゃん
が」

どこまでも人の心配をしてくる純菜だった。

そうだった。こいつは人が傷つくのを極端に怖がる優しい女の子なのだ。さきほどのことで動揺してしまったが、純菜の本質は変わっていないらしかった。

「そんなことより、3人目の男、よかったのか？」

俺は手当を継続したがっている純菜の意識をそらすために話題を変えた。

「明後日の試合で戦うんだろ？ なんなら、これから一緒に警察に行くか？ そうすれば、あいつと戦う必要なんてなくなると思うが」

「なんで？ そんなもったいないことしないよ？」

「も、もったいない？」

「うん。だって、あいつのこと公開の場で処分するチャンスじゃない。今日3人分やっていっきにストレス解消するより、小出しにしたほうがいいよ。お楽しみはとっておかなくちゃね」

ふふっと笑った純菜は一瞬だけあの妖艶な少女に戻った。

気のせいか、一瞬、周囲の空気も甘い芳香に変わり、それを嗅いただけで頭がクラクラする気がした。

「このまま完全優勝して、全国大会に行くから。健ちゃんもセコンド席から見せてね」元の優しい純菜に戻った少女が、ニッコリとほほえんだ。

俺は、それ以上、さっき純菜が俺にキスをしてきたことや、男たちのことを家畜と呼んでいたことを追求することもできずに、純菜の戦いを見守っていくことを約束することしかできなかった。

＊

純菜の7回戦はあっという間に終わってしまっただ。

対戦相手の男は棄権をすることなく試合場に現れた。その姿を目にした純菜がニンマリとした笑顔を浮かべたのを俺は間近で目撃していた。

対して、男は最初からあまりにも純菜に恐怖していた。かたくなに純菜の姿を見ようとしなかった。それはリングの上で向かい合っても同じだった。彼はきよろきよろと周りを見渡し、下をむいて、ぜったいに純菜の姿を見ようとしなかった。

審判員が試合開始の合図をして、ブザーが鳴り、時計が時を刻み始めた。

絶対優位の立場にある純菜が、妖艶な笑

みを浮かべて言った。

「顔をあげろ」

冷たい声色。その支配者の声に、自分が家畜であると思いついた男は「ひい」と悲鳴をもらして勢いよく顔をあげた。

「私の目を見る」

男が怯えたように純菜の目を見る。

ビクビクと震え、膝がガクガクと震えているのに逃げられない。純菜に完全に支配された家畜は、彼女の命令一つで自分の体がジャックされてしまっていた。

「ふふっ、ほくら、ちゃんと見てなさい」

ぐにゃああッ！

純菜が爆乳を両手で挟み込んだ。

谷間が強調され、柔らかそうな肉がぐんぐんやりと潰れた。それだけで男は「うっ」と

呻き、滑稽にも一物をフル勃起させてしまった。

「ふふっ」

妖艶に笑った純菜が魅惑のダンスを踊る。腰をくねらせながら、男の視線を自分の爆乳に集中させる。その状態でさらにおっぱいを変幻自在に操り、男の興奮を限界なく高めていった。

「あああッ！ だめええ。おっぱい動かすの止めてえええッ！」

男が顔を左右に振るが、純菜のおっぱいから目を離すことはできない。

一度それを見てしまったら二度と視線をはずすことは不可能だ。男がハアハアと息を荒くした。体がビクビクと痙攣していく。男の限界を熟知している純菜がニンマリと

笑って言った。

「イけ」

「ひゃああああッ！」

どっぴゅううううッ！

盛大な射精。それがパンツの中に放出された。

男の腰が抜け、地面に座り込んだ。ピクンピクンと痙攣させながら射精を続ける男。純菜は一度も男に触れることなく、男を絶頂に追いこんでしまったのだった。

「ダ、ダウン！」

審判員も困惑して言った。

会場中もザワザワし始める。中には「あいつ純菜さんのおっぱい見ただけで射精したんだけど」「チョーうける。やばいっしょ」などと黄色い歓声があがっていた。

「1、2、3」

審判員がカウントを続けている。

10カウントまでに立ち上がってファイティングポーズをとらなければ男の負けが確定してしまう。

男はなんとか立とうと奮闘していた。片膝をつき、足をプルプルと震わせながら立とうとしている。それが生まれたての小鹿のように、純菜のファンたちの爆笑が生まれていた。

「4、5、6」

触れられてもいけないのにKO負けなんて、男のプライドが許さないようだった。

なんとか立ち上がらなければならない。そんな思いで彼は顔をあげてしまった。見えたのは男をニンマリとした笑みで観察

している純菜の姿だった。

「ふふっ」

純菜は、男の視線に気づくと、腕組みをして爆乳を下から押し上げた。

やわらかそうな果実がわずかに変形した。ほんの少しの動き。純菜にとっては片手間のイタズラ程度の動作だ。それで男は終わった。

「ひゃあああッ！」

どっぴゅうううッ！

男が二度目の射精をして、そのまま尻餅をつき、動かなくなった。無情な10カウントが響き、試合はあっけなく終わった。

「勝者、爆乳天使の純菜！」

審判員が高らかに純菜の手をあげた。

会場の歓声が爆発した。純菜が声援に手

を振る。

こうして、純菜は予選全勝優勝でもって女性勝率1位を勝ち取ってしまった。死の14組を余裕で勝ち抜いてしまったのだ。

確かに14組は死のグループだった。しかし、死は男たちにもたらされた。けっきょく、14組に所属していたBL学園生徒は闇討ちを仕掛けてきた男も含めて、全員が純菜に壊されてしまった。彼らはこの大会後、全員がバトルファックを引退することになり、その後、勃起することすらできないインポに変えられてしまったのだった。

この頃から、純菜の二つ名に「壊し屋」や「デストロイヤー」といった物騒な名前も使われるようになっていった。インターネット上では彼女に壊されたいという男たちの

欲望があふれ、女性たちは憧れの眼でもってますます純菜を崇拜するようになっていった。

何はともあれ、純菜は地方大会の予選を勝ち抜いた。

2日後の決勝戦で全国大会の切符をかけて男子勝率1位と対戦する。その相手は、BL学園の黒宮だった。

五

純菜の決勝進出はうちの学校でもかなり話題になっていた。

教室でも純菜は人気者になっている。女性陣からは羨望の眼差しで見つめられ、男子からはチラチラと盗み見をされるように

なっていた。

その人気は俺たちの学年だけではないように、1つ下の学年でも同じようだった。中等部のバトルファック同好会の後輩である姫華も、純菜のファンのようだった。

「マジすごいし。純菜先輩ヤバイ。カッコいい」

校内でたまたま会ったときに姫華が興奮したように口を開いた。

どうやら姫華は榎本選手が瞬殺された試合から最後の試合まで観戦し、その試合すべての動画をダウンロードして繰り返し見ているとのことだった。

「アレでしょ？ センパイがうちにオススメの教材頼んできたのって、純菜先輩のためだったんツスよね？」

「ああ。そうだよ」

「うわー。すごいすごい。まだバトルファック始めて数ヶ月でアレってマジやばいって。そんなすごい人と一緒に学校って、かなりラッキーって感じ」

興奮して純菜を誉めたたえる姫華だった。いつか彼女を紹介してほしいとしきりに言うてくるあたりまるつきしただのファンだ。「そんなに純菜に会いたいなら、バトルファック部に入ればいいじゃねえか」

「え？」

「だから、今からでも部活入れれば、毎日純菜に会えるし、一緒に練習できるぞ。なんならスクールと掛け持ちでもいいし」

俺の言葉に「そうかその手があったか」と考え込む姫華だった。

どこか抜けているところがあるのがコイツのいいところだが、そんなことも考えつかないほど、姫華は純菜のことを神聖視していたのかもしれない。

「それより、純菜の次の相手だよ。黒宮。やっぱり強いのか？」

俺は肝心のことを質問した。

姫華はスクールで何度も黒宮と戦ったことがあるらしかった。何か参考になることがあるかもしれない。

「アイツは悔しいけど強いッスよ。わたしだって何度もイカされましたし」

「そうか。何がすごいんだ？」

「まあ、ああ見えて繊細な技もできるとか、いろいろありますけど、一番はやっぱ、乱暴なプレイスタイルッスカね？」

「乱暴？」

「そうッス。反則ギリギリの乱暴プレイ。本人は黒宮流レイプ術とかサムいこと言ってますけどね。クリストスを噛んだり、無尽蔵の体力でピストンを繰り返したり、そういうプレイっすね」

なんともBL学園らしくない話だった。西園寺選手を筆頭にして、正当派バトルファッカーを輩出する名門校から、なぜ黒宮のような化け物が生まれたというのか。「まあでも、純菜先輩ならきつとやってくれるッス」

期待に目を輝かせて姫華が言った。

あの強気で自意識のかたまりみたいなのこいつがここまで人のことを慕うのは意外な気持ちだ。姫華は純粋に純菜の勝利を

応援している。しかし、俺たちはそこまで樂觀視することができなかった。

*

「ううむ。やはり黒宮くんは強敵だね」

部室で岸田部長が言った。

俺たちは部室備え付けのディスプレイで黒宮の予選7試合を分析している最中だった。

「見てみたまえ。この第3試合なんて悲惨の一言だよ」

部長が動画を再生する。

画面に映されたのはリングだった。その上で黒宮が何度も反則スレスレの動作をして、相手選手を最終圧倒していた。

相手選手にタックルをし、倒れかかる瞬間に偶然を装って肘を相手の顔面に叩き込む。臉から流血し、視界が遮られたことをいいことに、ひるんだ女性の秘所を勢いよく殴った。当然のように審判員が試合を止めて厳重注意を行う。しかし黒宮は悪ぶれることもなく、肘があたったことは偶然であること（確かに流れる動作に意図的な要素を読みとることはできない）、秘所を殴ってしまったのは絶好の好機と違って手マンをしようとしたのだが焦って目測を誤ってしまったことに原因があること（確かに素人バトルファッカーがよくある失敗の一つではある）を流暢に説明し、イエローカードをもらうこともなく試合が再開される。あとは一方的な展開だ。怯えた女性選手

を力づくで押し倒し、威嚇をしながらレイプを始める。競技水着をビリビリに破り捨て、相手の興奮なんておかまいなしに性的快感を暴力的に叩き込み続ける。

決まり手は、背後から女を四つん這いさせた状態でのダイレクトアタックだった。女性がイっても執拗に続けられたその行為によって、最終的に女子選手の意識は戻らなくなり、病院送りになった。その後、PTSDを発症していることが判明し、今でも面会謝絶とのことだ。

「ひどすぎる」

確かに黒宮は強かった。

しかし、その強さは邪道の強さだ。相手を尊重することもせず、暴力を用いて勝利する。そんなものがバトルファックであっ

ていいわけがなかった。俺の中に怒りがメラメラとわいてくるが、それよりも心配なのが純菜のことだった。

「純菜はまだ格闘技系の技は練習してないんです。というか、アマチュアレベルでは本来ルール違反で必要ない技ですからね。でも、黒宮相手となったら話がかわつてくる」

「確かに、あの反則プレイは、総合格闘技の心得がなければ対処できないかもしれないね。正攻法の純菜くんでは、さすがに荷が重いかな」

「純菜がこの女子選手と同じ目にあうかもしれないかと思うと、気が気でなりません。危なくなったら、俺は躊躇なくタオルを投げ入れますよ」

俺の言葉に部長は「俺もそれがいいと思う」と言ってくれた。その上で、部長が俺の体を気遣ってくれた。

「健二、君の体はもう大丈夫なのかね」

「え。ああ、俺の試合のことですか」

「ああ。試合は本当に残念だったね。おしいところまでいったが」

純菜が勝率1位を獲得したというのに、俺といえど2勝1敗。

4回戦目からは棄権という低落で大会を終えていた。2連勝で迎えた3回戦目。そこでBL学園の1年生に完膚なきまでに敗北し、ドクターストップがかかってしまったのだ。

「あの1年にはさんざん絞りとられましたけど、体力だけには自信がありますからね。」

今はもうなんともないですよ」

「そうか。それならいいんだが」

「お気遣いいただいてありがとうございます。部長もおしかったですね」

部長は6勝1敗で惜しくも勝率1位を逃してしまった。

最後の一人に勝てていれば、勝率では黒宮に並んでいたのだ。堂々のベスト4入りだった。

「ハハッ。あれはくじ運だよ。最後の一人以外、胸の大きな選手がいなかったからね」

「どういうことですか？」

「純菜ちゃんと練習をすればこうなるということだ。この前病院に行ったら、おっぱいドランカーと診断されたよ。これで俺もバトルファックは引退だね」

「そ、そんな」

おっぱいドランカーというのはバトルファッカーの宿命みたいな病気だ。

胸のでかい女性選手のおっぱい技で完膚なきまでに搾り取られると発症すると言われている。症状としては、胸のデカイ選手相手には極端にバトルファックが弱くなること。

おっぱいドランカーになった選手がその後、巨乳バトルファッカーに勝利する確率は0パーセントと言われている。これを発症すると、ほとんどの選手が引退を余儀なくされていた。

「それで、純菜くんは今日はどこにいったんだ？」

部長が重苦しい話題を避けるように言っ

た。

俺もそれにあわせて答える。

「あ、あいつは今日、榎本選手の見舞いに行くなって言っていましたよ」

「ああ。そうか。榎本はまだ退院できないみたいだね」

「意識は戻ったらしいんですけどね。こればかりは心の問題もあるみたいですから」
「まあ優しい純菜くんだけのことはあるな。自分が壊した相手なんて、ふつうは気にかけることもしないがね」

部長の言うとおりだった。

あいつはどこまでもすごい選手だった。卑怯な技を使うことなく、代名詞となった悪魔殺しの大鉄槌でもって失神KOを連続させる。その強さに驕ることなく、敗者に

対しても気遣いを見せる（まあ、弱い相手や向上心のない相手には徹底的に残酷だが、それも彼女がストイックに強さを求めているからだろう）

そんな彼女に比べて、俺はあまりにも情けなかった。

俺が強ければ、俺が勝率1位となって、純菜と決勝で戦うことになったのだ。

そうすれば、純菜が黒宮と戦うこともなかった。

俺は予選を勝ち抜けなかった原因、3回戦のことを思い出していた。

*

相手はBL学園の1年生だった。

名前は皆川麗美。

長身で美人系の少女だ。冷たい印象を覚えるほどの整った顔立ち。その大人びた様子は、とても年下には見えなかった。しかし、年下に見えない部位はほかにもあった。

巨乳だ。

さすがに純菜よりは小さいものだったが、学生レベルは楽に越えていた。彼女が上着を脱いだ瞬間にこぼれ落ちた大きな果実に、俺の視線はくぎづけになってしまった。

試合は終始一方的なものになった。

正攻法のディープキス勝負からして、俺は彼女の足元にも及ばなかった。その大きな胸がぐりぐりと俺の胸板を刺激してくる。それに耐えることもできずガクンと膝が笑ってしまふ。今年の3月以降、まともに女性

とバトルファックできていなかったのだ。完全な練習不足。俺は一方的にキスだけになぶられていった。

「ああ……ひいいい……」

俺の口からあえぎ声漏れる。

それを麗美が真顔で見下ろしてくるのが分かった。

彼女の舌が俺の口内で暴れるたびに、俺の悲鳴がこぼれ、その痴態が冷静に観察されていった。

興奮で頭が真っ白になっていた俺の防御力はいつの間になくなっていった。気づくと俺の好物に彼女の長い指が絡んでいた。まずい。そう思った瞬間に、麗美の手が激しく動き出した。その手技の見事さは味わったこともないので、変幻自在に麗美の手

の動きが変わり、あっけなく俺は果てた。

「い、いつきゅううッ！」

どびゅどびゅどびゅッ！

盛大に射精をした俺は地面にへたり込んでしまう。

それを麗美が淡々と見下ろしていた。その視線がなんだか可哀想なものを見るような同情で染まっていたのが妙に印象に残っている。

俺は歯を食いしばって10カウント前に立ち上がった。

試合が再開され、そこからは公開処刑だった。

パフパフで胸の中で顔面をミンチにされ、乳首をさんざんにいじめられた。彼女が本気を出せば俺のことを射精させることなん

て簡単だろうが、彼女はそうしなかった。彼女は俺の性感をひたすら高めていった。そのたびに俺の情けない悲鳴が会場に響くことになった。純菜も当然に会場にいた。彼女の前で無様な試合をすることは悔しかったが、どうにもならなかった。

決まり手はパイズリだった。

年下の少女の谷間の中で、無惨にも精液が噴出する。

それを麗美が冷たい表情で見つめていた。俺を射精させることなんて当然という表情だった。しかも、彼女の乳圧は緩むことなく、ぎゅううッと左右からおっぱいを挟みあげ、さらに乳圧をあげてきた。

「悔しいですが、黒宮先輩の指示なんです。恨まないでください」

麗美がパイズリを続けながら言った。

「あなたの学校の純菜選手が榎本先輩を失神KOしたので、その意趣返しということですよ。これからあなたが気絶するまでパイズリします。覚悟してください」

麗美はあくまでも表情一つ変えなかった。その西洋人のような切れ長の瞳でもって、俺の痴態を観察しながら、膝上パイズリを続けていく。

「それにしても、あなたは弱すぎですね。話しになりません」

麗美が怒ったように言う。

「あの純菜選手が所属する学校の選手ですから、もっと歯ごたえがあるかと思っただんですが。あなた、満身に女性と練習していないでしょ」

ずばり指摘する。

凶星だった。

「やっぱり。そんなことで大会に出ようなんて舐めてるんですか？ その無尽蔵の体力以外、ほとんど素人同然です。これなら、わたしが小学生の頃でも勝てたと思いますよ」

ぎゅうううツと乳圧をさらに増した。俺は白目をむいて悶絶する。

「もう限界のようですね。それでは無様に気絶してください」

さらに深くおっぱいを打ち付け、麗美の言葉どおりになった。俺は白目をむき、体を痙攣させて、そのまま気絶した。

その後のことは覚えていない。後で聞いた話では、気絶した後も麗美はパイズリ

をやめず、潮を吹かせてからも冷たい表情でパイズリを継続し、審判員が割って入ることであろうやく解放されたとのことだった。

目をさましたのは病院だった。

幸いなことに、純菜と練習できなかった俺は基礎体力を向上させることしかしていなかったたので、回復力も段違いとのことだった。

特に入院する必要もなく、俺は帰宅することになった。

しかし、体に影響が残ってはまずいということで、医者からはドクターストップをかけられてしまった。こうして俺の2年の大会は終わってしまったのだ。そのふがいなさを自分自身許せないまま、俺は純菜のセコンド役に専念していた。

*

純菜は、俺の無様な敗北を観客席から見ていたにもかかわらず、俺に対する態度を変えなかった。

心優しい幼なじみ。俺の体の心配をして、気遣う様子を見せてくれたことに、俺は内心ほっとしていた。

部内ではバトルファックの強さが全ての価値基準となる。強ければ何をしても許される。そんな風に思うようになってしまったものだ。それはBL学園の黒宮を見れば分かるだろう。

しかし、純菜はBL学園の選手を全員KOして勝率1位になっても、その優しさを

失わなかったのだ。俺にとっても、そんな純菜は誇りだった。だからこそ彼女の力になりたかった。無理かもしれないが、純菜には黒宮に勝って欲しかった。そのためなら、俺はなんだってしてやる気持ちだった。「そ、それだったら、明日の練習の後、行きたいところがあるから、ちょっとつきあってくれるかな」

何かできることはないかという俺の申し出に純菜はそう答えた。

断る理由はない。俺と純菜は練習のあとで出かけることになった。

その日も、純菜はいつものように男子部員3人を血祭りにあげて、縮こまった一物に貞操帯をとりつけてから、すぐに制服に着替えて、待ち合わせ場所である校門に走っ

てやってきた。

「おまたせ。それじゃあ、行こうか」

笑顔の純菜が言った。

黒宮との試合を明日に控えて、今日の純菜の練習はいつもより過激なものだった。だからこそ彼女のショートカットの髪の毛は艶やかに濡れていて、それがとてつもない色気になっていた。さきほどまで男たちの精液を絞りとっていた少女。その存在を目の前にするだけで、俺の股間が反応してしまいそうになる。

俺はなんとか抑えて純菜のあとをついていった。目的地は電車を乗り継いだ先の大型スポーツ店だった。バトルファック用の商品も多数取りそろえている場所だ。

「なんか買うもんあったのか？」

店内に入ってから俺は言った。

純菜は「そうなんだよね」と言いながら、迷わずその一角に足を踏み入れた。そこは、女性用の競技水着を並べている場所だった。なんで今更こんなところにと思った俺に對して笑顔の純菜が言った。

「実はまた大きくなっちゃったみたいなの」「え？」

「わたしのおっぱい、まだ成長してるみたい」

その一言に俺の視線は彼女のおっぱいにくぎづけになる。

ゴクンと生唾をのんだ俺の手をつかむと、彼女は「来て」と試着室に俺を連れ込んだ。

狭い試着室の中に俺と純菜の二人だけが入る。カーテンでしめるタイプではなく、ド

アで外部と隔てる個室タイプの試着室だった。鍵もしめられるようになっていて、純菜が躊躇なく鍵をしめた。

「お、おい純菜。なにやって、」

抗議の声は、彼女が制服を脱ぎだしたことによって言葉にならなかった。

ブルンとおっぱいが揺れて、彼女の上半身が競技水着だけになった。

しかも、純菜はそれで終わらなかった。彼女はその競技水着も、背中のアタッチメントをはずしてとりはずしてしまった。

拘束帯をはずされた決戦兵器が、自由になって大きく揺れた。重力にすら打ち勝ち、まったく垂れることなく鎮座するその迫力に、俺はただただ圧倒されてしまった。純菜の手が乳首だけを隠していわゆる手ブラ

の格好になっているのだが、それがますます俺の脳味噌を刺激し、股間を固くさせてしまうのだった。とにかく目の前のおっぱいから目を離せない。

「け、健ちゃんにはかかってもらいたいの」
その言葉に、ようやく俺は我に返った。

おっぱいではなく彼女の顔を見上げる。そこには顔を真っ赤にして恥ずかしがっている純菜がいた。

「ね、お願い。わたしのおっぱい、メジャーではかって？」

俺はゴクンと生唾を飲み試着室に備え付けられていたメジャーを手にとった。

純菜の背後にまわる。背後からもその極上の果実は背中に収まらず、横にはみ出していた。しかも密室の中で漂ってくる甘い芳

香が俺の頭をバカにしていた。純菜のフェロモン。試合で男子部員の頭をバカにしている彼女の魅力の一つが、密閉された試着室の中でたまり続け、俺をダメにしていた。

俺は震える手で、メジャーを純菜の体にまわした。彼女のおっぱいにぐりりとメジャーをまきつけ、背中で数字をあわせる。その数字を見て、俺は驚愕した。

「ひゃ、110」

衝撃的な数字だった。まさかの1メートル越え。小さな子供の身長よりも大きな塊を、純菜はその胸に飼っていることになる。

「ん、やっぱり大きくなったみたい」
手ブラのまま純菜が言った。彼女は顔を真っ赤にしてこちらに振り向いてきた。そ

の圧倒的なおっぱいの迫力に、俺は目をく
ぎづけにされてしまった。

「前にはかったときには104センチだっ
たから、6センチも増えちゃった」

「ろ、6センチも」

「うん。Kカップだね。どおりで競技水着
がきついわけだ」

衝撃の告白だった。

Kカップなんてものがこの世に本当に存
在しているというのが信じられなかった。
しかも純菜はまだ高等部2年生の学生なの
だ。その大きさが数字となって分かると、
圧倒的なリアリティとなって目の前に迫っ
てくるように思えた。

「健ちゃん」

純菜の声に我に返った。

彼女は手ブラのまま、顔を真っ赤にし
ながら言った。

「Kカップの競技水着。健ちゃんがデザイ
ンを選んでもってきてくれないかな」

「お、俺が？」

「うん。健ちゃんに選んで欲しい」

顔を真っ赤にして言う純菜。

彼女のフェロモンで思考がまとまらず、
俺は訳も分からないままにうなずき、試着
室を出た。

むかった先は競技水着コーナーだった。
Aカップから始まってBカップ、Cカップ
と続いていく。最後の棚にKカップがあっ
た。胸囲サイズ105から115までのも
のも取り寄せてある。ゴクンと生唾を飲み
込んだ。これ以上大きなサイズはなかった。

純菜のおっぱいはここまで成長したのだ。

「選んでといっても、競技水着のデザインは決まってるからな」

高等部では色は白色だけ。デザインも完全に無地のものか、線が二本入っているか、少しだけフリフリがついているものの3種類だけ。今まで純菜は無地のものを使っていた。俺はぼんやりとする頭で純菜に一番似合うと思ったフリフリのついた競技水着を手にとって、試着室にもっていった。

「ありがとう、健ちゃん」

純菜がニッコリとした笑顔で言った。

彼女はまだ手ブラのままだった。その大きさは何度見ても慣れなかった。すぐにフル勃起して、ズボンにテントができる。

「これが健ちゃんの選んでくれたやつなん

だね」

「あ、ああ」

「ねえ、つけてくれる？」

ドキンとした俺は純菜の言うがままになる。

俺は震える手でKカップ競技水着を純菜の体に装着していく。背中でアタッチメントをとりつけ、カチリと音がするまで差し込んだ。

「ん。ぴったりみたい」

純菜が前で胸のベストポジションに水着を揃えていった。その動きにあわせて、大きな果実がプルプルと震えていて、俺の心臓がバカみたいに脈打った。

「どうかな？ 似合ってる？」

純菜が笑って言った。

彼女は胸をこちらにドンと見せつけてきた。顔が真っ赤になっている。しかし、純菜以上に俺の顔のほう真っ赤になっている自信があった。

「お、おう。とっても似合ってる」

「ほんとう？」

「うん。すごい可愛い。というか、お前のおっぱい、やっぱりすげえな」

俺は正直に言うしかなかった。

俺の言葉に、純菜がジッとこちらを見つめてきた。

「ねえ、健ちゃん」

「な、なんだよあらためて」

「健ちゃんは、おっぱいの大きな女の子、好き？」

その言葉に俺の顔が真っ赤になった。

「な、なに言って」

「お願い答えて。真剣な話しなの。健ちゃんは、おっぱいの大きな女の子、嫌いじゃない？」

どこか思い詰めた様子の純菜だった。

真剣そうな表情で俺の瞳を凝視してくる。

それがどこか危うくて、俺は言葉を選ぶこともできずに、自然と言葉があふれた。

「き、嫌いなわけあるか。大好きだよ」

俺は言った。

「大好きだ。おっぱいが大きいとそれだけで興奮する。なんだか幸せな気持ちになるし……ええと、なんだな、とにかく大好きだよ」

自分でも何を言っているのか分からない。というか、俺は今、何を言ったんだろう。訳

が分からず取り繕うとすると、純菜がそつと抱きついてきた。真正面から、その大きな胸が俺の体に触れないようにして、純菜が優しく身を寄せてくる。

「ありがとう。健ちゃん」

純菜が俺の胸に顔を埋もれさせながら言つた。

「それだけでわたしががんばれる。明日の黒宮くんの試合も、ぜったいに勝てるよ」

だから見ててね。

そう言つて顔をあげた純菜はニッコリとした笑顔だった。

俺はそんな純菜が可愛くてたまらなかつたし、体につたわってくる彼女の柔らかい体と甘い匂いにどうにかなくなってしまひそうだった。おっぱいは触れていないのに、純

菜のほかの体も特別に魅力的だった。

「ああ。純菜ならできる。がんばれ」

俺は純菜を勇気づけるように彼女の体に腕をまわして抱きしめた。

純菜も抵抗せずに受け入れてくれた。密室の狭い試着室の中で、俺たちは二人、少しの間だけ抱き合っていた。俺はそんな中にあっても、完全フル勃起になっているのが純菜に気づかれないように必死だった。

＊

「本当によかったの？ 買ってもらっちゃつて」

純菜が大事そうに紙袋を抱えながら言つた。

スポーツ店の帰り道。家路につきながら、
純菜はずっと嬉しそうに笑っていた。

「ああ、饑別だ。受け取ってくれ」

「でも、高かったでしょ。カップ数が大きくなればなるほど、値段も高くなるから」
「これくらいなんでもない。気にするな」

バイトで貯めた金がお底をつきつつあったが、そんなことは本当にどうでもよかった。俺は純菜の力になりたかった。ただそれだけだった。

「ありがとう。大切にするね」

そこで力強く競技水着が入った紙袋を抱きしめる純菜だった。

彼女の制服ごしの爆乳がぐんにやりと潰れて、俺は「うっ」と呻いてしまう。さきほどの生乳の映像が脳裏にこべりついてい

て、離れなかった。

「しかし、明日の試合、どうするつもりなんだ？」

俺は取り繕うようにして言った。

「黒宮の乱暴なプレイに対して、何か対策はあるのか？」

「うん。部長と健ちゃんの準備してくれた動画は穴があくほど見て、それに合わせて男子部員とも練習したしね。それに、榎本……さんにも話しを聞けたから大丈夫だと思っ
よ」

「榎本って……確か、昨日、見舞いに行ってたんだっけか」

「そうだよ。病院でも、ちょっと色々あったんだけどね。榎本さんの希望を叶えてあげたんだ」

そこで純菜が妖艶に笑った。口元にはニンマリとした笑みが浮かんだ。

「そうしたら、最後にはこっちが聞いてないのに、黒宮くんのこと色々教えてくれたんだよ。まあ、大した情報じゃなかったけどね」

ふふっと、瞳を蠱惑的に輝かせて笑う少女。

その変貌に俺はドキンとした。

それはリングの上で純菜が見せる表情だった。サキュバスのような天使。彼女が榎本選手に何をしたのか、それを考えるのが恐ろしかった。しかし、想像したくないのに思い浮かべてしまう。病院で純菜が榎本選手を絞っている姿を。男が泣き叫んでいるのに容赦せずに永遠と射精させていく姿

を。俺の股間はあつという間に勃起してしまった。

「それに、健ちゃんに買ってもらった新しい競技水着もあるからね」

純菜がいつもの優しい幼なじみに戻って言った。

その純粹無垢な笑顔が妙にまぶしかった。「だから明日も勝つよ。見ててね、健ちゃん」

そう言って純菜はニッコリと笑うのだった。

俺は決意を新たにして、純菜のことをサポートすることに決めた。

六

決勝戦当日。

朝刊を見ると、単なる高等部の部活動の決勝戦が一面をかざっていた。それだけ、バトルファックのファンは多く、世間の関心も高いのだろう。純菜と黒宮の写真が掲載されている。3面には二人のインタビューと、専門家による戦況分析がのっていた。3人の専門家は、全員、黒宮有利をうたっていた。バトルファック歴が3ヶ月しかない純菜の経験のなさは致命的に不利だと予測している。俺は新聞紙をまるめてゴミ箱に捨てた。

俺は純菜を迎えに行き、そのまま試合会場に入った。純菜はどこまでもいつもの純菜だった。緊張とか気負いとかそういうものは一切なかった。それが妙に頼もしく感

じられた。

「体調はどうだ、純菜」

会場の控え室。

そこで制服を脱ぎ、簡単な上着を着用した純菜にむかって問いかけた。彼女の競技水着は昨日、俺がプレゼントしたフリフリのついたものだった。その水着をはちきらせんばかりに隆起させる爆乳は、いつ見ても驚異的なものだった。

「絶好調だよ。この水着もしっくりくるし」
「そうか。とにかくがんばれ。でも、無理はするなよ」

「うん。ありがとう、健ちゃん」

ニッコリと笑った純菜。ほがらかな空気が流れようとした時、そいつがドアを乱暴に開けて入ってきた。

「よお。元気か？」

黒宮だった。

いつもの人の気持ちを暗くさせる下品な笑顔を浮かべている。背後から、なぜか俺の3回戦の相手だった麗美も姿を現した。

「黒宮。試合前になんの用だ。お前にはお前らの控え室があるだろうが」

「ブハハっ。なんだよつれないな。同じ中学校のよしみじゃねえか。まあ、俺もこいつの情報調べて、同中出身だったって分かったんだけどな」

黒宮が純菜をジロジロと見つめて笑った。その下品な視線が純菜の爆乳を視姦している。

「まあ、中学のころはただの地味子だったっていうのに、よくもまあこれだけ育ったも

んだ。俺に食べられて犯されるために、よくこれだけ成長してくれたもんだよ」

「黒宮、お前な」

「一つ提案があつてここに来たんだ。まあ聞けよ」

黒宮が俺の言葉を制止して続けた。

「今日の試合、時間無制限のデスマッチにしようぜ」

「な、何言つて」

「だから、時間制限なしで、最初に射精するかイッたほうが負けのルールに変更しようって言ってるんだ。そのほうが燃えるだろう？」

まあ、簡単にはイかせてやらないけどな。

シッシッシと不気味に笑った黒宮が純菜を視姦する。その狙いは明らかだった。時

間をかけて純菜を犯し、いく寸前で寸止めを繰り返して、その人格を壊す。

それが黒宮の狙いなのだろう。これまでの試合内容からして、黒宮の性癖は把握していた。完全なサディスト。女を物として扱い、イき狂わせて屈服させることに生き甲斐を感じる男だ。

そんな提案を受ける必要なんてない。黒宮の有利なようにルールを変更する必要はないのだ。俺は断るために口を開こうとした。その時、純菜が、

「いいよ。その条件でやろう」

「じゅ、純菜!？」

俺は驚きのあまり純菜に振り向いた。

そこには、意志の強さを感じさせる瞳で

黒宮を睨む純菜の姿があった。

「決まりだな」

黒宮がニヤリと笑った。

「そうそう。俺のセコンドはこいつだ。健二を失神KOしたBL学園の期待のホープってやつだな。まあ、俺が鍛えてやったからこそ成長したんだが」

そう言って黒宮が麗美の巨乳をわし掴みにして、もみしだいた。「んっ」と声をもらった麗美は、しかし抵抗するそぶりを一切見せなかった。あのプライドの塊みたいな麗美がこれだけのことをされて黙ったままというのが信じられなかった。よく見ると麗美の体が恐怖で震えている。それはまるで調教された奴隷のように見えた。

「夢野。お前もこいつと同じにしてやるよ」

黒宮が麗美の巨乳を好き勝手にしながら

言った。

「調教して、俺に逆らえないように躡てやる。その胸だけは見事なもんだからな。俺のパイズリ練習機として使ってやるから、ありがたく思えよ？」

「ブハハと笑い声を残して黒宮が去っていった。」

麗美が最後にこちらにペコリと頭を下げてから、黒宮の後に続いた。控え室には、闘志満々の純菜と、右往左往する俺だけが残された。

こうして、決勝戦のルールが変更になった。時間無制限で最初に射精するかいったほうの負け。対戦相手同士が同意すれば直前のルール変更も許されているとはいえ、決勝戦当日にルールが変更になるなんて聞

いたこともない。

試合は始まる前から荒れに荒れることになった。

＊

試合開始時刻。

入場した純菜を待っていたのは観客たちの熱狂的な歓声だった。

超満員の第3武道館。ライブ会場にもなるほどの大きな武道館の席は全て埋まり、立ち見ですら入場制限がかかるほどになっていた。

純菜のファンも目立つが、それよりも多かったのは男性ファンだった。それは黒宮のファンもいたが、それ以上に中年の男た

ちの姿が目立った。彼らは黒宮と同じように下品な笑いを浮かべてスマートフォンを純菜に向けていた。彼らの目的はただ一つ、純菜が犯されることだろう。あの強い純菜が黒宮に犯されて泣き叫ぶ姿を見たい。そんな歪んだ欲望で、会場に変な熱気が生まれていた。

「それではこれより決勝戦を開始しますッ！」
開会式も担当した燕尾服姿の男が言った。
決勝戦は実況と解説もつき、テレビ中継されることになっていた。解説役はあの西園寺拓也選手だ。

「それでは、選手はリングにあがってください」
その声に、純菜が上着を脱ぎ、俺に渡してきた。

笑顔。俺は「がんばれ」と送り出すことしかできなかった。

「決勝戦は特別ルール。時間無制限、絶頂サドンデス方式で開催されます。両選手、よろしいですね」

審判員の声に、リング上の純菜と黒宮が頷いた。

「それでは、試合開始っ」
はじまった。

＊

最初に動いたのは黒宮だった。

というか、最初から黒宮は綿密に計画を練っていたのだろう。それは迷いのない動きだった。

「おらっ」

黒宮の手が純菜の爆乳に伸びる。

純菜の試合を研究したら、誰もが悪手と見る初手。しかし、黒宮の狙いはおっぱいを責めることではなく、それを支える競技水着にあった。

「へへっ。いただき！」

黒宮が純菜の競技水着を手にとると、それを乱暴にはぎとった。

力任せの一撃。競技水着の背中のアタックメントからブチっという音が響き、強引に純菜の競技水着が奪われる。

身を包んでいた水着をとられ、純菜の上半身は全裸になった。「キャッ」と可愛らしい声をもらし、純菜が自分の手で乳首を覆って、その体を黒宮から隠した。

「へっ。やっぱりな。お前みたいな素人バトルファッカーなら、隠すと思ってたぜ」

黒宮がへらへら笑った。

盗んだ競技水着をペロペロと舐め始める。黒宮の涎が純白の水着を濡らした。そのまま、黒宮がその競技水着をハチマキのように自分の額にくくりつけてしまった。

「へへっ。ふっう、競技水着をはぎとられたら全裸で戦うもんだ。そんなふうにして乳首隠してたら、満身に防御もできねえだろうが」

こんなふうになっ。

黒宮が真正面から純菜の下半身に手を差し入れた。秘所をパンツの上から手で上げる。純菜はなすがままだった。手で払いのけるためには乳房から手を離さなければな

らず、そうしたら観客の前に自分のおっぱいをさらけ出すことになる。それに純菜は耐えられそうになかった。

「ほらよっ。気持ちいかよ素人さん。おらおら、たっぷり可愛がってやるよ」

黒宮が愛撫を続ける。

その動きは的確で、男の俺からしてもいやらしいものだった。あの乱暴な男がここまですごい動きができるというのが驚きだった。純菜は防戦一方で、身をよじらせることしかできない。

「おおっと、純菜選手、防戦一方だああっ！
このまま早くも試合は決まってしまうのかあッ」

「純菜選手の経験の少なさが出てしまいましたね。このままいくと、秒殺もありえま

す」

実況員と西園寺選手が言う。

会場も純菜の敗北を期待した男どもが野太い声をあげ始めた。「とっとと犯される女」「どんな声で鳴くのか聞かせろよオラッ」などとひどい野次が飛んでいた。

俺はそんな光景をただ見ているしかなかった。黒宮の手がついに純菜のパンツを脱がしにかかった。完全な全裸にしてからゆっくりと調理しようという魂胆なのだろう。黒宮の顔には勝利を確信した下品な笑顔があった。

「純菜、がんばれッ！」
俺にできることは応援することだけだった。

彼女に負けて欲しくなかった。こんなと

ここで、黒宮みたいな卑劣な奴に屈服して欲しくなんてなかった。さらにいえば、こんなにも多くの観客に純菜の生まれたままの姿を見られたくなかったのだ。

「お前ならやれるぞ！ がんばれッ！」

無責任に応援する。

そんな俺の言葉に、純菜が力強くうなづくのが見えた。そして、覚悟を決めた。

純菜が乳房から手を離れた。そのまま黒宮の手をつかんで、パンツを脱がそうとしていた動きを止めさせる。

ハッと驚いた表情を浮かべた黒宮が見たのは、その見事なおっぱいを公衆の面前にさらす純菜の姿だった。

彼女の生乳を目の前にした観客席の男性客が、全員、シーンと押し黙った。野次を

発することもできず、ただただ純菜の生乳を凝視してしまう。それほどまでに破壊力がある爆乳だった。生きとし生ける者全てにとつての母。生命力に満ちあふれた存在。重力を無視して威圧的に鎮座するそのふくらみと、きれいなピンク色の乳首に、女性ファンが恍惚とした声を漏らし、男性客たちは前かがみになって強制勃起させられていた。

「お、お前、なんだソレ」

黒宮もまた純菜のおっぱいにくぎ付けになった男の一人だった。

その至近距離から生乳を見せられ、反応しない男などいるはずがなかった。呆然自失の一瞬。そのチャンスを逃さずに、純菜が黒宮を真正面から抱きしめた。

「ひゃあああっ！」

その威力は驚嘆の一言だった。

あれだけ有利に試合を進めていた黒宮の膝が、いきなり地面についた。ガクンと落ちた黒宮の体。その原因は、黒宮の体に押しつけられている純菜の生乳だった。

「く、くそ、あ、動かすなああっ！」

純菜は動いていない。

ずり落ちていくのは黒宮の体だ。

膝をつき、体を地面に落ちていくのにあわせて、純菜の爆乳が黒宮の体に擦りつけられていく。純菜は競技水着を着用していない。つまり、その小ぶりなピンク色の乳首が直接黒宮の体に押しつけられているということだった。それが擦りつけられたらどうなるのか、それは今の黒宮の顔を見れば

ばすぐに分かった。

「ひいひいッ！　なんだコレえええッ！

なんだよこれええ！」

泣き叫んでいる黒宮。そこには余裕のひとかけらも見られなかった。

ついに黒宮は膝立ちすらできなくなった。

巨大な乳房に屈服するようにして、黒宮が地面に膝をつく。男の胴体を潰していた爆乳が、さらに黒宮を飲み込んでいく。その先には怯える黒宮の顔面があった。

「い、いやだ。だめだそれは、だめだめだめッ！」

顔を左右に振ってイヤイヤをする男の体が、どんどんとずり落ちていく。

それと共に純菜の爆乳が迫っていく、黒宮が半狂乱になった。しかし、男の体に力

は入らない。爆乳が迫り、そのまま生乳が黒宮の顔を飲み込んだ。

「むっふうううッ！」

必殺のパフパフ。それが極まった瞬間だった。

男の頭部をがっちりと抱え込んでロックし、さらに黒宮の顔を爆乳の中に埋もれさせる純菜。グリグリと男の顔を動かす。ベストポジションを見つけて完全に固定化することに成功した。

仁王立ちの純菜と、地面にへたり込みながらその顔を女性の乳房に埋もれさせている黒宮。もはや勝負はついたも同然だった。

「黒宮くん、あなた、何か勘違いしてないですか？」

優しく純菜が言った。

「競技水着っていうのは、弱点を隠すためにあるんじゃないんですよ？ 男の子が逆らうことのできない強すぎて魅力的なおっぱいの攻撃力を低下させるためにあるんです」

生乳の中に拘束した男に向かって純菜が話しかける。

「それなのに、自分からそのハンデをなくしちゃってどうするつもりだったんですか？ 競技水着をつけていない私の生乳に、男の子が勝てるわけじゃないですか」

グリグリと、男の顔をさらに爆乳に押し込めて遊ぶ純菜。それはまるで、物わかりの悪い生徒に女の子の武器を教え込もうとしているように見えた。

「このまま息を吸わせて、私のフェロモンで脳味噌溶かせば楽ですけど、それだと面白くないですもんね。ほら、少しだけ解放してあげます」

純菜がその深い谷間の中から、黒宮の顔面の半分を出してやった。

目元と黒宮の口の半分が、その生乳の中からひょっこりと顔を出した。

「ありやいや、もうだいぶ溶けてしまってますね。瞳がトロンとしちゃってますよ?」

純菜の言葉どおり黒宮はすでに正気ではなかった。

瞳は潤みっぱなしで、全身が弛緩している。

そんな負け犬をおっぱいで拘束しながら、純菜の視線が容赦なく黒宮を見下ろしてい

た。

「パフパフだけでここまで溶かされてしまったんだから、もう分かりましたよね。わたしのおっぱいには勝てないって、ちゃんと理解しましたか?」

「うるへえ。勝負はこれからひゃ。誰が前のおっぱいなんかに負けるか」

「ふふっ。それともまわってないのに勇ましいですねえ。じゃあ、これなんかどうかな」

純菜が必殺のパフパフ体勢をといた。

そのまま彼女は黒宮の体に自分の爆乳をすり付けながら、黒宮の背後をとった。

男を四つん這いにして、その背中を生乳で潰す。乳首が黒宮の背中で潰れ、「ひいいいッ」と男が悲鳴をもらした。

「ほら、背中におっぱい押しつけちゃいましたよ」

「ひいいッ。だめえええッ」

「ねえ黒宮くん。分かっているとと思うけど、わたしはあなたの背中におっぱい押しつけているだけだからね。それなのに、そんなに悶絶しちゃって恥ずかしくないのかな」

グリグリと、純菜が爆乳を男の背中に擦り付けた。男が弓なりに痙攣した。

「アハハ。そんなんじや、すぐに負けちゃうよ？ ほら、がんばって。ロープまであと少しだよ？ そこまで這い蹲っていけば、まだ勝てるかもしれない」

男の耳元で囁く純菜。

しかし、そのとおりであった。あと2メートルに迫ったロープをつかめば仕切り直し

になる。立ち上がることが許され、純菜の生乳という驚異から離れることができるのだ。黒宮に選択肢はなかった。

「ぐ、ぐぞおおッ」

雄叫びをあげながら、ハイハイを始める黒宮。純菜を背中に乗せて、よろよろとしながらハイハイを続ける。あと1メートル……50センチ。黒宮の片手がロープに伸びる。プルプルと震える手。必死の形相。それを純菜があざ笑った。

「潰れる」

ぎゅうううううッ！

「ひいいいいいッ！」

純菜が男を力強く抱きしめ、終わった。

背中から浸食した生乳の感触が男の存在を埋め尽くし、そのまま地面に倒れ込んで、

うつ伏せのまま痙攣してしまふ。ロープにたどりつくこともできずに、おっぱいに完全敗北してしまった男がそこにはいた。

「あらら、情けないね」

純菜がニンマリとした笑顔で言った。

「ほら、その情けない顔も見せてよ」

純菜が黒宮をころりと転がし、仰向けの格好にした。

無防備にさらされた男の腹部にドスンと馬乗りになり、その桃尻でグリグリと潰す。マウントポジション。純菜は堂々とおっぱいをさらしながら、黒宮の顔面を見下ろした。

「あゝあ、まだおっぱいだけなのに、もう泣いちゃってる。お顔も溶ろけちゃって、情けないですね」

その言葉のとおり、黒宮はもう壊れかけていた。

あの強気な様子は残っておらず、ヒクヒクと喉をならして泣いている。しかも、頭上には純菜の生乳が鎮座していた。その規格外の大きさが威圧的に迫り、ピンク色の乳首が見る者の頭をバカにさせてしまう。その芸術的なまでの暴力性に、黒宮は「ひい」と悲鳴をもらした。

「ふふっ、おっぱいのこと怖がってるね。この試合終わったころには、女の子のおっぱいが怖くて怖くて仕方ないようになってるから楽しみにしててね」

黒宮に馬乗りになった純菜が、生乳をぐんにやりと潰して男に見せつけた。「ひいひい」と恐怖で暴れる男に満足したのか、

くすりと笑った純菜が、黒宮の頭にまきついていた競技水着を手にとった。

「これは返してもらうね。大事なものだから。それに、生乳のままじゃ黒宮くんはすぐに壊れちゃうから、ちゃんとハンデをあげなくちゃね」

ふふっと笑い、純菜が競技水着を再び装着した。

仰向けの男の上で馬乗りになり、はずれたブラジャーを付け直すかのようにして、競技水着を装着する純菜。背中のアタッチメントも壊れていなかったらしく、カチリと音がして、再びその決戦兵器に拘束帯がつけられた。

「じゃ、続きしよっか」

純菜が妖艶に笑っている。

「榎本さんから聞いたけど、君の弱点って乳首なんだったって？」

「な、なに言ってる」

「1年の頃、3年生の先輩にさんざん開発されてメスイキしてたんでしょ？ 態度が生意気だなんだって言われてさ。まあ、最終的に君はその先輩に復讐して、その人を雌奴隷みたいに扱ってたらしいけど、開発されちゃった乳首は元に戻らないよね」

「ち、違う。俺は、」

そこで純菜が黒宮の乳首をつまみあげた。片手間程度の動き。それだけで、男の体がビクンと痙攣した。

「あはは、摘まれただけで感じちゃったね」
痴態をさらした男を見下ろしながら、純菜が笑う。

「フェアじゃないからやめておいてあげようと思ったんだけど、もう勝負もついたら、いいよね。君の乳首、犯してあげるよ」

「ふ、ふざけんな。勝負はこれかアヒイインッ！」

「勝負はこれかアヒイインッて、何を言うとしてるの？ ちゃんと日本語喋ろうね」

ほれほれと、純菜が乳首をいじめる。それだけで男が痙攣した。

「ふふっ。わたし、乳首責めるのけっこう上手なんだよね。男子部員でたっぷり練習したからね。乳首だけで永遠にメスイキさせて男を壊すことだってできるよ？」

君もそうしてあげる。

そう言って、純菜が黒宮の眼前で両手の指を蠢かして見せた。今からこの手でお前

の乳首を犯すという意思表示。その恐ろしい指を操るのは笑顔で男を見下ろす純菜で、黒宮は恐怖のあまり悲鳴をもらした。

「それじゃあ、開始っ」

「ヒイイインッ！」

純菜の指が男の乳首に襲いかかった。

人差し指だけでカリカリとひつかいただけで、男が弓ぞりになって痙攣した。微妙に爪の角度も強弱も調整して、男の感覚が最高になる動かし方を続けていく純菜。彼女は卓越した乳首責めを笑顔で行っていた。マウントポジションをとった状態で、サキュバスのように笑った少女が、同級生の男子の乳首を虐め抜く。限界はすぐに訪れた。

「っぎゃあああッ！」

男が悲鳴をあげ、大きく痙攣した。

まるでブリッジでもするかのように跳ね上がる体。それをマウントポジションをとっている純菜の臀部が押さえつけて無効化してしまう。

「はいメスイキ一回目。どんどん行くよ」

純菜が笑顔で言っ、さらに乳首責めが続いた。

女郎蜘蛛のような10本の指が同時に襲いかかり乳首をめちゃくちゃにする。親指の腹でもってグリグリと蹂躪する。爪でキリキリと絶妙の力加減でつねり痛みと快感の暴力で乳首を虐めていく。

そのたびに男は悲鳴と喘ぎ声をあげ、メスイキを繰り返していった。白目をむき、口からブクブクと泡をふきながらも射精は許

されない。純菜はただひたすらに乳首だけをいじめ抜き、黒宮をメスイキさせていった。

1時間も経過すると、男の甘い喘ぎ声だけが会場中に響くことになった。

「ねえ、さっきから喘ぎっぱなしだけどいいの？」

純菜が黒宮の耳元で囁いた。

今、彼女は黒宮の背後にまわりこみ、座り込んだ状態のまま男を抱き抱え、その乳首を虐め抜いているのだった。

「あひん……ああん……ああ……」

黒宮は、純菜の爆乳に背中を潰されながら、完全に体の力を脱力させて、なすがままになってしまっていた。その瞳は白目で、トロンとした表情をしており、純菜の指が

与えてくる快感に身も心も預けてしまっている。反抗する気持ちすら溶かされてしまい、今ではすっかり純菜の人形になってしまっていた。

「言っておくけど、これはバトルファックの試合なんだよ？ 乳首だけで30回もメスイキしちゃってさ。そりゃあ、気持ちよすぎるといっても、対戦相手に反抗もしないで乳首の快感によがるだけなんて、情けなさすぎるんじゃないかな」

「ヒイイイン……ああん……ひゃああ……」
「うん。ダメだね。このまま乳首責めだけで2、3時間やってもいいけど、それじゃあ面白くないし。そうだなあ」

純菜が「うーんと」と可愛らしい声と共に何かを考え込んでいる様子だった。

「そうだ。次はアナル責めしてあげる。また同じようにメスイキさせるからね」

笑顔で死刑宣告をする純菜だった。

それに黒宮が反応する。

「い、いやだあああッ！」

必死に純菜から逃れ、四つん這いになって逃げ始める黒宮。

プルプル震えながら、少しでも純菜から遠ざかろうと必死に逃避行を続ける。

それは虫が滑稽にも暴れる様子に似ていて、純菜のファンからの黄色い嘲笑を生む。

しかし、そんな黒宮の必死の逃走は、純菜が黒宮の臀部を抱えこんで拘束することによって終わった。

「はい。残念でした。あっという間につかまっちゃったね」

「ひゃだああッ！ たすけてえッ！ もうメスイキしたくないッ！」

「うん。じゃあアナル舐めるね。大丈夫。絶対に射精はさせないから」

男が悲鳴をあげて許しを乞うが、純菜は笑顔でそれを無視した。

そのまま、男の臀部に顔を近づけ、その長い舌で男の肛門の中に進入した。

「オツッホオオオンンッ」

獣のような悲鳴。

純菜は男の臀部を抱え込んで完全拘束していた。男の弱点であるアナルが純菜の眼前にさらけだされている。それを情け容赦なく、純菜の舌が犯していく。

軟体動物のようなエロい舌が、男の肛門の中を縦横無尽に暴れている。そのテクニッ

クは学生離れしていて、すぐに黒宮はメスイキした。その事実には純菜はさらにニッコリと満足しながら、前立腺を責めていく。その急所の位置を直接舐めることはせず、その周りだけを丹念に舐めあげていく。ときおり、ほんの少しだけ舌先で前立腺を突っつき、片手間で男をメスイキさせ、壊していった。

しかも、純菜の片手がさきほどから黒宮の一物付近で、シコシコとしこる動作をしていた。純菜の手が直接男の一物に触れることは決してない。人差し指と親指で輪っかをつくり、その間で手コキの動作だけを続ける純菜。男のアナルを責めながらのエア―手コキ。その動作の意味は明らかだった。

わたしがその気になったら、いつでも射精させられる。

ほんの少し一物に触れるだけであつという間に強制射精をさせることができる。

その絶望を黒宮に味あわせ続け、屈辱と快感の二重苦で男の理性を粉々にしていく。その屈辱は黒宮だけではなくそのファンや、純菜が犯されることを期待して来場した中年男性たちにも与えられることになった。純菜が男たちを犯していく。



「ひゃぎゃあああッ！ ゆるしてくだひゃあいい！ 純菜さまああッ！ ゆるひてえええッ！」

アナル責めが開始されてから30分。

それだけで黒宮は墜ちた。

純菜のことを様付けで呼び、プライドも何もない命乞いを繰り返す。それだけ純菜の前立腺責めは圧倒的だった。黒宮ほどの実力者でなかったら、とうに命がないほどの熾烈な責め。しかし、純菜はあくまでも残酷だった。

「ひっぎいいいいッ！」

純菜の舌がさらに深く黒宮の肛門をえぐる。

それはまるで、まだ人間の言葉を喋る余裕があったのかとがめるような動きだっ

た。さらなる快感と苦痛で拷問されながら、黒宮は白目をむき、もはや命乞いすらできずに獣のような悲鳴をあげるだけの家畜になってしまった。

＊

さらに30分が経過した。

ようやくアナル責めをやめた純菜は、ジュポンと音をたてて舌を引き抜いた。

その衝撃だけで軽くメスイキした男の尻をぺちんと1回叩いてから、純菜が悠然と立ち上がった。

彼女は仁王立ちで黒宮を見下ろした。もはや悲鳴のあげすぎで声も涸れ、うつ伏せのままビクビク痙攣している男にむかって

命令する。

「正座」

その冷酷な声色に意識が朦朧としていた黒宮が震えた。

「聞こえなかったのかな？ って、もうお前には敬語いらないよね。マゾ家畜になった奴を敬っても仕方ないや」

ふふっと純菜が妖艶に笑った。

「ほら、早く正座しろよ。なんだったら、もう1回アナル責めしてやろうか」

不機嫌そうな声に半狂乱になりながら男がそのとおりにした。

同級生の女の子の足下で正座をして、ビクビクと震えている。

「ねえ、次はどうされたい？」

残酷な天使がニンマリと笑って言った。

「次はおっぱいの中で匂い責めしてあげよつか。たぶん、今のお前ならわたしのフェロモン嗅いだけでメスイキするよ。それとも、ディープキスでメロメロにしようかな。お前のアナルをさんざん可愛がってあげたこの舌で、今後はお前の口内をめちゃくちゃに犯してあげる」

どうされたい？

そう尋ねられた男はもはやかつての黒宮ではなかった。彼はビクビクと震えながら、なんとか目の前の女神の慈悲にすがりつくしかなかった。

「……許してください」

「ん？ なに？」

「もう、俺の負けでいいです。だから射精させてください。お願いします」

負け犬の声だった。

反抗心を全て刈り取られた男の声。従順な家畜の声だった。もはや黒宮は、純菜に逆らえない体に変えられてしまったのだ。た。

「ねえ、なにそれ」

そんな黒宮を前にしても純菜はどこまでも残酷だった。

「ねえ、人に物を頼むときに、そんな格好でいいのかな？」

「え？」

「言われないと分からない？ 土下座しろって言ってるの」

黒宮が「うっ」と呻く。

このリングの上で。武道館いっぱいのお客様の前で。テレビ中継だっでされているの

に。同級生の前で土下座をしなければならぬ屈辱。それが男に一瞬の躊躇をさせ、純菜の怒りをかかった。

「おい。お前、まだ自分の立場が分かっているの？」

ダンとリングを踏んで威嚇する。それだけで黒宮の背中は震え上がった。

「わたしはこのままでいいんだよ？ まだぜんぜん疲れてないし。このまま5時間だろうが10時間だろうが、お前のことメスイキさせ続けてもそれでいいの。そういうルールだもんね。お前が射精しない限りこの試合はいつまでも終わらない。お前が提案してきたルールだもんね」

「許して……ごめんなさい……ずびばぜんでちた……」

「泣いてないでなんとか言ったらどうなの？

ほら、早く」

ダンと踏みならされる。

それで黒宮の心は折れた。

彼は崩れるようにして純菜の足下で土下座した。同級生の女の子の足下に頭を下げて小さな声で命乞いを始める。

「お願いします純菜様。射精させてください。お願いします」

射精させてくれと土下座して頼む男。

バトルファックの試合ではありえない光景に観客席からは爆笑があがる。その黄色い声と対照的なのは中年男性たちで、今ではもうお通夜みたいにシーンとして、彼らも下をむいてうなだれてしまっていた。

「頭が高いんだけど」

純菜が不機嫌そうに言って、そのまま黒宮の後頭部にヒップドロップをかました。

土下座した男の頭がさらに下げられ、顔を地面に押しつけられる形で潰された。純菜はムチムチ巨尻で男の後頭部に座り、強制的に頭を下げさせてしまったのだ。

「ほら、命乞いしろ」

純菜が土下座した男の後頭部に騎乗したまま言った。

「少しでも小さな声だったら続きをする。この体勢のままでお前の無防備なアナルを徹底的に犯す。壊れても続ける。失神しても続ける。それが嫌なら早くしろ」

そう言われて抵抗できる男などいるはずがなかった。黒宮が絶叫した。

「射精させてくださいッ！ お願いします純

「菜様ッ！　どうか射精させてくださいッ！」
「わかってるよね？　射精したらお前の負けなんだよ？」

「それでいいですッ！　俺の負けですッ！
純菜様には勝てません！　だからどうか射精させてくださいッ！」

恥も外聞もなく、ひたすら射精を懇願する男。

自分の巨尻の下で泣き喚く男の姿を見るにいたって、ようやく純菜が満足したようだった。彼女がニンマリと笑った。

「そうか。そんなに射精したいのか」

「はいいいッ！　射精させてええッ！」
「よし。それなら射精させてやる」

純菜が再び立ち上がった。

仁王立ちで男を見下ろす。臀部で押し潰さ

れていないのに黒宮は土下座をやめなかった。ブルブル震えながら純菜の足下で土下座を続けたままだ。そんな家畜を前にして、純菜が笑って言った。

「射精を許可してやるから、ここでオナニーしろ。自分でオナニーして、それで射精しろ」

「え？」

「ほら、はやく。もたもたしてると、こうだよ？」

純菜が両手でおっぱいを挟み込んだ。

ぐんにやりと潰れたおっぱいに、黒宮が「ひいい」と悲鳴をもらして、自分の一物をシコリ始めた。

「うわっ、本当に始めたよコイツ」

純菜が嘲笑する。

それを受け止め、屈辱でどうにかなってしまいうりになりながら、黒宮が自分の一物をシコリ続けた。こんな公衆の面前で、バトルファックの試合で、オナニーをさせられる屈辱は想像を絶するものがあるだろう。

「ほら、みんなにも見てもらおうね」

純菜が背後から黒宮を羽交い締めにした。脇の下に腕を通し、そのまま立ち上がってしまった。黒宮がそれでもオナニーを続ける。

「よし。そのままオナニーしろ。みんなに見てもらおうからな」

純菜が背後から男を羽交い締めにしながらいニニングランを始めた。

リング四方に黒宮を展示して、そのオナ

ニーを見せつける。観客席からは爆笑がさがり「情けなしい」「ねえ見て縮こまつてるよ。あんがいちっちゃいんだね」「あれだけ威張ってたのにね」と女性たちの歓声があがる。

「ほら、セコンドさんにも見てもらおうね」

おどけて言いながら純菜がBL学園のセコンド役の目の前に黒宮を展示した。

そこにはさきほどから驚愕しながら黒宮の痴態を凝視してる麗美がいた。

「怖い先輩もこのとおり。徹底的に犯したら、男の子なんてみんな怖くないんだよ？ あなたも、この大会が終わったら、コイツのことめちゃうくちやに犯してあげなよ」
ふふっと笑って麗美の前から立ち去る純

菜。

彼女は最後の仕上げをすることにしたらしい。

純菜が男を羽交い締めにしながら実況席の目の前まで移動した。

そこには西園寺選手がいた。厳しい眼で純菜と黒宮を見据えるプロバトルファッカー。

その目の前で、純菜が黒宮の耳元で囁いた。「ほら、気合い入れてシコレ」

「は、はいいい純菜さまあッ！」

「よし。じゃあ、カウントダウンしてやる」

ニンマリと笑った純菜が西園寺選手を見下ろした。

そのまま、純菜が、男を背後から羽交い締めにしながらカウントダウンを始める。

10、9、8、7。会場中の女性たちがそ

れに追従した。6、5、4、3。大合唱が

会場中を包み込む。女性による一体感が男性の劣等感を刺激した。2、1、ゼロ！

「イケ」

「ひいいいんんッ！」

どびゅどびゅどびゅううううッ！

さんざんに我慢されていた男の一物から白い液体が噴出した。それは天高く舞い、どこまでも飛んでいった。男の射精はやま

ず、いつまでも続いた。白目をむき、口からはブクブクと泡をふきながら男が壊されていく。とうに失神してしまった男は、残った機能として射精を続けた。それを純菜が背後から見守っていた。その顔にはニンマリとした笑顔があった。

「勝者、壊し屋の純菜っ！」

審判員が高らかに宣言し、優勝者が決まった。照明がスポットライトのように純菜を美しく見せる。会場内の歓声はいつまでも鳴り止まなかった。

第3章 家畜化

一

黒宮相手にセンチシヨナルな勝利をおさめた純菜は、そのまま全国大会も優勝した。

全国の強豪たちを全く寄せ付けなかった。ほとんどが秒殺KO勝利で、男たちは全身を溶かされるか、盛大な射精をして再起不能に陥っていった。

純菜が苦戦することは一度もなく、まったくの余裕でもって全国優勝を勝ち取ってしまったのだ。その勝因の一つは黒宮との戦いにあった。

決勝戦の相手をまるで子供扱いして散々

にいたぶった映像はまたたく間に全国に拡散した。バトルファックをやっている人間であの映像を見なかった奴はいなかっただろう。その中で、童顔の少女が、経験豊富な娼婦のような性技でもって、男をいたぶっていた。しかも、どんなサディストよりも残酷な方法で男をメスイキ地獄に陥れ、最後には土下座をさせてオナニーをさせるという衝撃的な結末まで待っている。

男を再起不能にしてしまう実力。

純菜の強さに震え上がった全国の強豪たちは、純菜を前にしただけで恐怖した。中には試合を棄権してしまう選手もいたほどだ。勇気あるバトルファッカーたちはリングに上がり、純菜に絞りとられた。

壊し屋の異名は全国大会でも健在で、全

10試合のうちの7試合で、相手選手は壊れ、最終的には選手生命を奪われることになった。特に乱暴なこととはしておらず、純菜が披露した技はパフパフとパイズリ（悪魔殺しの大鉄槌）だけなのに、対戦相手は重度のおっぱいドラランカーとなり、中にはインポになる奴もいて、屍の山を築きあげることになった。

タオルが投げ入れられるタイミングが早くなったが、それよりも前に純菜は男たちを壊してしまった。何人かはPTSDを発症して、女性を見ると発狂してしまうようになったらしい。特に、おっぱいの大きな女性を前にしただけで気絶してしまうようで、その後遺症はどこまでも深刻なものだった。

「ありがとうございます。優勝できて、本当にうれしいです。わたし、もっともっと強くなるので、これからも応援よろしくお願いします」

満面の笑みで優勝スピーチをする純菜。リングの上でスポーツマンが嬉しそうに笑っている様子はどこまでも爽やかだった。しかし、その足下では純菜のパイズリをくらって壊され、痙攣と射精が止まらない男が生死の境をさまよっている。医療班が深刻な顔をして応急措置を行っている横で、童顔少女がその爆乳に大量の精液をこべりつかせながら感謝の気持ちを表明しているのはどこまでも印象的だった。

純菜の名前は全国に轟き、世界でもその名が驚きをもって迎え入れられることになっ

た。純菜は一躍、時の人になってしまった。

二

「それじゃあ、乱取り15分間。開始」

競技場で俺は合図をしてパンと手を叩いた。

競技場のリング脇に所狭しに敷いたマットの上で、大勢の男女が模擬試合を開始した。その活気は大会前には想像すらできなかったほどだ。

「ハハっ、盛況だね」

俺が部員たちを見回っていると、競技場に入ってきた岸田先輩が声をかけてきた。

「岸田部長。お久しぶりです」

「おいおい、今の部長は君だろう」

「そうでしたね。なかなか慣れなくて」

大会終了後、3年生は引退し、俺は部長に任命された。

少し意外な気がした。実力的にも話題的にも純菜が部長になるとばかり思っていたからだ。岸田先輩は俺を部長に、純菜を副部長にそれぞれ指名していた。これからは二人で協力してバトルファック部を強くしていった欲しいと激を入れられたのがつい先週のことだった。

「それにしても、部員も増えたね」

「そうですね。純菜効果です」

大会後、バトルファック部には入部希望者が殺到することになった。

2年生もそれなりにいたが、特に多かったのが1年生だ。今では50人を越える大

所帯になっていた。しかも、入部してきた人間は俺たちの学校の生徒だけではなかった。

「確か、B.L.学園から転校生がきたんだろ？」
「ええ。麗美ですね。ほら、あそこにいる」

競技場の片隅で長身のスタイル抜群な女性が男子部員をヒイヒイ言わせていた。

地区予選終了後、すぐに転校の手続きをしたらしい。頭もよかったらしく、この進学校のテストもなんとなくクリアしたらしかった。

「しかし、なんでまたこの時期に？」

「純菜を追いかけてきたみたいですよ。純菜と一緒にバトルファックがしたいって。あのポーカーフェイスの麗美が熱く語ってましたから」

バトルファック部への入部希望を俺に提出してきたときも、まるで入部を拒否されたら差し違えるような雰囲気だったことを覚えていいる。実力者は大歓迎だったので、入部は許可した。あっさりとは入部が許可されたことが意外だったのか麗美のキョトンとした顔が印象的だった。

「セーソパイ、こいつ気絶したから後はヨロっ」

岸田先輩と話しをしていると、姫華が俺に男子部員を放り投げてきた。俺は白目をむいて気絶している男子部員を慌てて受け取った。

「おい姫華。お前、また無茶したんだろう」
「そんなことしてないッス。ウチはただパイズリでそいつの精液搾り取っただけッス

よ」

「お前なあ。こいつは2年生でお前の先輩をつつたって、バトルファックは素人なんだから、もう少し優しくだな」

「そんなの関係ないツス。つか、そんなやりただけの猿にはこの部活に入って欲しくないツスね。ウチのおっぱいずっとガン見してきて、気持ち悪いツス」

そう言って、姫華が自分の胸をぐんにやりと潰した。

競技水着からあふれた姫華のおっぱいの大きさがそれだけで強調される。相変わらずデカイ胸だった。純菜ほどではないが、麗美よりもその大きさは際立っていた。そんな大きなおっぱいには大量の白い液体がこべりついていて、姫華の褐色の肌にあっ

て妙にエロかった。

「ほら、タオル。ふけよ」

俺がタオルを渡すと、「ありがとっス」と猫のように笑いながら姫華が立ち去って行った。

おそらくいつものように、あいつの模擬試合を見学に行くのだろう。そのために、姫華は男を秒殺失神させたのだと思うと、ヤレヤレと頭を抱えるしかなかった。

「確か、あれは姫華くんだったね。彼女も入部を？」

「ええ。入学した当初はあれだけ誘ってもダメだったのに、大会後はころっと入部ですよ。スクールもやめて、部活に専念してるみたいです」

「それも純菜くん効果か。すさまじいね。そ

これにしても、おっぱいドラんカーの俺ではこの場は目に毒だな」

岸田先輩が競技場を見渡して言った。

岸田先輩の視線は女子部員たちに向けられていた。

1年生中心の顔ぶれ。総勢12名の特徴は皆、胸がデカいということだった。

純菜は別格としても、姫華、麗美を筆頭にして、女子部員たちの胸は平均以上にデカかった。それがこうして勢ぞろいしているところを見ると、圧巻の一言だ。

「純菜の試合を見て、胸が大きいことがコンプレックスだった子たちが、勇気をもたらしたって言ってましたね。それで、自分もバトルファックをやってみたいって」

「そうか。姫華さんと麗美くん以外は全員

素人とのことだが、これだけの素質たちだ。純菜くんの指導もあれば、すぐに実力者になるだろう」

遠い目をした岸田先輩が言った。

おそらく寂しさ。それを感じているのだろう。引退した身であることを残念に思っているのかもしれない。

「それはそうと、健二。俺が言ったことは覚えてるね？」

岸田先輩が唐突に言った。

「覚えてますよ。部長に任命された時のことですよね」

「そうだ。それは絶対に守らないといけないぞ」

「分かってます」

「今は分かってるかもしれないが、君も男

だ。なんの役にも立たないプライドが邪魔をして、いつか忘れてしまいかもしれない」
「大丈夫ですって。純菜とは敵対しない。それだけは絶対に守ります」

それが部長が俺に言い聞かせたことだった。

男女をまとめるにあたって俺が部長になることが一番であると判断したが、それには純菜と敵対しないということが大前提にあると岸田先輩は真剣な顔をして言った。彼女と敵対関係になればすぐに部活は崩壊する。絶対に純菜に逆らうな。そう岸田部長は何度も俺に言い含めてきたのだった。
「まあ、覚えていてくれればいいんだ。それが君と……純菜くんのためでもある」
意味深に言っただけで岸田部長はつぶやいた。

今でもこうして部活に顔を出してくれるのはとてもありがたいことだった。ほかの3年生たちはどういうわけか部活に全く顔を出さなくなってしまうていた。ほかの3人はともかく、藤山副部長が姿を見せないことは意外だった。あの人は純菜の奴隷みたいになっていたから、引退後も部活に入り浸ると思っていたんだけど。
そんなことを考えていると、麗美が俺に近づいてきた。

「部長。この人もお願いします」

そう言っただけで、麗美が気絶した男を渡してきた。

男の様子は散々なものだった。白目をむきビクンビクンと痙攣している。どうやら麗美はその長身を活かして脚コキで男を失

神K Oしてしまつたらしかつた。彼女の脚には白い液体がこべりついている。

「麗美、お前も見学か？」

「……はい」

「そうか。まあ、タオルで体拭いてからい
けよ」

俺が手渡したタオルを受け取ると、麗美は
ペコリとお辞儀をして競技場へ戻つてい
た。

男を失神K Oしたというのに、その様子は
クールビューティーといった感じで、特
に疲れた様子も喜んだ様子もなかった。

「どれ、その二人は俺が医務室に運んでお
いてやろう」

岸田先輩が俺から男子部員二人を受け取
つて言った。

「お前は、あつちの様子を見てきたほうが
いいんじゃないか？ 彼女の相手は、この
二人とは比べものにならないヤられ方だと
思うぞ」

「そうですね。では、申し訳ないですが、そ
の二人を頼みます」

「うむ。俺も、彼女がやりすぎないように
注意するべきなんだろうが、彼女を前にす
るとどうしようもなくてね。ほら、あの獣
みたいな悲鳴が聞こえるだけで、今も足が
震えるんだ。体が覚えているんだろうな」
そう言い残して岸田先輩が男子部員二人
をかついで医務室にむかつた。

俺は先輩の後ろ姿に頭を下げてから、獣
じみた悲鳴があがりっぱなしの一角に急い
だ。

＊

「ほら、見ててね。こうやって、挟む力を調整するのが大事なんだ」

男の断末魔が響く場所。

ここでは、ニッコリと笑った純菜が、佐藤のことをパイズリしていた。その周りを姫華と麗美、そして試合が終了した女子部員たちが囲んでいる。

「最初はあまり強すぎないように。それでいて、刺激がなくならないように、ぴっちりおっぱいの肉でち●ぽを包み込むの。そうすればほら、男の子はみんな悲鳴をあげちゃう」

「ヒイイインッ！ おっほおんんッ！」

「ね、簡単でしょ。男の子は、おっぱいの大きな女の子には絶対に勝てないんだよ。みんなも自信をもってね」

膝上パイズリの格好。

大きなおっぱいが佐藤の一物を完全に隠し、その全てを爆乳の谷間の中に包み込んでしまっていた。乳房はあがっていない。ただ挟み込んだだけ。それなのに、純菜のおっぱいは男の理性を奪い、悲鳴をもらすだけの獣に変えてしまっていたのだ。

「ほら。こうだよ。みんな見えるかな」

しかも、純菜は佐藤のほうを一度も見えないかった。

彼女の視線は周囲を取り囲んだ女子部員たちに向けられていた。インストラクターのようにして、自分のパイズリの技術を伝

授していく純菜。しかし、これはあくまでも実践形式の試合なのだ。技をレクチャーする場ではない。それなのに純菜は、圧倒的な演技でもって佐藤のことを骨抜きにし、なすがままにした後、佐藤を使って技の伝授をしているのだった。

「すごいッス。純菜先輩。まじやばい」

「パイズリだけで男をここまで壊せるなんて、さすがです」

姫華と麗美が口々に純菜を讃える。

彼女たちは一番近くで純菜による公開処刑を見学していた。

そんな教え子たちにもかって、純菜が優しく微笑んだ。

「姫華ちゃんも麗美ちゃんも、もっともつと強くなれるよ」

「そ、そうッスカね？」

「うん。わたしが全面的に指導するから、一緒にがんばろうね」

そんな言葉に後輩たちが期待と尊敬の眼差しで純菜のこゝろを見つめるのだった。

そんな純菜はニッコリと笑って言った。

「それじゃあ、もうそろそろ射精させるね。」

一回の射精で空っぽにしてみるからよく見てね。ちよつとしたコツがあって、それをつかんでしまえばあとは簡単だから」

なんでもないように言う純菜だった。

それを聞いた佐藤が恐怖に顔を真っ青にさせた。

体の暴れ具合も増してなんとか逃れようとするのだが、おっぱいが少し動いただけでその反抗は終わってしまった。そんな滑

稽な抵抗に、その場にいる女子部員全員が「くすり」と笑みを漏らした。何人もの巨乳バトルファッカーたちに囲まれて、佐藤は「あああ」と絶望の悲鳴をもらす。

「おい純菜。あまりやりすぎるなよ。佐藤の奴も壊れちまうぞ」

俺は見かねて口を挟んだ。

そこでようやく純菜が俺のことを見上げてきた。ニツコリとした笑顔で彼女が口を開く。

「大丈夫だよ。壊れないように手加減はするから。佐藤くんの限界はもう分かっているからね。壊れるギリギリで空っぽまで絞りとるから」

「そ、そうは言ったって。そんなこととしてたら佐藤の体力が保たないだろう。もう勝

負はついてるんだし、その変にしておけよ。なっ」

「……うーん。健ちゃんがそう言うなら、勘弁してあげようかな。よかったね、佐藤くん」

そう言って純菜が谷間の中から佐藤の物を解放してやった。

ひいひい悲鳴を漏らしながら、佐藤が泣きじゃくっている。それは命を落とさなかったことに心底安堵している男の顔だった。

「そうだ。健ちゃん、まだ試合時間は残ってるよね」

「あ、ああ。あと5分あるぞ」

「それだけあれば十分だよ。姫華ちゃん、佐藤くんを使ってパイズリしてみて」

純菜が笑って言い、佐藤が顔を青ざめる。

「え？ ウチっすか？」

「うん。間近で見て、指導してあげる。まずは姫華ちゃんのやり方でやってみてよ」

「純菜先輩。私も指導お願いします」

麗美が割り込んで言う。そんな彼女に対しても、純菜は笑顔だった。

「大丈夫。姫華ちゃんだったらすぐに射精させちゃうだろうから、その次に麗美ちゃんの番だよ。同じように佐藤くんを使って練習しよう」

「ありがとうございます」

「うん。健ちゃん、これなら大丈夫だよ。姫華ちゃんと麗美ちゃんじゃ、まだ数分だけで佐藤くんを壊すことなんてできないもん」

全ての問題を解決したような笑顔だった。

俺は「あ、ああ」と力なく頷くしかなかった。

ひいと絶望した佐藤が女子部員たちを見上げる。まだ立ち上がれないほどダメージを負った佐藤が見たのは、舌なめずりをしながら近づいてくる姫華と、周囲を取り囲んだ発情した女猫たちだった。そんな彼女たちの発達したおっぱいを前にして、佐藤にできることは練習台になることしかなかった。

「それじゃあ、よろしくッス。佐藤センパイ」

笑って姫華が佐藤に迫った。

さらなる悲鳴をあげた男を手早く調理し、あっという間に谷間に一物を挿乳してしまふ。男の体がビクンと痙攣し、断末魔の悲

鳴が再開した。

「そうそう、そうやって相手の反応を見ながら力加減を調整して」

純菜が手ほどきをしながら姫華のポーズが続く。

すぐに男の悲鳴は獣じみたものになり、それが続いた。姫華と麗美が純菜並みのポーズを手に入れるのは時間の問題だった。

*

新体制になってからというもの、純菜の指導は苛烈を極めた。

純菜の指導対象は女子部員に限られていた。厳しい指導だったが、女子部員たちは一人も欠けることなくその指導を受け、日

夜努力を続けていた。

それとは反対に、男子部員たちは女子部員たちの練習相手となって、あつという間に疲弊していった。最初、純菜も男子部員たちを指導していたのだ。しかし、彼らが自分の日常の全てをバトルファックに捧げる覚悟もないのを見て、あつという間に見切りをつけてしまった。もはや、純菜が男子部員に指導することはなかった。

女子部員たちはメキメキと上達した。

そんな中にも、傍目から分かるほど力をつけたのが姫華と麗美だった。彼女たちは純菜の指導を真剣に聞き、実践をして、日々の努力を欠かさなかった。

「ちよつと佐藤センパイ。もう失神しそ
うなんッスか？」

競技上のマットの上。姫華が呆れたように言った。

彼女の褐色の体が佐藤を圧倒していた。姫華は佐藤を四つん這いにして、そのアナルを舐めて犯していた。肉厚の舌をじゅぼじゅぼと蠢かせ、男の痴態をさらに深める。同時に大きな胸で佐藤の一物を挟み込みパイズリをしていた。アナル責めとパイズリ。その二重苦をくらって、佐藤はあつという間に気絶の一手手前まで追い込まれていた。「つたく。こんなにすぐ気絶しちゃ練習にもならないツスよ。佐藤センパイは年上なんですよね？ ウチより人生経験のある男性なんツスよね？ それなのに、年下の後輩にめちゃくちゃにされて、失神しそうになつて恥ずかしくないんツスか？」

「う、ううううッ」

「ほら、呻いてないでなんとか言つたらどうなんツスか？ くやしかったら抵抗してください」

姫華がペチンと佐藤の尻を叩いた。屈辱を与えるためだけの動き。それを何度も笑顔で繰り返していく。

そんな屈辱を受けて、佐藤は涙を流しながらも必死に抵抗しようとした。四つん這いの格好で、下半身を姫華に抱きかかえられながらも、なんとかその拘束から逃れようとハイハイを始める。それを見た姫華が「ぷぷつ」と笑い、再び肉厚な舌を佐藤のアナルに挿入した。

「ひゃあああああッ！」

悲鳴。

その情けない声を聞いた姫華が嬉しそうに笑い、さらなる責め苦を与えていく。

とどめとばかりに、大きな胸の中に挟み込んだ一物をさらに潰した。条件反射のように白い液体が噴出して射精した。そのまま佐藤は白目をむき、絶叫をあげる暇もなく気絶した。

「あゝあ。失神KO」

姫華が佐藤のアナルから舌を引き抜いてから言った。

「情けないッスね。ほら、佐藤センパイ。はやく起きてください。次の技、練習しませからね」

ピクンピクン痙攣する佐藤の頬をピンタして覚醒させる姫華。

彼女は年上の男性を圧倒し、純菜から教

わった技やコツの復習に余念がない。すぐに佐藤は意識を取り戻し、再び悲鳴をあげる練習道具に変わった。それがいつまでも続いてく。

「柴田先輩。ちゃんと舌動かしてください」
その隣では麗美が年上の男子部員をデ
イープキスで圧倒していた。

長身を活かしたキス。彼女は仁王立ちになりながら、自分よりも身長の高い男の顔を真上にあげ、振り下ろすようなデイープキスをさきほどから続けていた。身長差から、男はぷるぷると背伸びをして真上をむいて、ようやく麗美と口づけをすることができる有り様だった。当然、舌を満足に動かすこともできずに、男は震えながら、上から押さえつけてくるような麗美の長い舌

に身も心も溶かされていく。

しかも、彼女の太ももの間には男の一物が挟み込まれているのだった。

素股。

麗美の長くて逞しい太ももの間にすり潰されて、男の象徴が早くも悲鳴をあげている。丹念に麗美の下半身が脈動し、まるで挿入しているかのような快感を男に与えていった。ディープキスと素股で責められた男は、年下の麗美の前に完全敗北を喫し、無様に射精した。

「ひゃああああッ！」

「……………」

目を閉じて悲鳴をあげる男と、そんな痴態を淡々と観察する麗美。

あまりの快感に男の腰が抜けそうになる。

そんな情けない先輩の腰をぐいっとつかみ、へたりこみそうになった男を強引に立たせながら、麗美がディープキスと素股をやめない。それは男が滑稽にも気絶するまで続いた。

「ほらね、こうやって思いっきり抱きしめて、息をさせないようにするんだ」

その二人から少し離れて、純菜が公開処刑を続けていた。

彼女の周りには他の女子部員たちが勢ぞろいしていた。

今日は初歩編ということで、胸の大きなバトルファツカーにとつては基本技であり、必殺技でもあるパフパフの授業だった。

純菜が仰向けになった男の体を押し潰している。その爆乳は男の顔面を捕食し、さ

らに両腕でその頭部を抱きしめていた。ぐんにやりと変形した純菜の爆乳を前にして、女子部員たちが歓声をあげる。そんな希望の声とは対照的に、顔を爆乳に埋もれさせ捕食されている男は、「むうむう」と苦しうに呻いていた。

「今、この子は息を全く吸えませんが、鼻も口も完全にシャットアウトしているからね。少しでも隙間があったら、少ないけど息を吸うことができちゃうから、そこは徹底的に押し潰しちゃってね」

純菜が周囲の女子部員に笑顔を見せながらレクチャーを続けた。

そんな間も男は酸欠死の恐怖に震えジタバタ暴れるのだが、顔を押し潰した純菜の爆乳の迫力を前にして、身動きがとれないようだった。

いようだった。

「それで、注意が必要なのは酸欠で失神させたら反則負けになっちゃうってことね。高等部のバトルファックのルールだと、暴力技は一切禁止だから、やりすぎて気絶させちゃうとそれで反則負けになっちゃうから注意してね」

純菜が笑う。

「気絶するかしないか、それを見極めるためには練習あるのみだよ。胸の中の反応とか体の暴れ具合なんかをよく観察して、気絶寸前で止める。これがパフパフのコツです。見ててね」

そう言うとき純菜が初めて男に集中した。

男の抵抗がなくなり、ぴくぴくと痙攣を始めるようになったその瞬間。純菜ががっち

り固めていた腕の力を緩めてやった。

「よし、息吸っていいよ〜」

「ひゃあああッ!」

許しが出たとたん、男は息を吸ってしまい、脳味噌を溶かされた。

甘い芳香が鼻腔から直接頭に送られて全てを溶かされてしまう。気絶寸前の中で、純菜の純度100パーセントのフェロモンを嗅がされた男は、頭をバカにさせて、薬物中毒者のように純菜の匂いを嗅ぎ続けるようになってしまった。

「はい。これでパフパフの完成です。一度この状態までもっていければ、勝負はそれで勝ったも同然だよ。身も心も溶けちゃって、されるがままになっちゃうからね」
こんなふうに。

純菜がパフパフから男を解放すると、まるで見せつけるように男の顔を女子部員たちに展示した。そんな屈辱的な扱いをされているのに、その男は文句一つ漏らさなかった。純菜のフェロモンによって家畜にされた男の末路がそこにはあった。

「はい、じゃあ、みんなもコイツを使って練習してみようね」

純菜がニッコリ笑って言う。

「みんなみたいに、おっぱいが大きい子たちだったら、絶対うまくいくと思うよ。最初は酸欠で失神させちゃうかもしれないけど、そこは気にしないで。少しづつ上手くなればいいからね」

女子部員が真剣な表情で「はい」と答えている。尊敬する指導者にめぐりあった生

徒の上達度は早い。すぐに、この素人バトルファッカーたちも、パフパフを覚えてしまうだろう。

「それじゃあ、絵美ちゃんからやろっか」

純菜の言葉と共に練習が再開した。

体の自由もきかなくなつた男に対して、1年生バトルファッカーたちが襲いかかつていく。

平均よりもかなり大きなおっぱいを備えた少女たち。彼女たちは笑いながら男の顔を自分のおっぱいで押し潰していった。男が何度か巨乳の中で酸欠失神をすることになったが、その都度、純菜が男をピンタして強制覚醒。すぐにまた男の顔面は少女たちの胸の中に埋もれさせられることになった。

練習終了まで、男の眼前には女子部員たちの巨乳があり、気絶から目覚めてもそれは変わらなかつた。

寝ても醒めてもおっぱいに顔面を食べられ、虐められ続ける恐怖。男は最後になると泣き叫びながら「おっぱいイヤだああッ」とイヤイヤをするのだが、少女たちは笑顔でそれを無視し、パフパフの練習に励んでいた。

今日も競技場では、男子部員の悲鳴と、むせるような精液の匂いが立ちこめていた。

三

昼休み。

俺がぼんやりと教室で佇んでいると、辺

りには夏休みを前にして計画をたてる男女の声が聞こえてきた。

大会も終わり、部活も新体制になってから数週間が過ぎた。あと1週間もすれば夏休みで、そこからはバトルファック三昧の日々がまわっている。

それが楽しみでもあり、不安でもあった。考えるのは最近の部活内の雰囲気だ。どことなく、女子部員が目立つというか、幅をきかせる様子が目立ってきたのだ。

人数的には、女子部員が純菜をあわせて12名、男子部員はその倍以上の50名にふくらんでいる。夏休みを前にして、男子部員の入部希望者はあとを立たず、ここまです膨れ上がるようになった。普通だったら、人数が多いほうが威張ったりするもんなの

だが、うちの部活の場合には違っていた。純菜以外の女子部員は1年生だというのに、どういうわけか、女子部員のほうが強気なのだ。練習後に体を洗う順番にせよ、後片づけやトイレ掃除をする順番にせよ、女子部員のほうが優遇されている。

それは誰かが命令しているというわけではなかった。自然発生的にそうなるのだ。場の雰囲気というか、見えない圧力みたいなものがある、男子部員たちは女子に順番を譲るし、率先して掃除をするなどしていた。

それくらいならばまだ問題ないのだが、目につくのは女子部員たちの男子部員を軽んじる態度だった。模擬試合後に気絶した男子部員の扱いはひどい一言で、優しく

介抱するなんてことはなく、足をもつて引きずっていったり、その顔をグリグリと踏み潰して意識を取り戻したりと、やりたい放題だった。

そう。女子部員と男子部員の力が拮抗していないのが一番の問題なのだろう。

入部したばかりの素人1年生ですら、既に男子部員を簡単に射精させられるようになってしまった。持ち前の巨乳を武器にして、男子部員の精液を絞りとっていく少女たち。純菜の指導は的確で、女子部員たちはメキメキと実力をつけているのだった。（このままじゃいけない。なんとかしないと）

それが部長としての責任だった。俺はどうしたものと、教室の中、あれこれと考

えていた。

「あ、健ちゃん。こんなところにいたんだ」
はずむような声がして顔をあげると、そこにはニッコリとした笑顔を浮かべる純菜が立っていた。

彼女の登場に教室中がこちらに注目しているのが分かった。もはや純菜は、校内でも知らない奴はいない有名人なのだ。男たちが制服ごしに膨らむ純菜の爆乳を思わず凝視してしまっている光景が目につく。

「純菜、どうしたんだ？」

「うん。ちょっとお願いがあつてね」

そう言うと純菜は申し訳なさそうにお願い事を俺に伝えてきた。その内容は、部長職が預かっておくことになっている部室や競技場の鍵を貸してくれないかということ

だった。

「どうしたんだ？ 何に使うんだよ」

「うん。今度の日曜日だね、みんなに教えたいことがあって、それで競技場を使いたいんだ」

「おいおい。日曜日は部活禁止のはずだろ？

それはダメだろうが」

「大丈夫。先生たちには許可をとったよ。お願いしたら、あっさり許してくれた」

そう言って笑う純菜だった。

しかし、彼女の口から「お願い」という単語を聞くと不穏な気分させられる。いったい、どんな方法で「お願い」したというのか。

「まあ、それならいいけどな。でも純菜、みんなに教えたいことって、それって女子部

員限定なんだろう？」

「そうだよ。姫華ちゃんも麗美ちゃんも、みんなやる気だからね」

「なあ、純菜。お前が熱心なものも分かるけどさ、それでも男子部員のことも考えてやってくれないか」

俺の言葉に純菜が苦笑いした。

「うゝん。わたしも考えているんだけどね。やっぱり、不満をもつ男子部員もいるよね」「そりゃあな。年下の女子にめっちゃくちゃに犯されて、ぞんざいに扱われて気分のない男なんていないだろう」

「そうだよね。やっぱり、一度徹底的にやって、墜とすほうが早いのかな」

ん？

なにか純菜と俺の会話がかみ合っていない

いように感じた。

「ま、そこらへんもちゃんとやるからさ。健ちゃんのバトルファック部を強くするためなの。ね、お願い」

そう言って両手をあわせてお願いしてくる純菜だった。

俺は仕方ないと鍵を渡してやった。それを受け取った純菜は「ありがとう健ちゃん」とニッコリ笑って教室を去っていった。彼女がいなくなった後も、甘い匂いが辺りには漂っていて、慣れていない男子はそれだけでぼおっとなっていた。

なんとというか、純菜の魅力と実力は日に日に増しているようだった。それが頼もしくもあり、不安でもあった。

*

日曜日になった。

俺はいつものように自宅で勉強を続けていた。この前の期末テストの点数があまりよくなく、教師からも注意を受けていたのだ。総体の準備や部長になってからのアレコレでなかなか勉強ができていなかったことが原因だった。

しかし、それは言い訳にもならないだろう。俺よりも多忙で大変だったはずの純菜は、期末テストで変わらずに学年1位を死守し、才色兼備を地でいていた。

「しかし、純菜たちは大丈夫なんだろうか」
今日、女子部員限定で純菜の特訓をやる
といっていた。

競技場で彼女たちがやりすぎてしまわな
いか心配だった。彼女たちの練習相手を務
めるといふのは本当に命がけなのだ。

「とういか、練習相手って誰なんだ？」

俺はふと疑問に思った。

実践形式で練習をするのなら、男子部員
が必要のはずだ。しかし、純菜たちが男子
部員に声をかけた様子はなかった。

「まさか、外部から誰かつれてくるなんて
ことはないよな」

そうなればさすがに責任問題になりかね
ない。

外部から招いた男が乱暴な奴で、女子部
員に暴力を振るうなんてこともあり得る話
しだ。俺は心配になり、少し様子を見に行
こうと思った。制服に着替え、俺は学校に

むかった。

*

差し入れがてら、12本分のスポーツ飲
料を買い込み、競技場手前までたどり着い
た。

外は蒸し暑く、汗がだらだらと流れてき
ていた。俺は冷房のきいた競技場に入ろう
とドアに手をやった。その時、悲鳴が聞こ
えた。

「な、なんだ？」

それはこれまで聞いたこともないような
恐怖に染まった悲鳴だった。

バトルファックで快感に狂った悲鳴では
なく、純粹な暴力で脅されているような悲

鳴。問題は、それが男の声だということだった。

俺はゴクリと唾を飲み込んだ。気づかないようにドアをそっと開き中をのぞき込む。隙間から見えてきたのはとんでもない光景だった。

「ほら、見ててね。次は首四の字固めっていうのをやってみるよ」

純菜が競技場の一角で座り込み、その太ももの間に男の頭部を挟み込んで締め上げていた。

4の字に組まれたムチムチの脚の中で、男がさきほどから苦悶の表情を浮かべている。太ももの中で負け犬の顔をしながら死刑執行人を見上げている男と、それをニッコリと笑いながら見下ろしている純菜。彼

女はそのまま、ぎゅうううッと脚に力をこめた。



「頸動脈に太ももの内側の筋肉をあてる感じでやってみようね。そうすると、ほら見て、相手が男だろうがなんだろうが、すぐにバタバタ苦しそうに暴れて、はい、あつという間に気絶しちゃいました」

純菜の言葉どおりだった。凶悪な太もものに締め付けられた男は、ばたばたと滑稽に暴れて、すぐにコテンと意識を失ってしまった。盛大なイビキが競技場に響きわたる。「ほら、すごい顔でしょ？ 相手が男だつて、しかるべき技で締め上げれば、すぐに気絶しちゃうんだよ」

純菜が太ももの拘束をほどき、男の髪の毛をわし掴みにして、宙づりにした。

失神して口からブクブクと泡を吹いている男を周囲の女子部員たちに展示する。周

りの女子部員たちは「すごいすごい」とはしゃいでいた。

髪の毛を捕まれて宙づりにされている男は、よく見ると藤山先輩だった。顔は真っ赤に腫れ上がっていて、よく見ると体中アザだらけだった。まさにぼろ雑巾といった有り様で純菜に宙づりにされてしまっている。

「ほら、起きてください、藤山先輩」

笑って言って、純菜が藤山先輩にピンタをし始めた。

子供だましではない全力のピンタ。純菜の綺麗な手がムチのようになって、男の顔に炸裂していく。すぐに藤山先輩が「ふは」と言いながら起きると、ニッコリ笑った純菜はすぐにまた男の頭部を太ももで挟

み込み、首4の字の体勢になった。

「次は頸動脈を絞めないで、氣道だけ絞めてみるよ。今度は太ももの内側の筋肉じゃなくて、交差させているふくらはぎの筋肉に力をこめる感じかな。そうすると、氣道だけ絞めることができるの。見てて」

締め付けを開始する純菜。

変化はすぐに訪れた。滑稽に暴れ始める男。さきほどと違い氣絶することも許されず「ぐっげえええ」とカエルが絞め殺されるような悲鳴をあげ続けた。半分白目をむいて正常な顔つきではなくなる。

さきほどから、男の手がペチペチと勢いよく純菜の太ももをタップし、ギブアップの意思表示をしていた。許してください。自分の負けですという敗北宣言。それは哀

れにも命乞いをしているように見えた。

しかし、そんな必死の命乞いも純菜に笑って無視される。

半狂乱になった男が命をかけて必死に暴れ、なんとか純菜の太ももから逃れようとするが、それを彼女は軽くあしらひ、永遠と氣道だけを締め付け続ける。男の暴れる様子は滑稽で、周囲の女子部員の爆笑を誘っていた。

「はい墜ちた」

数分間の苦しみを与えられたのち、ようやく藤山先輩には氣絶という救いが与えられることになった。さきほどと同じように、純菜が氣絶した男の髪の毛を掴み宙づりにする。周囲の女子部員たちに成果を見せ、女でも男を絞め墜とすことができることを

証明していった。

「それじゃあ、次はみんなの番ね」

純菜が笑って言った。

「残りの3人で代わりばんこで練習してみよ。最初は頸動脈を絞めて気絶させてみようか。それができたら气道絞めを練習してみてね」

彼女の言葉に周囲の女子部員たちが「はい」と勇ましく返答した。

残りの3人。

それは女子部員たちに羽交い締めにされた男たちだった。彼らの顔もよく知っていた。バトルファック部の3年生。大会後に引退した先輩たちだった。彼らは1年生女子に羽交い締めにされ、背中を巨乳で潰されて悶絶しながら、藤山先輩が絞め落とさ

れていく光景を見せつけられていたのだ。

次は自分たちの番と知ると、彼らはガチガチと震え始めた。怯えた表情で周囲の女子部員を見ている。彼らの視界には、おっぱいの大きな女子部員たちが今にも自分たちのことを襲おうとしているように見えたことだろう。

「い、いやだあああッ」

たまりかねた男が一人、強引に女子部員の拘束をふりほどくと逃げ出した。逃げ道であるドア——俺のほうに向かって走ってくる。

「なに逃げてるの？」

「ひいひいッ」

純菜があっという間に追いつき、男の背中を爆乳を押し当てて無力化した。

腰が抜けて地面にへたりこんでしまった男の耳元で純菜が冷たく囁く。

「お前、何様のつもりなの？」

純菜が家畜に向けて冷たく言った。その相貌には同じ人間を見るような暖かみのある雰囲気はまるでなかった。

「協力しないなら、もう射精させない」

「ひ、ひい」

「もう私たちにしてもらわなくちゃ自分で処理することもできないんだから、お前は黙って私たちの練習台になれ」

いいな。

そう念押しをされて、先輩はコクリと頷いた。

すぐに姫華がやってきて、純菜から男を受け取る。ニンマリとした笑顔を浮かべた

姫華が「お前みたいなマゾ家畜には再調教が必要ッスね」と言いながら先輩を連れて行ってしまった。

(な、なんだこれは)

俺は驚愕のあまり声も出なかった。

こんなことはすぐに止めさせるべきだろう。それなのに、俺の膝はガクガクと震え、一歩も踏み出すことができなかった。

「健ちゃん、そんなところで立ってないで、入ってきたら？」

ビクンと震える。

純菜のほうを見ると、彼女はこちらをニッコリとした笑顔で見つめていた。気づかれていたのだ。俺は観念して競技場に入った。

「おい、純菜、これはどういうことだ？」

「どういうことって？」

「いや、なんで格闘技の練習してるんだよ。ここはバトルファック部だぞ」

そこで純菜がニッコリと微笑んだ。

その笑顔は先輩たちが今も女子部員によって絞め墜とされ、断末魔の悲鳴をあげている場所にそぐわなくて、俺は恐怖を感じた。

「大丈夫。これもバトルファックの練習なんだよ」

「れ、練習？」

「そう。プロには総合格闘技の技もOKなルールがあるよね。もちろん、高等部でそのルールは適用されないけど」

「そうだよ。だから、俺たちが格闘技の練習したって仕方ないじゃないか」

「違うの。これは試合で使うために練習し

てるんじゃないくて、自信をもってもらうためにやってることなんだ」

純菜がニッコリと笑った。

「女の子たちに、自分たちはいつでも男の子を絞め墜とすことができるんだって、そう確信させて自信をもってもらうためにやってるんだ」

「な、なんのために」

「ほら、男子って、心の底ではバトルファックに負けても暴力に訴えれば最後に勝つのは俺だって思ってるじゃない？ それは女の子のほうも同じでね、心の底ではどこかビクビクしてる。バトルファックで勝つても、どこか別の場所で復讐されるんじゃないかってね」

純菜はまるでとびっきりの思いつきを披

露するよう続けた。

「だからこそその格闘技の技なんだ。自分たちだって、男の子のことをあつという間に絞め墜とすことができるんだって自覚すれば、男の子に変な劣等感をもたなくてもすむ。そうすれば自信になるんだよね。ほら、みんなの顔、見違えたでしょ」

そう言って純菜が競技場を見渡した。

そこには、獷猛な笑顔を浮かべて男子部員たちに群がる女豹たちがいた。普段は大人しい女子部員も、目をランランと光らせ、嬉々として男の首に脚をからませ、力一杯絞めつけている。11名の女子部員全員が、まるで屈強なアマゾネスのように見えた。「で、でも、こんなことに付き合わされる方はたまったもんじゃないだろう。先輩た

ちだって嫌がってるじゃないか」

俺は意を決して言った。

その場の雰囲気の流れに流されそうになるのを必死にこらえながら、その場にいる4人の先輩たちの身を案じるのだが。

「ああ。あいつらなら大丈夫だよ。というか、これはあいつらの希望でもあるんだ」

「ど、どういふことだよ」

「うん。ま、大会前に徹底的に搾り取っていた後遺症なんだけどね、壊れるまでいかないにしても、あいつら、私が犯さないと射精できない体になってるんだよね」

ドクンと俺の心臓が鼓動する。

「大会終わって、引退してから、自分でオナニーしても射精できなかったみたいなんだ。それで、あいつら、私に泣きついてきた

んだよね。でも、部活引退した壊れかけの男になんて興味ないからさ、断ったの。もしたら、あいつら、私に土下座して頼んできたんだよ」

なんでもします。

なんでもしますから射精させてください。

「悩んだんだけど、いい機会かと思って、最初は私が格闘技の練習台として使ってたんだ。ほら、BL学園の人たちも夜討ちをしにかけてきたように、いつ襲われるかわからなかったからね。それで、何度も絞め墜しているうちに、もうすっかり男としてのプライドも人間としての尊厳もなくしちゃったみたいで、今では私の言うことをなんでも聞く家畜になっちゃったんだよね」

見せて。

そう言って純菜が藤山先輩のことを呼んだ。その声に、純菜に絞め墜とされ意識を朦朧とさせていた藤山先輩がふらつきながら純菜の足下まで来た。彼はなんの躊躇もなく純菜の足下で正座すると、なんの迷いもなく彼女にむかって頭を下げ、土下座をした。

「座布団」

冷たい声があった。男は自動的に動き、仰向けに寝そべった。その腫れ上がった顔に恍惚とした表情が浮かんでいるのが気持ち悪かった。

「よし」

まるでペットの芸がうまくできた時のように言って、純菜が勢いよく男の顔面に腰をおろした。顔面騎乗。純菜の巨尻が、貧

欲に男の顔面を押し潰している。巨大な柔らかな桃が、みっちり男の顔面に吸いついていた。

「な、なにやってるんだよ純菜」

「ん？ 座るには座布団があったほうがいいでしょ？ だから徹底的に躰たんだ。どこでも座布団になれるように、徹底的にね」

「そ、そんな。先輩の男に対して、そんなこと」

「大丈夫。もうこいつらはただの家畜。バトルファック部の備品のようなものだから、心配する必要なんてないんだよ。ほら、見て。こいつのち●ぽ」

そこで純菜が男の一物を見下ろした。

俺もそちらに目をやる。全裸に剥かれた男の下半身には、敗北の白い旗が滑稽に屹

立し、主人にこびるようにパタパタと動かされていった。

「ね、こいつも喜んでるんだよ。もう、わたしが与える全ての刺激がこいつにとって快感なんだ。そんな気持ち悪いマゾ家畜に敬意を払う必要なんてないんだよ？ ふふっ、この前なんか、こいつ、私が厳しく叱責しただけで射精しちゃったの。もう人間終わってるよね」

純菜がニツコリと笑っている。

優しそうに、見る者の心を溶かす満面の笑み。しかし、その尻の下には男の顔面がある。純菜は俺のほうを向いたままで、早くも酸欠で気絶しそうになっている家畜のために少しだけ尻を動かして息継ぎをさせ、すぐにドシンと尻餅をつくようにして顔面

騎乗した。男が苦しみのあまり呻く。そのギャップはどこか蠱惑的で、俺は目の前にいる幼なじみが男を墮落させるサクセスのように見えて仕方なかった。

「まあ、やりすぎて殺しちゃうまいように注意はしてるからさ。健ちゃんも、ここで一緒に見守ってくれない？」

顔面騎乗中の純菜が言う。

「ほら、いつまでも立ってないで座ってよ」
そう言われて茫然自失としていた俺は促されるままに彼女の隣にあぐらをかいて座った。ニッコリと笑って嬉しそうにする純菜。

彼女は男の顔を座布団にして女の子座りをしている。そのせいもあって、俺よりも高い位置に座っていた。対して、俺は競

技場の地面に直に座っているだけ。それが何故か、俺には象徴的なことのように思えた。俺と純菜の格の違いみたいなものを俺は自分勝手に感じていた。そんなふうに隣の幼なじみに圧倒されていると、一人での俺の下半身が反応するのが分かった。

俺は自分の胸に生まれた感情に名前もつけられず、戸惑いながらも、純菜と隣あって、競技場を見渡した。

＊

俺の目の前には異次元が展開されていた。日常や常識といったものがどこかに消えてしまった光景。

男たちが裏返った悲鳴をあげ、必死に命

乞いしながら、容赦なくおっぱいの大きな少女たちに絞め墜とされ、盛大なイビキをかいていく。

特にすごいのが麗美だった。

彼女は180センチを越す長身とその長い脚を用いて、男たちを暴力でも圧倒していた。男を傷つけることになんの躊躇も見せなかった。彼女の肉感たっぷりの脚が男の首を締め上げると、その皮下脂肪の底から発達した筋肉が浮かび上がり、情け容赦なく男の意識を奪っている。その間も彼女はいつものポーカーフェイスを崩すことなく、淡々と男を墜としていった。

「絞め技は初めてですが、簡単ですね。ほら、センパイ。早く起きてください。次は氣道を締め付けます」

冷たい麗美の声が聞こえてくる。

頸動脈を絞めて一瞬で意識を奪うことに成功した彼女は、氣道だけを絞める練習を始め、それもあつという間にマスターしてしまった。それどころか、男を絶対に氣絶させずに、少し息継ぎをさせながら、永遠と締め付けを続けることにも成功してしまふ。麗美の筋肉質な太ももに締め付けられた男は、情けない表情を浮かべながら、必死にタップを続け、麗美に命乞いをしていった。

「すごいでしょ、麗美ちゃん」

俺の視線に気づくと、純菜が得意げに言った。

「彼女、小学校のころから空手をやってたみたいなんだよね。午前中は打撃技をやっ

てただけど、すごかったよ。あの長い脚で家畜たちをめった打ち。変幻自在に軌道が変わってね？ 足とか胴体とか頭とか防御もできずにボコボコにされてたなあ。ほら、こいつの体もアザだらけでしょ？ これも全部、麗美ちゃんがやったんだ」

純菜が顔面騎乗をしている藤山先輩を見下ろして言う。

彼女の言うとおり、藤山先輩の体は所々赤黒く変色していて、凄惨な暴行が繰り返されたことが分かった。男をここまで一方的にボコボコにしてしまった麗美に、俺は恐怖を感じた。

「でも、さすがにやりすぎかな。麗美ちゃんがあれば以上やったら、今後の練習であいつ使えなくなるかもしれないから、ちょっと

と止めてくるね」

そう言って純菜が麗美を止めに行った。

後に残されたのは男二人だった。隣の藤山先輩のほうを向くと、そこにはしっかりと墜とされた男がいた。息継ぎを許されず、酸欠で気絶しているのだ。純菜の巨尻でもって意識を刈り取られてしまった男。苦悶の表情を浮かべて、涙と涎でぐちゃぐちゃになったその顔はどこまでも負け犬で、家畜だった。

「ゆ、ゆるひてくだひゃい。もう絞めないで」

「助けてえええッ！ ひゃだあああッ。もう気絶したくないいいッ」

男たちの悲鳴が競技場にこだまする。

そんな命乞いは残酷な少女たちにとって

興奮のスパイスでしがなく、男たちはさらなる締め付けで何度も意識を失っていった。その地獄絵図は、けっきょく、夕方に練習が終わるまで続いた。

四

夏休みになった。

俺たちバトルファック部は、秋の新人戦に向けて朝から夜まで厳しい練習に励んでいた。

女子部員たちの格闘技練習は、さすがに部内では行われていなかった。部活内で女子部員が男子部員に格闘技をしかけることもなく、健全なバトルファックが行われている。

しかし、格闘技の練習の効果を感じないわけにはいかなかった。女子部員に自信をもたせるといふ純菜の目的は完全な形で達成されていた。それは競技場内で展開されている逆レイプの光景を見れば一目瞭然だった。

「オッホオオオンッ」

男の獣じみた声が響く。

男の正体は佐藤だが、もはやそいつは人間ではなくなっていた。気色の悪い弛緩した顔で苛烈な責めに感じまくっている哀れな犠牲者。

佐藤は四つん這いにされ、そのアナルを舌でめちやくちゃに犯されていた。それを行っているのは新入部員の絵美だった。

新入部員の中でも大人しい性格で、おっ

ばい大きい以外にはバトルファックをやるようには見えない少女だった。声も小さく、引っ込み思案の性格。部活中もそれがわざわいして、なかなか上達が遅かった少女だ。

それが今では見違えるようだった。

年上のバトルファッカーである佐藤を弄ぶようにして四つん這いにさせ、そのアナルを舌でさんざんにいたぶっている。前立腺を刺激するポイントを早くも見つけだしてしまったようで、さきほどから重点的にそこばかり絨毯爆撃していた。彼女の表情は自信と確信に満ちており、見開かれた大きな瞳は冷静に男の痴態を観察し、反応のよかった部位を徹底的に舌でいじめていた。それだけの責め苦を与えたあと、絵美が

慈悲を与えるように、その大きなおっぱいで佐藤の一物を挟み込んでやった。

「い、いっつきゅううッ！」

すぐに男が射精し、ピクンと体を痙攣させる。

白目をむいた佐藤に容赦することなく、ますます過激さを増した絵美の舌が男のアナルをめちゃくちゃにし、おっぱいの中に挟み込まれた一物をミンチにした。

佐藤はたまらずに弓なりに大きく痙攣してからぐったりと体を弛緩させた。痙攣以外ピクリとも動かない。気絶したのだ。

「ジュボツ、じゆるるるッ！」

それなのに絵美の責めは終わらなかつた。気絶した男に気づかないわけではないのに、絵美は容赦なく佐藤を責め立て、一線を越

えようとしている。

「そこまでだ、絵美。もう勝負はついてる
だろ」

たまらずに俺が止めに入る。

一瞬、アナルを責め続ける絵美が上目遣いでこちらを見上げてきて視線があった。そこには冷静な瞳しかなかった。まるで、品定めをするような、うるさい俺のことも同じ目にあわせてやろうかと思案するような理性がそこにはあった。

「すみません、部長。佐藤先輩が気絶して
るって、気づきませんでした」

ようやく佐藤を犯すことをやめた絵美が立ち上がって言った。

小柄な体躯。こんな少女が自信満々に男を犯していたというのが信じられないほど

だ。しかし、その大きなおっぱいには男の敗北の証がこべりついていて、さきほどまでの逆レイプが事実であることを教えてくれた。

「あ、ああ。今後は気をつけろよ」

「はい。失礼します」

ぺこりと頭を下げて絵美が去っていった。おそらく、次の対戦相手を探すのだろう。後にはビクンビクン痙攣している佐藤だけが残されていて、俺はいつものように気絶した男をかつぎあげて、医務室に運ぶことになった。

このような光景が競技場のそこら中で見受けられた。

新入部員も含めて女子部員全員が男子部員を上回る実力を身につけてしまっていた。

これも純菜の指導のたわものだった。おっぱいの大きな少女たちが、自分の武器を使って、男たちから精液を搾り取っていく。

そんな女性部員の中にあつて、やはり純菜は別格だった。

彼女はもはや片手間ののように、男たちの精液を搾り取っていた。

「はい、頭バカになっちゃいましたね〜」
純菜が笑いながら言う。

彼女は競技場のリングの上で試合をしていた。いつもと違うのは相手の男子部員が2人だということだ。1対2の圧倒的不利な状態で純菜は試合をしているのだった。それなのに、純菜はまるで子供を相手にしているように男子部員を圧倒し、二人同時にパフパフを極めて勝利を確信した笑顔で

浮かべていた。

「わたしのおっぱいすごいでしょ？ どんどん体から力がなくなっていくっちゃうの」

純菜は立ちながら、乳房一つに男の顔面一つをあてがい、二人同時にパフパフをしているのだった。左腕で左の男の後頭部を抱きしめ、右腕で右の男の後頭部を抱きしめて、男の顔面をそれぞれ左右の乳房に埋もれさせている。

谷間の中に閉じこめるパフパフではないのに、効果は絶大のようだった。自分の頭よりも大きな乳房一つの前に、男たちの体は次第に脱力し、今では純菜のおっぱいを支点にして宙づりになる格好になっていた。「なんだか、わたしのフェロモンも最初より成長してるみたいだね。この前なんか、電

車の中で隣に座ったサラリーマンのお兄さんが、私の匂い嗅いだけで頭バカになっちゃって、スーツの上からも分かるくらいにフル勃起しちゃってたんだ。かわいそうだったから、胸おしつけてもっと嗅がせてあげたら、それだけで射精しちゃったの。ふふっ、今まで女の人に耐性がなかったんだろうね。おもしろかったから、その後も電車を降りてちよっと遊んであげたんだ」

まるでその時のことを思い出すように、純菜が羽交い締めになっている男二人の顔をさらに爆乳に押しつけ、グリグリと潰した。ぐんにやりと歪んだ彼女の豊満な果実が、貧欲に男たちの顔面を喰らい尽くしている。

「やっぱり、バトルファックを続けると体

がそういうふう成長するのかもね。男の子をさらに搾り取ろうって、体が変わっていくのかも。ふふっ、これからもどんどん強くなれると思うと楽しいね」

彼女は笑って仕上げをすることにしたらしい。

パフパフの拘束をといてやると、男たちはドサッと地面に落ちてピクピクと痙攣して動かなくなつた。意識はある。そのように純菜は手加減したのだ。

彼女はサキュバスのように笑うと、男一人の尻を自分の膝の上に乗せて必殺の体勢になる。意識を朦朧とさせた男が恐怖に青ざめて命乞いを始めるが、純菜は笑顔でそれを無視して、悪魔殺しの大鉄槌を完成させた。

「ひっつきいいいいッ！」

たまらず弓ぞりに体をそらし、一瞬で射精してしまった男。

彼は純菜の膝上の上で滑稽にも暴れ回るのだが、それはまな板の上でさばかれる魚くらいの意味しかなかった。

熟練した動きで純菜が男の抵抗を無力化し、重量のある爆乳をゆっくりと持ち上げて男の腰に打ち付けた。もはや悲鳴さえ許されず、男は一回の打ち付けだけで気絶し、そのまま精液を純菜のおっぱいの中に垂れ流しにしていく。まるで壊れた蛇口から水が噴出するような勢いで射精をしていく男。それは精巢の中が空っぽになるまで続いた。「はい、あっという間に空っぽだね。ふふっ、気持ちよかった？」

既に意識がなく、ビクンビクンと痙攣している男にむかって笑顔で言う純菜。

「女の子に反抗的だところなっちゃうんだよ？ これにこりたら、もう変なプライドなんて捨ててね。そうしないと、また君の心をボッキボキに折るまで犯すから」

分かった？

そう優しく言う。

そこまできて、ようやく彼女はリングの上のもう一人の男に目をやった。

その男はさきほどから、仲間が純菜に犯されていくところを恐怖の目で見ていただけだった。1対2なのだから、パイズリを極めている純菜を責めることだってできた。しかし、男はそれをしなかった。怖かったのだ。下手に攻撃して、返り討ちにあい、あ

の恐ろしいおっぱいが自分に向けられることが。

男はただ仲間が犯されるところを見ていただけで、恐怖におののくことしかできなかった。しかし、その選択は間違っていた。サキュバスが獲物を逃すはずがないのだ。

「次は君の番」

純菜が笑って言った。

「この子と同じように、君の心も折ってあげる。期待してね」

悲鳴をあげる男を血祭りにあげていく純菜。

リングの上には男たちの大量の精液が流されることになった。

*

夏休みはこうして男子部員たちの悲鳴とあえぎ声によって、埋め尽くされていった。女子部員たちは容赦なく男子部員を搾り取り、責めなぶっていった。

男子部員も最初のうちは抵抗したが、今では従順に彼女たちに搾り取られている。抵抗した男子部員たちは徹底的に心を折られたからだ。純菜、姫華、麗美。この3人が男子部員の心を犯し、従順な練習台にしてしまった。男子部員たちは一人も辞めることなく、今日も同級生や年下の少女たちから、根こそぎ精液を奪われていた。

そんなある日のこと。

黒宮が競技場を訪れた。

「おい、夢野純菜を出せや」

昼休憩を挟んだ午後のことだった。

練習に備えて、競技場にマットを敷き直していた時のこと、BL学園の制服に身を包んだ黒宮が現れた。

その表情は狂気に彩られているように見えた。瞳はドロロンと濁りすわっていて、まるで酔っぱらいのようだった。落ち着かなく、きよろきよろしているかと思えば、舌打ちをして近くのゴミ箱をけっ飛ばしている。明らかに情緒不安定だった。

「黒宮、なんの用だよいったい」

「健二か。久しぶりな負け犬。夢野純菜を出せや。とっととしろ」

「純菜になんの用だ。お前、BL学園の練習はいいのか？」

その言葉は地雷だったらしく、目の前の

黒宮の顔が赤黒く変色したかと思うと激高した。

「あいつのせいで俺の部内での立場はめちゃくちゃになっちゃったんだよ。どいつもこいつも、俺のことを軽んじやがって。何がオナニー猿だ。何がチクニー愛好家だ。バカにしやがって。くそっ、くそっ」

ゴミ箱を蹴り続ける黒宮。すぐにゴミ箱は倒れ、中身が競技場にあふれた。

「だから、あいつにはリベンジしなきゃなんねえんだよ。ぎったんぎったんに犯して、辱めて、この前の汚名をはらさせてもらうぜ。いいから、とっとと夢野純菜を出せ。そうじゃないと」

黒宮が制服のふところに手をやった。

取り出したのはナイフだった。銀色に輝

く刀身がどこか現実離れして感じられ玩具のようにしか見えない。惚けていたのは一瞬。俺は黒宮の瞳に宿る狂気が本物だと思うと、さっと背筋が凍った。

「おまえ、何考えてんだ。警察呼ぶぞ」

「いいぜ。呼べよ。その間に何人かは道ずれだ。特に夢野純菜は念入りにやらせてもらうぜ」

ひひっと笑った黒宮。

ナイフをおどけたように振り回して遊んでいる。今にも飛びかかってきそうな恐怖感で俺は動けなくなった。

「ちよっと、なんの騒ぎッスか、センパイ」

騒ぎを聞きつけて現れたのは姫華だった。彼女はどうでもよさそうにアクビをしな

がらこちらに来て、黒宮の姿を見ると驚きの表情を浮かべた。

「なんッスかこの人。何しにきたんッスか？」

「リベンジだよ。純菜と試合させろってさ。というか姫華、危ないから下がってろ。あいつ、もう正気じゃないみたいだ」

俺は黒宮の前に立ちふさがって背後に姫華を隠した。

ニヤっと笑った黒宮が大げさに口を開く。

「これはこれは、誰かと思ったら姫華じゃねえか。どうしたよおい。スクールはもういいのか？ この前俺が顔出したらいなくてよお、せっかくまた泣くまで犯してやろうって思ったのに」

自信満々の強気。

そんな軽んじた態度にムっとした姫華が

口を開く前に自信にあふれた声が出た。

「いいよ。そんなに勝負したいならしてあげる」

純菜だった。

彼女はナイフを前にしてもニッコリと笑って、まっすぐに黒宮を見据えている。背後には麗美の姿もあって、ほかの女子部員たちも遠巻きに黒宮を見ていた。

「おお。夢野純菜じゃねえか。それにB.L.学園を辞めた負け犬も一緒だ。いいねえ。めでたいねえ。で、勝負してくれるって?」
「うん。君の気がそれですむならね。でも条件があるの」
純菜は全く臆していなかった。刃物をもった男をなんとも思っていない。彼女は続けた。

「姫華ちゃんと麗美ちゃんと試合をして、それで勝てたら私が相手になってあげる。それならここで今から試合してあげるよ」

いきなりの言葉。俺は驚いて口を挟んだ。

「おい純菜。なに考えるんだ」

「大丈夫だよ健ちゃん。心配ないよ」

「つつたつて、姫華と麗美は」

「大丈夫ツスよセンパイ。ご心配ありがとう」
ス

割って入ってきた姫華。その隣には麗美もいる。

「つーか、こいつとの対戦を希望したのはウチと麗美も同じツスから。こんなに早くリベンジの機会がやってくるなんて、思ってもみなかったツスけど」

「問題ありません。私もやりたいです」

「お、お前ら」

姫華と麗美が自信満々な様子だった。

そんな二人に最初は面食らっていた黒宮だったが、すぐにニヤリと笑みを浮かべた。

「いいぜ。その条件でやってやる。姫華も麗美も、ウォーミングアップにはちようどいいぜ」

「舐めてると痛い目にあうッスよ。もう、あの頃のウチらじゃないッスから」

「はっ。スクールで泣き叫びながら」「もうやめてください」って言ってた女が何言ってるんだよ。そっちのデカ女もだ。前みたいにかわいがってやるよ。夢野純菜の前で再起不能になるまで犯してやる。ヒヒッ、樂しみだぜ」

そう言って黒宮は俺にナイフを渡してき

た。

こうしてバトルファックの勝負がきまった。とんでもないことになったと、俺はどうしたらいいのか分かず途方に暮れてしまった。

*

試合はすぐに開始されることになった。

リングの上には姫華が立っていた。彼女と対峙しているのは、競技パンツ姿になった黒宮だ。

姫華の競技水着姿は魅力的の一言に尽きた。

純菜ほどではないが、姫華の体の成長も著しかった。褐色のおっぱいは最初の頃よ

りも大きくハリが出てしっとりとしたツヤがあった。純白の競技水着からこぼれようとしている巨乳は純菜に次ぐ大ききで、これまで男子部員の精液を大量に搾り取ってきた凶器だ。

しかし、今回の相手はあの黒宮なのだ。総体の男子勝率1位。これまで姫華は一度も黒宮に勝てたことがなかった。それを悔しく思い、いつかりベンジしてやると語っていた姫華の姿が思い出される。

俺は姫華が心配だった。いざとなったらリングに割って入って黒宮を止めようと、そう決意していた。

「試合開始っ」
審判員役の佐藤が合図をして、ブザーが鳴った。

時計が時刻を刻み始める。
最初に動いたのは黒宮だった。

「しゃああッ」
蛇の威嚇音のような声を出しながら、奴の片手が姫華のおっぱいに伸びる。力任せに押し掴みにした後、それをぐんにやりと変形するまで揉んだ。

「ひひっ。お前の弱点はもう分かってるんだよ。ここだよな」

黒宮が姫華の乳房の一点を刺激し始めた。その中央の突起物。姫華の乳首を競技水着上からつまみあげ、コリコリと動かしている。

すぐにもう片方の手も同じ動きをして、両乳首を責めていった。黒宮の顔には勝利を確信した男の表情があった。

「スクールで、さんざんに開発してやったもんな。何時間もかけて責めてやった。ほら、どうだよ。気持ちいいだろうが」

黒宮が顔をあげた。

そこでようやく気づく。さきほどから、姫華の喘ぎ声がまったたくしていないことに。

「センパ、イ、さつきから何やってるんっスか？」

ニンマリとした笑顔。

姫華は余裕しゃくしゃくだった。黒宮のおっぱい責めをなんとも思っていないことは明らかだった。確かな貫禄がそこにはあった。

「ぜんぜん気持ちよくないッス。つーか、前より下手になってません？ 素人バトルファッカーがわたしの胸を責めてきたとき

と同じ感じがするッス」

「う、嘘つけ。やせ我慢しやがって。くそ、くそ」

「アハハっ。必死な顔して情けないッスね。そんな乱暴におっぱい責めたって、意味ないのに」

黒宮が顔色を変えて姫華を責める。

ぐんにやりと歪んだ巨乳をわし掴みにして、次々と技を駆使しながら責めなぶっていく。

しかし、必死な黒宮とは対照的に、姫華はまったたくの余裕だった。顔色一つ変えることなく、腰に手をやって仁王立ちになり、褐色ギャルがおっぱい責めを受けきっていく。次第に、黒宮はハアハアと荒く息をするようになってしまった。

「わたしのおっぱい、どうッスか？」

イタズラ娘がニンマリ笑って言った。

「わたしの胸も成長して、この前はかったら108センチのJカップになっちゃったッス。純菜先輩と比べたらまだまだッスけど。この巨乳ぞろいの部活内では純菜先輩に次ぐナンバー2なんッスよ。そのもみ心地はどうッスか？」

衝撃的な数字を教えられた黒宮は目を点にして、姫華の爆乳を見つめてしまった。「うっ」と呻き声をもらした黒宮の手がゆるむ。ニンマリと笑った姫華が黒宮の後頭部に両腕をまわした。

「おっぱい責めはぜんぜんダメッス。次はキス勝負といきましょうよ。スクールのときにはペロチューでも可愛がってくれちゃ

いましたよね？」

今度はこっちの番ッス。

そう言って、姫華が黒宮の唇を奪った。後頭部に両腕をまわして抱きしめながらのディープキス。彼女の肉厚な舌が男の小さな口の中に進入し、蹂躪する。

「ジュールッ！　じゅばじゅるううッ！」

あまりの激しさに男がうめき声をもらす。それを聞いて姫華がニンマリと笑った。

そのまま姫華は、男の口内をまんべんなく犯していった。

黒宮も反撃を試みているようだが、姫華の前にあつという間に無力化されてしまう。すぐに黒宮は目を閉じて、姫華の激しいキスに防戦一方となった。

ガクガクと黒宮の膝が笑っている。それ

を逃さない姫華の熱い抱擁によって強制的に立たされながら、姫華のディープキスが男の戦闘力を奪っていった。唾液音のいやらしい音と、男のあえぎ声が響きわたっていく。

「んっふう。どうツスカ、わたしのペロチュー」

姫華がようやく唇を離して言った。

口と口の間涎の橋ができあがる。それを姫華はジュルジュルと吸ってゴクンと飲み込んでしまった。黒宮はアヒアヒとあえぎ声をもらすだけで返答もできなかった。

「まあ、聞くまでもないツスカね。そのとろけたお顔が答えツス。お前は、年下の後輩にキスだけでポロポロにされちゃったんツスよ。情けないツスね」

「う、うるせえ。ふ、ふざけんな。こんなもん、ちょっと油断しただけで、」

「そうツスカ？ ペロチュー中もレイプされる女の子みたいにプルプル震えて、目も閉じてたツスよね？ されるがままに私の肉厚ペロで犯されてたのに、よくそんなことが言えますね」

とろけた男の間近でもってニンマリと笑う姫華だった。

その迫力に黒宮が「ひ」と悲鳴をもらした。さらに獐猛に笑ったギャルが宣言する。「それじゃあ、弱っちいお前にはハンデをやるツス」

黒宮を抱きしめていた腕がとかれた。男はドサリとリングに膝をつき、座り込んでしまう。

そんな男の髪のを片手でつかんだ姫華が、そのままグイっと持ち上げて、自分の秘所へと男の顔面を押しつけてしまった。「ほら、クンニさせてやるから少しは気持ちよくさせてください。抵抗しないでやるツスから。ご自由にクンニしてくれていいツスよ？」

そう言って仁王立ちする姫華だった。自分の秘所を無防備にさらして、男のクンニを受けきろうという算段のようだ。

「なめやがって。覚悟しろよ、てめえ」
怒りにプルプルと震えた黒宮が姫華の秘所に舌を差し入れた。

そのまま、膝まづいた男がクンニを始める。その動きはさすが地区大会勝率1位バトルファッカーのもので、見ているこっち

が姫華の心配をしてしまうほどの圧巻のものだった。

「ハッ。なんツスカソレ？ おまえ、それで本当に全力なんツスカ？」

しかし、返ってきたのは鼻で笑った姫華の冷笑だった。

その膝はまったく震えておらず、鍛え上げられたムチムチの太ももが樹齢1000年を越える大木のようにリングに立っているだけだった。そんな大木に群がって顔を埋め、甘い樹液をちゅるちゅると舐める害虫は、どこまでもみずぼらしく見えた。

「ぜんぜんダメツス。つーか、本当に弱くなってませんか？ こんなんじゃ、この前バトルファック始めたばかりのウチの女子部員にも通用しないツスよ」

バカにした笑いが響く。

必死に舌を動かし続ける黒宮。彼の顔は焦りと不安と恐怖で醜く変貌していた。負け犬の表情。こんなはずではなかったのに、現実を受け入れられない男の顔がそこにあった。

「はあ。もういいッス。お疲れさまでした」

姫華が退屈そうに言った。

彼女は男の髪の毛をわし掴みにして自分の秘所から離れた。一瞬、男の頭部を宙づりにしたままで品定めをするように見下ろす姫華。その冷徹な眼は人を見る目ではなかった。家畜を見る目。どうやって処分しようかと思案する処刑人の目だった。

「手本を見せてやるッス。フェラっていうのはこうやってやるんッスよ」

勢いよく姫華が黒宮にタックルをして、

仰向けに倒れた男の股間に頭を突っ込んだ。

そのまま男の小さな臀部をがちりと抱きしめて拘束し逃げられなくする。ニンマリと笑った褐色ギャルが男の一物を余裕の表情でパツクリとくわえてしまった。

「あひいいいんッ」

男の悲鳴。

姫華の口が男の象徴を飲み込み込み咀嚼していた。勝利を確信した女がジト目でじつくりと男の痴態を観察しながら舌を動かしていく。シコることもせず、飲み込んだ一物を口内で暖かく包み込んだままの刺激。明らかに手加減をしている様子なのに、男はあつという間に限界を迎えた。

「い、いっぎゅううううッ！」

どっぴゅっぴゅうううッ！

盛大な射精。

その瞬間、姫華の唇がすぼまり「じゆるるるるッ！」とバキュームを開始した。黒宮の背中が弓ぞりになり、そのまま精液を噴出するだけの家畜になってしまった。

どっぴゅうううッ！

ドッピュッピュウウウッ！

長い射精。

それがようやく終わる。姫華は、最後の一滴まで搾り取ってから、ピクピク痙攣するだけになった男を確認すると、ようやくよく口を離した。

そのまま、気絶一步手前の男の胴体に腰をおろし、馬乗りになる。マウントポジション。姫華が猫のようにニンマリ笑うと、大

きく口を開けてその中身を男に見せつけた。

口内にたまった大量の精液。

自分の敗北の結果を見せつけられた男は「ううッ」と絶望の表情を浮かべる。そんな完全敗北した男にむかって最後のトドメをさすように姫華は大量の精液をゴクンと飲み込んでしまった。まったく苦しそうにすることなく、いつきに男の敗北の証を嚥下してしまった姫華。彼女は空っぽになった口を大きく開いて、男が敗北したことを見せつけていた。

「ふー、瞬殺でしたね。弱すぎてはなしにならないッス」

馬乗りのままで姫華が言う。

「舌技は得意技ッスけど、わたし、ぜんぜん本気出してないんッスよ？　たくさん手加

滅してやったのに、おまえはあつという間に射精して、バキュームフェラで精巢空っぽにされちゃったツスね。情けないと思わないんツスか？」

「う、うううッ」

「あゝあ、泣いちゃった。こいつ、年下後輩にポロポロにされて泣いちゃったツス。あれだけ勇ましく吠えてたのに、どうしたんツスかね」

「……………」

「情けないツスよね。ねえ、今どんな気分ツスか？ あれだけバカにしてた年下後輩にポコポコにされて、あつという間に射精しちゃって、今、どんな気分？」

「……………」

「ほら、黙ってないで答えろよ」

少しだけ残ったプライドのために沈黙を選んだ黒宮を許さない姫華。

彼女はマウントポジションのまま、両手で黒宮の乳首を摘んだ。それだけでビクンと痙攣した男に対して、姫華がニンマリと笑った。

「今、どんな気分なんツスか？」

「う、あああッ。乳首ダメえええッ」

「言っておきますけど、わたしの得意技は乳首責めです。純菜先輩直伝のえっぐい乳首責め。部内ではもう何人もの男子部員がわたしの乳首責めで悶絶失神してるんツスよ。純菜先輩ほどじゃないにしても、おまえみたいなのが、めちゃくちゃにしてやることは造作もないツス」

クリクリと動く褐色ギャルの長い指。そ

れが男の乳首に炸裂するたびに、男の体は痙攣していく。

「なんなら、純菜先輩みたいに自分からオナニーするまで乳首責めしてやろうか。おまえが生まれてきたこと後悔して、自分からオナニーするまで、永遠にえっぐい乳首責めで犯してやるッス。さあさあ、早く答えるッスよ。いま、どんな気分なんッスか？」

姫華がニンマリと笑いながら乳首を責め続ける。

男は白目をむきながら絶叫した。

「ぐ、ぐやじいじいっ」

「あはは。そうッスよね。格下と思ってたウチにけちよんけちよんに犯されちゃったんッスもんね。ねえ、どこのタイミングで

負けるかもって思いました？」

「……………」

「返事」

クリクリクリッ。

姫華が乳首を人差し指でひっかくだけで、男は従順になった。

「ペロチューされてる時ですううッ。あの時負けるかもって思いました。あ、ダメダメ、乳首だめえええッ」

「そうッスか。そんなに早く負けるかもって思ってたんッスね。じゃあ、その後の強気な発言も内心は不安でビクビクだったんッスね。どうなんッスか？」

「……………」

「返事」

姫華の熟練した乳首責めが炸裂し、男が

自分の意思を手放す。

こうして、悲鳴をあげた黒宮は自分でも言いたくないことを強制されて喋らされていった。次から次へと。姫華の尋問は続き、乳首を責められた黒宮はそれを喋らされていく。それはまるで秘密警察の拷問のようだった。

「あゝ、こうやってこいつのことポコポコにしてやるのが夢だったんッスよ。あのムカツク男のことを力で圧倒しながら犯すのって病みつきになるッス」

姫華がマウントポジションのまま、男の胸板に指を這わせながら、顔を赤らめていく。それは見ているだけでエロい気分になせられる妖艶な表情だった。

「もっと楽しみたいのは山々なんッスけど。

麗美が待つてるッスからね。この辺でやめておきましょう」

姫華が笑った。

解放される。期待の表情を浮かべた男がバカだった。

「それじゃあ、本気の乳首責めで気絶させるッス。もうウチに逆らわないように徹底的に壊してやるから、覚悟しろよ」

宣言してその通りにした。

姫華の指が男の乳首をつまみあげて振動を始める。かと思うと、もう片方の乳首を姫華がくわえ込み、ジュルジュルと舐め、犯し始めた。

「ひっぎいいいいッ！」

すぐに男は白目をむいてリング上でパウンドするように痙攣した。気絶したのだ。そ

れでも姫華の乳首責めは止まなかった。力の差を教え込むように、姫華は黒宮に対して情け容赦なく乳首責めを続けていった。

＊

「おつかれさま、姫華ちゃん。圧勝だったね」

純菜がリングから降りてきた姫華を迎え入れながら言った。

姫華はまったくの余裕の様子だった。消耗するバトルファックの試合をしたというのに、彼女は汗一つかかずに笑顔を浮かべていた。

「ありがとうッス。これも、純菜先輩の指導のおかげッス」

「ううん。姫華ちゃんががんばったからだよ。偉いね」

そう言っただけで純菜が姫華の頭を撫でてやった。

それだけで姫華は照れながらも頭をぼおっとさせてしまった。さきほどまで、男をさんざんに犯していた少女とのギャップがすごかった。

「ね、健ちゃん。大丈夫だったでしょ」

純菜が俺にむかって誇らしげに言った。

「黒宮君ぐらいなら、もう姫華ちゃんの相手にならないんだよ。それだけ姫華ちゃんは強くなったんだ。ふふっ、黒宮くんってば、姫華ちゃんの乳首責めに抵抗もできなかったもんね」

「あ、ああ。そうだな」

「姫華ちゃんにはこれに加えてパイズリもあるんだからね。今の姫華ちゃんの実力なら、たぶん挟んだだけで試合終了だよ。あとは白目むいてアヘアヘ射精するだけ」

「そうッスね。今日もフィニッシュをパイズリにしようかとも思ったんツスけど、それだと麗美の試合ができなくなるまで再起不能になっちゃうんで、自重したツス」

そう言って麗美に顔をむける姫華だった。純菜の隣にいた麗美がいつものポーカーフェイスを崩さずに口を開いた。

「ありがとう、姫華。今度はわたしの番」

「がんばるツス。麗美」

「うん。あいつのこと、ようやくポコポコにしてやることができると思うと、楽しんで仕方ない」

麗美が控えめに微笑んでからリングに入った。

長身の彼女の美脚は下から眺めるだけで大迫力だった。彼女はそのまま気絶している黒宮に近づくと、髪の毛をつかんで力任せに立ち上がらせ、往復ビンタをお見舞いした。「ふは」と意識を取り戻した男のことを放り投げて地面に転がす。

「次はわたしの番ですよ、黒宮センパイ」

長身女性がリングに横たわる矮小な男を見下ろしながら言った。

その顔には勝利を確信している自信がみなぎっていた。元BL学園生徒で、黒宮には逆らえなかった麗美が、ここまで自信満々に試合にのぞんでいるのは意外だった。

「くそがッ。おまえまで俺を見下しやがッ」

て」

黒宮が吐き捨てるように言った。

さきほどまで姫華にさんざんに犯されていたというのに、この変わり身の早さはさすがだった。目の前にいるのが、BL学園で支配していた女子であることも影響しているのだろう。黒宮はいつもの強気の様子を取り戻し、目の前の女をどう調理してやるのかと舌なめずりをしていた。

「ふざけやがって。女のぶんざいで男にたてつけばどうなるか、教えてやるよ。力で劣った下等な女が男に勝てるわけねえんだ。暴力を使えば、姫華だろうが純菜だろうがポコポコにして支配しちまえるんだぜ」

ヒヒッと笑う黒宮。

そんな男にむかって麗美が言った。

「そんなに暴力に自信があるのなら、ルールを変えてあげてもいいですよ。プロロールのデスマッチ。格闘技あり、道具使用ありのデスマッチで試合をします」

「な、なんだと？」

「暴力を使えば女なんて簡単に従わせることができる。そう考えてるんですよね？」

それが黒宮センパイのプライドの最後の支えなんでしょう。それなら、それを粉々に砕いてあげます」

デスマッチルール。

プロの試合でも採用されることが少ない過酷なルールだ。格闘技どころか、急所攻撃もありのなんでもありルール。ギブアップしても試合は終わらない。勝者が敗者の慈悲を認めて許してやったときに試合が終

了になるというルールだった。

「異論はないですよね、黒宮センパイ」

麗美は貫禄たっぷりだった。

長身女性が自慢のスタイルを見せつけている。女からふられたデスマッチを断ることなんて黒宮にはできなかった。急遽、デスマッチルールでの試合が開始されることになった。

*

ブザーが鳴って試合が開始される。

お互いに動かず、リング中央で固まったままの二人。しかし、その構えを見るだけでプロと素人の試合であることがわかった。

「麗美ちゃんの構え、かっこいいね」

かたわらの純菜の言葉どおり。

麗美は少し腰をおろした格好で、手の前にやって戦闘態勢を整えていた。幼少期から空手をやっているという彼女。俺には空手の知識はまったくなかったが、おそらくこれが空手の構えなのだろう。張りつめた空気が、ぎこちなく構えた黒宮とはまったく違っていた。

「シッ！」

一瞬。

見えなかった。気づいたときには麗美の長い脚が黒宮のこめかみに直撃した。男の体がそれだけでよろける。信じられないといった顔を浮かべた黒宮の反対側のこめかみに2度目の蹴りが炸裂した。

「シッ！ シッ！」

連続する。

麗美の美しく長い脚が、次々と黒宮の体に突き刺さっていった。長身の彼女から放たれる蹴りは強烈で、その一撃ごとに黒宮の体が木の葉のように舞った。

「ち、ちくしょうっ」

焦った黒宮が両腕で顔を固める。

蹴られ続けることへの恐怖がそうさせたのだ。その一瞬を前にして、麗美の蹴りの軌道が変わった。上段蹴りで男の側頭部を狙った軌道が、ムチのようにしななって変更され、黒宮のわき腹に突き刺さった。

「ぐげえええッ！」

無防備なところへの一撃。男の舌が飛び出て、目玉が飛び出るような強烈な痛みに関絶する。そのまま地面に倒れ込みそうに

なる黒宮。男の体が少しづつリングにむかって倒れていく。

「させません」

それを麗美が蹴り上げた。下から上へ。サッカーボールでも蹴るような動きで男の顔を蹴り上げ、男の体を持ち上げる。

そこからは虐殺だ。麗美の蹴りがこれまでの動きがおままごとのように思える迫力で男の体に突き刺さっていく。

ゴゴオッ！ バギイ！ ベッギイイ！

「ひい、ひゃあ、アアアッ」

火だるま。

機関銃の銃弾を連続して浴びたみたいになる男の体が滑稽なダンスを踊り始める。

決して自分の意思で動いているのではない操り人形。麗美の蹴りが男の体を見じめ

に暴れさせ、しかも地面に倒れることも許さない。変幻自在に軌道を変える大迫力の麗美の蹴りが、男を次第にボロ雑巾のように変えていった。

「シッ！」

最後の一撃。

それがものの見事に男の顔面を捕らえ、そのまま吹っ飛んでいく。リングの四方にはりめぐらされたロープに体がバウンド。そのまま死刑執行人の前にと跳ね返されてしまう。

「とどめ」

ボッグウウン！

冷静な声と共に、麗美の膝蹴りが黒宮のみぞおちに突き刺さった。その長い脚が大迫力で男の胴体にめりこみ、男の体が宙に

浮かんで串刺しにされる。鍛え上げられた太ももの上に乗り上げる形になった男は、そのまま悲鳴すらあげることでもできずに悶絶し、そして、

「うっばおおおッ」

吐いた。

その胃の内容物をすべて吐き出すように盛大な吐瀉物をリングの上まき散らす。顔は真っ青になり、今も呼吸すらできない苦悶の中で、黒宮がゲボを吐き続けた。

「こっちを向け」

麗美の冷たい声。

彼女は吐き続ける黒宮の頭をわし掴みにすると、そのまま無慈悲に男の顔面めがけて膝蹴りをかました。直撃。鮮血が舞って、男の体が動かなくなる。気絶してしまった

のだ。黒宮が前のめりになりながらリングに倒れる。吐瀉物の中に顔面を突っ込み、ピクピクと痙攣している男の姿は、まるで長身女性の年下後輩にむかって土下座をしているように見えた。

「とつとと起きろ」

気絶した黒宮の体を踏みつけ始める麗美。その発達した下半身から放たれる一撃は強烈で、男の後頭部を容赦なく踏み潰している。何度目かできるようやく起きた黒宮を手早く処理し、あつという間に首4の字固めの格好になった。

「とりあえず墜ちろ」

冷たい女王の声。

彼女は容赦なく全力で黒宮の首を絞めた。彼女のアナコンダのような太ももが男の小

さな頭部に絡みつき、その発達した内側の筋肉で男の頸動脈を食欲に締めつけていた。

「カヒユウ——」

もはや悲鳴をあげることできない男は、麗美の発達した下半身に手をやって暴れ始める。意識を奪われる恐怖。死への恐れが男の必死の抵抗を生み出すのだが、麗美は表情一つ変えずに封殺した。そのままぎゅううううと締め上げると、あつという間に黒宮が墜ちた。早くも二度目の気絶だった。

「起きろ」

端的な命令。

麗美が白目をむいてイビキをかいている男の頭めがけて拳骨を振り下ろしていく。ゴツンゴツンと聞いているだけで痛い音が

何度か響き、再び男が目をさました。

「どういう状況か分かってますか、黒宮セ
ンパイ」

首4の字固めをかけたまままで麗美が言っ
た。

「センパイは打撃技でまったく歯が立たな
いまま膝蹴りで気絶しました。格闘技の試
合でも打撃技で気絶するって、実力差があっ
てもほとんどないんですよ？ しかも、そ
の後、センパイはこうやって首4の字固め
でまたあつという間に気絶したんです。そ
して、これから3度目の気絶をむかえます」
淡々と事実を伝えていく麗美だった。

彼女は怯えた表情を浮かべた男を見下ろ
しながら、ゆっくりと力をこめてやった。
さきほどのように頸動脈を絞めることはせ

ず、気道だけを締め付けて呼吸をできなく
させる。発達した麗美の太もも。気道を絞
めながら男の頭蓋骨も締め上げている。年
下後輩の長身美女の太ももの中で、気道と
頭蓋骨に与えられる激痛に、男が情けない
悲鳴をもらす。

「た、たしゅけてえッ」

声にならない言葉を吐き出し、男が狂っ
たように麗美の太ももを叩き始めた。

それは攻撃のためではなかった。その弱々
しさを見ればそれは明らかだ。控え目に、そ
れでいて意思がきっちり伝わるように、
心をこめてタップしている。ギブアップの
意思表示。自分の負けですと宣言する命乞
い。しかし、麗美はそれをまったく無視し
て、締め付けの力をあげた。

「ひっぎいいいいッ！」

面白いように男の体が痙攣し白目をむく。

その情けない様子にリング下の女子部員からは爆笑の声があがるのだが、麗美はあくまでも冷静だった。

「ギブアップなんて許すわけじゃないじゃないですか。これはデスマッチなんですよ？」

私の許しがない限り、お前がどんなにタツプしても試合は終わりません。永遠に、このままお前が死ぬまで、わたしの太ももで絞めつけて失神させることも可能です」

ぎゅううううッ！

麗美の締め付けがさらに増す。それだけで男は情けない表情を浮かべながら悶絶し、麗美の太ももの中で悲鳴をあげ、命乞いを続けていた。

BL学園では従えていた少女に、文字通りボコボコにされる。力でだったら勝てると思っていたのに、正反対になすすべもなく殺されかけている自分。それはどれほどの屈辱なのだろうか。

「ん、墜ちましたね」

麗美がなんでもないように言った。

「格闘技も練習したわたしに勝てるわけがないんです。お前みたいな力でなら女に勝てる勘違いしている奴を見るとボコボコにしたくなります。BL学園時代にしてくれたように、今度はわたしがお前の尊厳を徹底的に奪ってやりますからね」

冷徹な処刑機械がさらなる締め付けでもって男を起こす。

そして、連続した失神地獄が始まった。

こんなにも何度も気絶をしたら普通は死んでしまう。

人を殺してしまうかもしれない。

そんな恐怖を麗美は1ミリグラムだって所持していなかった。そうなっても構わないという残酷さと本気さが麗美にはあった。それが分かっているからこそ、黒宮は恥も外聞もなく必死に命乞いを続けていた。声がなくても、締め付けが弱まることなく、男の必死のタップは続いていった。「ゆるめてくだひゃい。おねがいします。麗美様。たしゆけてくだひゃい」

試合開始から1時間。

さんざんに虐め抜かれ、ボロ雑巾にされた男が土下座をしていた。命令もされていないのに、年下後輩の長身女性にむかって

心の底から土下座をして命乞いしている。

「……………」

それを麗美が冷たい瞳で見下ろしていた。仁王立ちのまま腕を組み、自分の足下で命乞いをしている情けない生物を冷徹に観察している。少しでも粗相があれば続きをしないとった様子で、それが分かっている黒宮はガクガクと震えながら少女の慈悲を希望するしかなかった。

「分かりました。もう暴力はやめてあげます」

麗美が言った。

しかし、彼女の発言はさらなる地獄の幕開けにすぎなかった。

「次はお前のアナルを犯します。ほら、見えますか。わたしの長い指」

麗美が人差し指と中指をピンと長く立てて重ねた状態にした。それを土下座している黒宮の眼前に突き出す。

「今からこれで犯す」

事実だけを伝える冷酷さで麗美が言った。

「この長い指でお前のアナルが壊れるまで犯します。これに耐えられたら終わりにしてあげましょう。もし耐えられずにメスイキしたら……わかりますよね？」

「たしゆけてえええ……もう刃向かいません……これまでのことも謝罪しましゆから……命だけはゆるしてくださいひゃいひゃい」

「それではいきます」

いやああああと泣き叫ぶ黒宮を無視して、麗美の長い指が男のアナルに突き刺さった。

すぐにピストンが開始される。男のアナルに少女の長い指が出し入れされていく。

「ひゃああああッ！」

甘い声。

これまでの暴力であげていた断末魔と違った悲鳴だった。それはアナルを責められてあげているものだ。麗美のアナル責めに、黒宮がたまらず白目をむいた。

「他愛もない。お前の前立腺、ここだろ？」

クリクリクリッ！

麗美の指が動き。それだけで男が痙攣した。前立腺をたくみにいじられ、「オッホオオオン」という獣じみた声があがる。それを聞いた麗美が「ふっ」と鼻で笑って、すぐにその周辺だけを徹底的に犯し始めた。「純菜先輩直伝のアナル責めです。わたし、

格闘技よりもこちらのほうが得意なんです。

お前ごときじゃ、耐えることなんてできない。とつととメスイキしなさい」

「オツホオオオン！ ひゅツフォオオオンッ！」

「ほら、イけ」

「アツヒイイインンッ！」

クリクリと動かされた麗美の指によって、黒宮はあっけなく絶頂した。

圧倒的なメスイキ。体が弓ぞりになり、そのまま意識を手放すほどの絶頂。白目をむき、口からはブクブクと泡をふきながら、黒宮は失神KOされてしまった。

＊

「ほら、とつとと起きろよ」

麗美が往復ビンタで黒宮を起こす。

意識を取り戻した男は麗美の姿を見て滑稽に怯えた。もはや強気な男の姿なんて見る影もなかった。今では麗美の姿や匂いをかぐだけで小便をもらしてしまふほどの情けない男に変わっている。

「次はベニバンで犯す」

気絶している間に装着した疑似一物を見せつける麗美。デスマッチルルでは道具の使用も許されるのだ。その黒光りした大きな一物を見て、黒宮がサアッと顔を青ざめた。

「ほら、舐めて奉仕しろ」

男の口元に差し出された一物。その大迫力を前にして男はいよいよやをして、顔を左

右に振りながら命乞いをするしかない。

「なに、まだそんな態度なの？」

もはや家畜を見る目で麗美が言った。そこには先輩男子に対する尊敬の気持ちなどみじんもなかった。

「ひよっとしてまだ足りなかった？ まだ蹴りたいのか、お前」

ドスンと逞しい下半身がリングを踏み潰す。それだけで男は震えあがった。

「それとも、こっちがまだ足りなかったか？」

麗美が長い指をピンと立てて見せる。さきほどまでさんざんにアナルを虐めぬいてきたソレを見ただけで男は「ひい」と悲鳴をもらした。

「どうするんだよ、おい。わたしはどっちでもいいんだよ？」

「わああああッ」

半狂乱になった男がベニバンをくわえた。そのまま、涙目になりながらフェラ奉仕を続ける。今から自分のアナルを犯すであろう一物に対して、必死のご奉仕。少しでも優しくしてもらうために滑稽にがんばってフェラを続ける。

「へたくそ。もっとくわえろよ」

容赦のない麗美が男の髪の毛をわし掴みにして、のどチンコの奥まで一物を突き刺す。異物の感触と嘔吐感に白目になりかけた男を叱責するように、1回2回と乱暴なピストンが繰り返されるに至って、ようやく男は許された。

「ほら、ケツをこっちにあげろ」

命令。年下後輩の命令に男は従うしかない

い。男はまるで男性娼婦のように、四つん這いになって尻を麗美に差し出した。少しでも優しくしてもらうための必死の努力。もはや黒宮の心はバキバキに折られて、再起不能になってしまったようだった。

「よし。それじゃあ、バックで犯す。お前がBL学園でやってみたいにするからな」
「ゆるしてください。もう……お願いですう……なんでも言うことききますから、もう許してくださいシャッギイイッ！」

麗美が黒宮の命乞いを最後まで聞かずにベニパンを勢いよく男の尻穴に突き入れた。そのまま、勢いよくピストンが始まる。それは堂々とした大迫力の腰使いだった。

「オッホオオンッ」
麗美は腰使いだけで男をメスイキさせて

いった。

ほかの男子部員よりもうまい腰使い。乱暴に犯したかと思うと、ねっとりとした動きでもって優しく前立腺だけを責め続ける。

男の背中と尻をなで回して快感を増幅させ、最後の一瞬を見計らってベニパンを根本まで突き入れて悶絶させる。その技術はかなりのもので、女のような裏返った悲鳴がリング上に響き続けた。

「アハハっ。いい声。ほら、もっとだよもっと。もっといい声で鳴け」

次第に麗美の顔も赤く上気し始めた。興奮しているのだ。

長身女性がその体格をいかして男のアナルを犯し、興奮している。夢中になった麗美が極上の腰使いで黒宮を犯し続けていく。

「お前の顔、みんなにも見てもらおうな」

そう言って麗美が男をファックしたまま立ち上がってしまった。逆駅弁。黒宮のとりけきってグチャグチャになった顔が、リング下の俺たちにむかって展示される。

「ここだろ、お前の一働きもちいところ。もう完全攻略したから、お前、もう私に一生勝てないよ」

パンパンパンッ！

逆駅弁状態で麗美が腰を振った。

「アヒイイインンッ」

それだけで男は白目をむいて悶絶した。

麗美が獰猛な女豹となって笑う。

「アハハッ！ いい悲鳴。BL学園ではさんざんいたぶってくれたけど、立場が逆転しちゃったね。これからは私がお前を支配

する番。ほかの女子部員たちと一緒にお前のこと使ってやるから覚悟しろよ」

乱暴な言葉を男の耳元で囁きながら、強烈な腰使いでもって男を虐め抜いていく。麗美の恨みは溜まりに溜まっていたようで、彼女はいつまでも黒宮のことを許すことはなかった。

＊

リングの上。

そこには女子部員たちの姿があった。おっぱいの大きな彼女たちが散々にいたぶられて気絶している男を見下ろしている。

壊された黒宮。

今もピクピクと痙攣しているその男はひ

どい有り様で、見ているだけで可哀想になつてくるほどだった。顔は変形して、アナルはズタズタになり、体には絞められた跡が赤黒く内出血している。

「ねえねえ、こいつも家畜ってことでもいいんですよね」

絵美が言った。その顔にはサディストの笑顔が浮かんでいた。

「姫華と麗美だけずるいもん。わたしたちにも使わせてください。いいですよね」

ふふふつと女子部員たちが笑っている。男の処遇をどうするか、強者である彼女

たちが決めるのだ。女狩人たちが、捕らえた獲物をどうするか相談している。

「うん。こいつも家畜にしよう」
純菜が言った。

美しい女狩人たちのリーダーが男の運命を残酷に決めてしまう。

「藤山元副部長たちも限界だからね。こいつをうまく使いながら、格闘技の練習も続けようか」

「確かに、あいつら最近ちょっと壊れてきてますもんね」

「言えてる。藤山なんて、最近頭バグっちゃって、何言ってるのか分からない時あるもん。ちょっと墜とし過ぎたのかも」

「みんな容赦ないもんね。この前も空っぽになつてるのにメスイキさせ続けてさ。1秒ごとにメスイキ失神と覚醒で忙しくつて笑えたよね。あいつが必死に命乞いしてくるのが笑えて動画とっちゃったよ」
笑っている。

美しい少女たちがズタバロになった男を取り囲んで笑っている。

「純菜先輩。部員以外なら家畜化して練習台にしてもいいんツスよね？」

姫華がニンマリと笑って言った。

それに対して、純菜が「うん」と頷いて、「そうだね。さすがに部員にはやめてあげて欲しいけど、こういう身のほど知らずの部外者は徹底的に壊して家畜化しちゃおうね」

「楽しみツスね。そうだ。純菜先輩が再起不能にしたBL学園の榎本とか、狙い目なんじゃないツスか？ あいつも家畜にして練習台にしちゃいましょうよ」

「あ、わたし連絡先知ってます。ほかのBL学園の男子にも声かけることができます」

「さすが麗美ツス。手当たり次第声かけて、わたしたちで壊しちゃいましょう」

「でも現役選手は止めてあげてね。もうバトルファックを引退する人に限定して壊そうね」

はい。

そんな可愛らしい声で残酷な話し合いを続ける女子部員たち。

リング下の男子部員たちはガクガクと震えながらその会話を聞いているしかなかった。下手に抗議しようものなら、どうなるか分からない。今は部員には手を出してこないあの女豹たちだが、自分たちに逆らう男子部員には容赦しないことはこれまでの練習でも明らかだった。

ひょっとしたら壊されてしまうかもしれない

ない。

目の前の黒宮と同じように、完全に壊され、人間としての尊厳を奪われ、家畜に変えられてしまう。

そんな非現実的なことも彼女たちなら可能だった。どこまでも残酷なサディストたち。女子部員が本気になれば、人数で倍近い男子部員を一瞬で制圧して、あっという間に家畜化してしまうだろう。

だからこそ、俺たちはなんの言葉も挟むことができなかった。リングの下で俺たちはぶるぶると震え続けていた。